折しも、濡れて輝く紅葉の落ち來りければ、

錦なす木の下蔭に來て見れば、
　露にぬれつつ散る紅葉かな。

つれ行きし車夫の一枝をり來りて、さも誇りがに、車にさしつるもをかし。ここを立ちしは、午後四時頃なり。家につきて、思のままをつづりぬ。

戀の隱者

嗚呼、三井寺三千坊、これ同じ天台宗の比叡山に對抗して、いで來りしもの。今や、その敵者の衰微と等しく、殆ど見るかげもなくなりたり。高觀音のふもとよりして、長等山腹一面に、並み立てる寺院は、その跡の尋ぬべきなく、たまたま、朽ち果てたる門ばかり殘るがあれど、さて何院にして、何人の住せしかを窮むべからず。森林深きところ、宏大なる圓滿院あり。管長のいますところなれど、一時は滋賀縣廳の事務を執るにまかしたりき。如何に全山を維持し行くか知らずと雖も、高觀音並に三井寺本堂にあがる賽錢の外には、辨慶の鈎鐘を以て、第一の寶と爲すものの如し。秋宵、撞き出だす鐘の音の、湖上を渡つて、皓々たる月にひびき行く頃ほひには、その身ならぬ吾れらと雖ども、胸に憂ひの雲を浮べずと云はんや。

われ、人の爲めに案内者たらんか。先づ長等神社の鳥居を入り、右なる石段に達す。石段は厄年の數に合はして、三段に折れ、一段を登る毎に、湖水の表面に出づるなり。のぼり詰むれば、本堂あり。それより更らに登れば、十年戰爭の記念碑の建てるあり。本堂の左を下り行き、圓滿院の表を過ぎ、五六丁を歩めば、金堂あり。その前に三個の石燈籠の菱形に並び立てるは、その時代の古きを證するに足る。中央の下には、天智天皇の紅さし指を葬りある由。辨慶の鈎鐘は、その右手にあり。かたわらに一家を構へて、『辨慶の力餅』を賣る者あり。若し三井寺の正門より入らんと欲せば、疏水のほとりに添ひて登り來るべし。

鈎鐘と三重塔の建てる間に小徑あり。之をのぼること數丁の奥に、善法院といふがありて、庭小なれども、いと清潔にして、紅葉甚だよろしきところなり。わが友、一日之を見に行きしが、初めてなれば、その所在を知らず。手前なる一寺の門に入りて、之を尋ねんとせしに、寺の如きものもなし。ただ竹を以て周圍をつづり、薄き藁をその上に葺ける小屋のみありて、一老翁の住めるを見、院名を呼んで之に問へば、かれ白き口ひげをひねりつつ、『もう少し上だ』と答へ、『ここも昔はよかつたが』とばかり、からからとうち笑へるさま、如何にも物凄かりしとて、走り出でたりと聽きつ。われ、次の日、ここに來れり。

善法院は、なかなか世を離れて、閑靜なるところなり。その番人の老人に就て、このあたりに、長

き白髯の生へたる翁の住み居らぬかと問へど、『その樣な人は知らず』と答ふ。われ念の爲め、その歸り途なる一門に入れば、果して一翁の燃木を折れるを見たり。煙草の火を借るまねして、之に近きつ。家といふ家にはあらねど、雨露を凌ぐに足る茅屋のうちには、大根をつける樽の如きもの、箱、古つづら、瀨戸物等をつみ重ねたり。竈も備り居れど、使用せしあとなし。一隅に、たたみ二疊敷程の床を張り、その上に寢床を敷きありて、いつも之をあげしことなきに似たり。跡にて人の話を聽くに、ゆきひらにて煑きし飯粒は、飯櫃の裏にこびり付けど、之を洗ふこともせずに、そのまま用ひ居る由。主人はこの頃リョウマチに罹り、起居不自由なる樣なれど、食事の支度などには、身づから出でて働らかざるを得ざる身なり。杖にすがりて、水を汲みに出づるなり。之と語るも、應答に苦しさうなり。『僧なりしや』と問へば、『然らず』と答ふ。『子ありや。』『無し。』

卷煙草數本を與へて、之を親み、その是までの來歷を聽かんとすれども、『別に云ふ程のことなし』といふのみ。五拾年前、山に入りしが、そは尙園城寺の盛なる時なり。今の營所のある所も、一面に寺つづきにて、彼が住する近所も、すべて建物存在し、今日の如く、寺門のみ殘るが如き、あはれなる有樣ではなかりしなり。彼が住所も、立派なる建物ありしが、持ち切れぬ爲めに、賣り拂ひしなり。彼はその以前より玆にあり、寺のうち破はされて、住職の他に去りし後は、この小屋を建てて住むこととなりしなり。種々の道具も、この時よりつみ重ねたままならんか。金堂の前なる、天智天皇べにさし指の話も、彼ならでは、世間之を知るもの少しといふ。性、植木を好むを以て、院のつぶれし跡には、多くの樹木を植ゑたり。見れば、寒梅あり、冬至梅あり。十一月の末つかた、花開き居れり。たまたま彼を知る者あれば、來たつて、之を買ひ行くもあり。

既に五拾年の月日を送つて、獨り玆に住ふ。故なしとせんや。問ひたださんとすれども、かれ差しとめて、云はず。

古老の話に依れば、昔、大津の町はづれ、名を尾花川と稱する所に、一人の青年あり。隣家の娘を戀して、遂に之と婚儀を結びしが、その儀式を擧げし翌朝、色うすらぎし月の光の、いまだ草の露を照らせる頃、おのが新婦はみどりの髮をふり亂して、裏庭の入口に立てるを見、何と思ひけん、家を立ち出でて、再び歸り來らずなれりと聽く。その年月を引き合はせても、この隱者は必らずかの青年なりと知らる。ただ何人も之をつきとめたるにあらず。さりとては、如何なる理由ありて、斯も世をすねたりけん。その小屋の入口に一首の歌を書きて——而も、かのかみ下げ虫を成敗するものの如く、さかしまに張りつけあり。いづれ婦人の浮薄を恨みて、三井寺の孤寂に安んずる心ならんか。その歌に曰く、

浮草の一葉なりとも、磯がくれ
　こころかくるな、沖津白浪。

砂防工事を觀る

十月二十六日、友人數名と共に、三上山の砂防工事を觀に行けり。某技師、われらの案内者たり。午前八時、紺屋ケ關より汽船に乘り、一時間餘にして、赤の井といふところに着し、それより徒歩、殆ど二里、三上村に至る。

御上神社は天之御影命を祭るところなり。此神社に關する古事記的考證は、種々これありと雖ども、管々しければ、ここに省きつ。技師の熱心なる説明により、現今建て直しつつある神社の圖を見て、今日の建築法と異なる、レヂアスシステムと稱する法式あるを知れり。幾多の榱、家の棟木より、光線の發射する如く出でて、その形づくる家根は、重き鎖を引ける如く傾斜するなり。樓門に、桝形の相重なり、その食ひ合ふところも、別の材を使はずして、同じ木を刻むなり。搏風も亦、古き模形なりといふ。比叡山、淨土院のあたりにも、之と同じ古風の搏風を有する建物ありしと覺ゆ。この神社を崩せし時出でし、棟木を支ふる樞に、弘安二年何月何日と記しあり。本殿の石燈籠には、建武の年號を刻せり。この建築物の古きこと、推して知るべし。この度の改築にも、全く元の法式に從ひて爲す由なり。

このあたりの小學校に憩ひて、中食をすませ、それより三上山の西をめぐりて、目的地に向ふ。大山川の川上に至れば、その水源を去ること遠からざるところに於て、土手を築き、幅五六拾間の流をせき止め、水はよどみて一大池をなせり。故は、このあたりの山々、草木殆ど無く、爲めに水氣を含まざる岩石は、崩るるがままにまかし、雨につれ、風につけ、土砂を流すこと甚しきを以てなり。見渡せば、一面の砂原、茫漠たる海濱に似て、數へつくせぬ眞砂地は、山々の頂までも連なれり。砲兵の演習には、大に適當なるを以て、伏見より來ること、ままこれありといふ。

近江の地、いにしへ天台宗の寺領多く、叡山に於て金錢の入用を感ずる度毎に、その領内の樹木を亂伐し、終にはところどころに生へ殘るをも、そのままにはして置かぬ有樣に立ち至りしなり。この處を菩提寺といふを見ても、その昔、思ひやらるるなり。

世に『ハゲ山』といひ、『兀々たる山巔』など、形容することあれど、かかる狀態は、想像にだも思ひ浮ぶること能はざらん。而してその結果たるや、大雨に會へば、水、勿ち下流の田地にあふれ、人その住所を失ふに至るなり。われ先づ之に驚いて、この一小沙漠を横ぎりしが、之より尙慘憺たるところありと、技師の云ふに導かれ、一ト谷越えて、家の棟川の水源に出づ。この川、土砂を流すこと最も甚しく、下流なる祇王の隧道を掘りし時、地下二十五尺のところより、寛永通寶を出せしを見ても、僅々二百四五拾年の間に、その川床、二丈有半を高めしなり。ここも亦、山と砂原との限界を失ひ、一滴の水をも見るべからざれども、小松ところどころに生へて、あらき濱べの荻に似たり。明治

二三年頃には、この原、全く樹木のかげをうつさず、その一方より他方を見渡し得る程なりしが、十八年、伐木を禁じてより、漸くこれ丈の短き樹木を得るに至りしとか。

樹木も平地には生じ易けれど、はげ盡したる山巓、而もみかげ石の雨露に融化し、ぼろぼろと崩れ來るところには、到底尋常の手段にて植ゑつけらるるものにあらず。即ち山面を刻みて、段階をつくり、一段毎に先づ、芝草を以て之を疊み、時期を見て木を植ゑつくるなり。始めは直に松を以てせしかど、その地質肥料を含まざる爲め、三四年目よりその勢力を失ひ、ただひよろひよろと延び行くばかりなるを發見し、近頃は、榿の木を以て之に更へたり。此木は近江の特産にて、如何に荒蕪の地なりとも、成長至つて速きものなれば、その落葉に朽ちて、地を肥すを待ち、松を植るをよしとす。榿の木を俗に『ハゲシバリ』といふ。之を以て山のハゲルをとどむればなり。

この工事たる、實に遠大の事業なり。明治十六七年頃より始り、今後幾年を經て成功すべきか、豫め知るべからざるなり。その範圍に於ても、以上二ケ處の外に、大度川、日野川、犬上川、愛知川、の支流等、十指を以て數ふべからず。之が爲めに費すところ、毎年四五萬圓にのぼらんとす。且、死傷者を出すこと、年に五六拾名ありといふ。

劍ケ峰と稱するところを望めば、全山恰も米穀を積み上げたるが如く、仰いで高しと雖ども、一本の見るべきなし。風に碎け、雨に流れ。谷々皆露出して、登るに道なきを如何にせん。慣れたる工夫は、土を削りて、人の足場ばかりを、山より山の脊につらぬることありと雖ども、ここに至つては、如何とも手のつけ所なかるべし。よし、いづれよりか傳ひ行きて、その頂上に立つとも、雨足の下なる土、次第に崩れ落ちて、その立ち場を定むること難し。一工夫の大膽なるが、曾て之に登りしも、その足左右にすべりて、土と共にささふること能はず。山の脊に馬のりになりしまま、動き得ざりしことありといふ。

かかる危險の境にも、幾多の同胞は小屋を構へ、終日營々として、その業をつづけ居るなり。崩づるるを刻み、刻むを平らげ、段又段、榿の木、松の木の並み立てるを望めば、無人の山上に、青々なる稻田を耕しあるに似たり。嗚呼これ何の爲ぞや。人力を以て山林を造り、手足に依つて大洪水を防がんとするなり。自然に對する人智も亦盛なるかな。

歸途、再び家の棟川に下り、砂原を傳ひて、妙光寺山の東北に出づ。土俗、三上山を雄山と稱し、この山を雌山と呼ぶ。共に古來の社林なりしを以て、伐木を禁ぜられ、ここばかりは、寒中にも、雪のところもを着ることなし。叡山と相對して、湖の東西に於ける、禁伐林の名殘なりとす。

野州より汽車に乘り、祇王の隧道を過ぐる頃、益々わが砂防工事の記憶を深くしたり。

月夜石山に遊ぶ

三十二年十一月、地球流星の軌道を通過する頃、恰も好し、滿月の夜なり。舟を湖上に浮べて、赤壁の昔を思ふこと頻りなり。青空一點の雲をとどめず、團々たる月は、夜霧の上に浮んで、東方の水天殆どその際限を辨ぜず。空光斜に横つて、羅綾の流幡を織り爲すところ、一條の黒線を劃して、延長數十丈に渡れる觚は、恰もわが極樂淨土に達する階梯かと疑はる。客未だ言葉を發せず、鐵車の汽笛遠く西山を掠めて、一層清淨を傳へぬ。

たまたま、わが雇ひし船頭の、勢多に歸るものなるを知り、直に艦艇を轉じて、勢多川に向ふ。一葉の輕き、滈々たる流光を下ることすみやかなり。唐橋を過ぐる時、演習中の一騎兵、蹄の音高くその上を進み行くを見る。即ち、そのかみ、武士の、徹夜、たむろする有樣も思ひ出されて。

騎馬武者の手綱ひかゆる橋の月。

石山のふもとに達するや、舟をそのほとりに繫ぎ置きて、山門を入る。われここに來ること數回に及べども、未だ曾てこの遊を爲さざるなり。天狗のかうがうとして直立繁茂せる傍の石梯を上り、本堂なる紫式部の室前に出で、三十八社、經藏等を過ぎて、寶塔のところに至るや、半ば過ぎたる一株の楓樹、枝を延ばして、相重なること段又段、月光を受けて、白きこと櫻花の如し。

月見亭は名のみにて、眞の客ある時、留守なるもをかしからずや。即ち、片よせたる床机を起して、暫くここに古人の愛せし風景を樂む。霜氣寒からざるに非らず。而も模糊としてかすかにその頭角を現ずる、三上山と相對して、冷中一種の溫暖を得たり、いにしへ去來、丈草の徒、ここに來つて俳諧の眞意を談ぜしことあり。われまた誰と共にか風流を語らん、四隣かげ寂しくして、心中また邪念の往復をとどむるを感じ、林間の鐘樓に下り行いて、暗中に垂下せる綱を探り、一つき撞いて之を放てば、その聲空輪を引いて明鐘のあなりに響き行くを覺へぬ。嗚呼、當年の源氏作者、今いづくに在る。歳月匆々、人老い易し。蕉門弟子が『風流の奴』といふもの、豈、故なしとせんや。詩人別に一天地なかるべからざるなり。

歸途、一句を案じて、以て紫式部が靈を慰む。曰く、

月のうちにありと申さん源氏の間。

竹生島詣

（ことはわが妻の作なり）

わが住ひは琵琶湖畔にありて、月の澄む夜、二階より眺むる景最もよろし。つれづれの物語に、竹生島の月こそ見ものなれ、行かずやと、良人の云はるるに、もとより月花を好む身とて、いとよろこび、明日行かんと答へぬ。何となう心うれしく、その夜をいねがてに明しけり。朝まだきより、支度を整ふるなど、小供もつ身のなかなかにせわし。大津より、竹生島まで、十七里半ありとぞ聽く。車

を馳せて、太湖汽船會社に至り、船にうつりぬ。

日は西に沒し、點火の頃、漸く竹生島に達す。夫婦の道者も同行なりし。二丈餘の石段を登り、傍の一寺を訪ひけるに、一人の僧いで來る。之に伴はれて、一室に入り、湖上に眺めて、湧き出づる念は、俗を離れて潔くなりたり。竹生島を見てものせしあり。

いつの世に浮び出でけん竹生島、
　住みぬる人を心して見ん。

折しも鐘を聽きて、

めぐる世の秋は寂しきものなるに、
　いとど身にしむ入相のかね。

やがて茶を出し、夕飯をもちいづる、皆、僧なり。又この人々のことを思ひて、

墨染の袖にあはれを忍びつつ、
　浮世を清くすむぞゆかしき。

しばし休みて後、月のよく見ゆるところを尋ねしに、なほ二丈あまり高き堂こそよけれと答ふ。さらばとて、伴はれ、巳月館に登りぬ。

建物、前のより立派に、飾りの品も見るものあり。一層こころ落ちつきけり。昨夜はもの忙しきちまたにありて、今宵は斯るところに來る。人生の變化も亦、かくやあらんかと思ひつづく。一僧又來りて、茶菓を饗す。よも山の話に時をうつし、十時となりぬ。僧辭し去りて後、恰も月よろしからんと、そのいづる方の窓をひらきしに、生憎、空少しく曇りて、樂に樂みし月は見えず。實に心殘りにこそ。玆に思をもらして、

竹生島、月は今宵と來しものを、
　つれなくかげを隱す浮雲。

短きねむりに目覺むれば、早や夜明けんとして、僧のつとめをなす聲きこゆ。

御法をばたたゆる聲に目さむれば、
　ほのぼの明くるあかつきの空。

食事をすまして後、直に、いや高き處をも見ばやと、登ることまた二丈餘にして、辨財天あり。西國三拾番の札所、嚴金山、寶珠寶嚴寺の本尊なり。少しく降り、觀音堂あり。又降りて、海に突き出づるところ、都久夫須麻神社の拜殿あり。そこの水際に立てる岩の上に、聖武天皇供養の塔あり。玆にて湖上を眺めしに、見ゆるものは水と山、磯ゆるものは岸うつ波の音のみ。何となく、こころ細し。ここにて、また、

竹生島、高きに登り、眺むれば、

岸うつ波の音のみぞする。

此島は、昔、數十箇寺ありしが、減じて十五寺となり、また減じて、今は只きのふ見しばかり殘るとぞ。島は南の方に開らけ、入口には小き港様の風よけ場あり。周圍凡そ二十丁なり。全島に、樹木は多けれど、松は生えず。アカベといふ木、最も盛に茂り居るなり。夏は南風、冬は北風を常とする由。鳥類は別に異なるものなく、川せみ、烏、鵜の鳥等を見受けたり。

もと來し路をたどり、宿りし館に歸る。汽船の來たるまでには、時いまだあれば、島めぐりせんと、船頭を呼び、風如何にと問ひしに、よろしと答へぬ。さらばとて、直に小船にて乘りいづれは、風なかなかありて、波の舟をうつこと甚し。島の西に、役の行者が百日の業を積みし岩屋あり。至るところ、倒り立てたる如き岩ばかりにて、舟を漕ぎよするところもなし。屏風岩、八丈岩、神酒岩、大黑岩、小島等を見る。進む程、波おそろしく、身も倒れん程なり。おそろしと思へる心を。

竹生島めぐる小舟にうち寄する、

波はわが身をくだくとぞ思ふ。

舟に居ること、大凡三十分間。一めぐりして、汽船の來るを待つ。間もなく來りければ、のりうつりぬ。此島は、殆ど一家族とも見ゆる十四五人の住處にして、寺と堂とを見るのみ。從つて、住む人の心は、他に住む人の心に比すれば、清きかげの宿りなるべし。實に一つの靈地とぞ思ふ。

新平民部落

世には、路傍に立て食物を乞ふ、貧民あるを知つて、新平民なるものの大に憫むべき地位にあるを思はざる者多し。彼等と雖ども、單に肉を屠り、皮を剝ぐの動物には非らざるなり。吾人と同じく妻子あり、吾人と等く情愛を解し得る民なり。よし、その歴史に汚點あり、その職業に卑むべきところありとするも、之が爲めに、毫も、その始を異にせざる人類を疎んずるの要なし。況や明治四年以來、穢多非人等の稱を廢せしに於ておや。之を『ゑた』と賤め、『皮太』と貶し、甚しきに至つては、癩病患者と同視して、『かたゐ』と呼ぶ者あるは、何事ぞや。

社會が之を輕蔑疎外する習慣の久しき、彼等身づからも之を當然の事と思ひ、他と交際するを恐れて、之を避くるを常とし、たまたま人の家を訪ふも、主人の許可なくして、しきゐを越ゆることを爲さざる風あり。たとへば、大阪府下渡邊村の如き、富める者甚だ多く、本願寺の金倉と稱せられ、一家の佛檀にも、純金の彌陀像を飾るところありと云へど、身づから卑下退讓するは、他の諸部落と異なるなし。彼等の言語に一種のなまりありて、一見直に他の人々と區別し得るなり。たとへば、釣瓶をツルベと發音すること能はず、幾度教へても、ツブレとなる。教師、根盡きて、放言して曰く、渠等は人間以下の動物なりと。渠等身づからも亦、窃におのれを以て人外とあきらめ居ると雖ども、衰

面之を蔽はんとして、却てその愚を重ねることあり。或部落にては、ヒをシと發音す（これ、東京人に似たり）。然れども、渠等の子女に向つて、西方を指さし見よ。必らず答へて曰はん、ニヒなりと。東を指させば、すなはちヒガヒなりと。その甚しきに至つては、『貴樣の金玉はいくつありや』と問はれ、『矢張旦那方と同じように、一つあります』と答ふるなり。二個あるは、おのれ等のみにして、恥辱なればとて、之を隱くすつもりなり。嗚呼、これ卑下の極度にあらずや。これ皆、人類としての價値を敎へられず、敎へられざる爲めに、また之を知らざるに起因す。

われ思ふに、新平民部落、諸縣にこれありと雖ども、同族の標本とも云ふべきは、滋賀縣下の小櫻村と、南野村となり。此兩部落に住する者は、他の普通部落と異なりて、屠牛、革細工、セツタ直し等に從事せず。元來、一定の職業に堪へざるなり。遊惰、放恣、人に乞ひ、路に拾ふもの、尙恕すべし。一村擧つて、盜を爲なさざるなしといふに至つては、驚き且あやしまざるを得んや。

南野村は、全村の地價五千五百圓、その半は人家の建てるところ。この小地面に、戶數五百、人口二千八百あり。先づ、何故に斯くも大なる群集を見るに至りしや。これ吾人の注意すべき問題なり。狹隘なる地には、米穀を產すること少く。番小屋の如き家屋の、道もなく、順序もなく、相前後して立ちならべるうちには、男女の住するもの、甚だ多し。若し他の社會の無情なる壓迫なかりせば、彼等は決して、かかる窮窟なる天地に蹐蹐せざるべきか。おのが妻女も穢多と呼ばれ、おのが愛子も非人と斥けらる。滿腔の憤恨は、曾てその骨髓に徹せしことありと雖ども、因襲の久しき、相抱いて號泣する氣力も失せ、饑ゑては食らひ、渴ゑては飲むばかりにも。一村の供給、その需要を充す能はず。遊惰は性となりて、神聖なる勞働を厭ひ、生活の危機にのぞみて、始めて出でて、他村の捨て物を拾ひ、やがて人の隙を窺ふて、盜を爲すなり。

之に一定の職業を敎ふれば良きや。然り。嘗て南野に授產所を設け、簡單なる手仕事を覺えしめしことあり。然れども、彼等は組織的勞働の面倒なるを好まず、且その生活程度の低き、わらじ二三足を携へて市に出で、之を鬻ぎて數錢を得れば、それにて能く一日の食を滿すなり。又、若し他村の法事、婚禮等のある日には、その殘菜を乞ひ來り、ヒジキはヒジキ、昆布は昆布。それぞれ撰り分けて、おのが同志に賣り捌くといふ次第なれば、普通一般の考にては、到底如何とも爲し能はざらん。

速に敎育を盛にすべきか。然り。南野には、村民各一個のわらじを寄附し、その集金に依つて建設せし一寺院あり、正明寺といふ。その住職なる一若僧、敎師となりて、兒童を敎へ居れども、その者既に智識上の不具者なり。何ぞ他を導くに足らんや。小櫻村には、別に一小家屋の學校に使用せらるゝありと雖ども、先年、その卒業生の入るべき、高等小學の問題起り、その父兄等は、他村と同一の校舍に行かんことを主張せしかば、他村の人民擧つて之に反對し、折角敎育に注意し來るものに、一頓挫を來せしことあり。かかる人民の敎育に、趣味と主張とを有せざるもの、如何に奔走すとも、無益な

るべし。

宗教に至ては、最も手近く斯る人民に應用すべき者なりと思はる。かかる人民に限り、おのが身の世に疎んぜらるるを慰めん爲めか、神佛を信仰する念、浮薄輕躁の人士と比べて、割合に深きは、先に言へる渡邊村の狀態を見ても、推し得らるべく、又、生命となれるわらじの寄附に依つて出來せし、寺院あるを以て察するを得べし。小櫻、南野の兩村、共に本願寺派の寺院を有すれども、その格式低き爲めに、良僧、來るなきを恨みとす。大學の講師某、嘗て南野に來り、同村の事情を取り調らべて、一小冊子を作られしことあるが、その節の話に、救世軍の如き、特別なる傳道に依り、彼等の心靈を動かさば、或は成功するあらんかとあり。われもその說を讃し、その筋の人に勸めしこともあり。

職業は一定せず、教育は行はれず、宗教心ありと雖ども、之を導くものなし。而も世にありて、世と遠ざけられ、人の樂を見るも、之を分つ能はざるの悲境に在るもの、ひがみ根性を起すの結果、自暴自棄に落ち入り、遂に破廉耻となる、故なしとせんや。長濱附近に於て窃盜犯ありとせば、必らず手を小櫻村にまわし、十中八九は、そこに其犯人を捕へ得る有樣なれど、郡民巡査等、之に對すること、恰も下等動物をしかるが如き風あるは、甚だよろしからず。彼等も有情の人、情を以て之に接すれば、感ぜざるにあらず。或警官の之が救助に意ある者、彼等の部落に至れば、必らず彼等と共に酒を酌みかはし、彼等のおのが家に來るや、强て坐に延いて、之に酒を與へ、談笑の間、彼等も同じ人間つき合を爲すべきものなるを知らしめたるに、彼等は大に喜び、その隔意なきを謝し居りしとぞ。

南野には、各人をして每日一厘宛を醵集蓄積する法を定め、各人不時の變に備へしめたり。始は大に面倒なりしが、後には、身づから之を、その掛りの役場へ、持ち來るものあるに至りしといふ。之に依て見るも、救濟策の望、充分これあり。ただ忍耐と誠實とは、最要の資本なり。おもむろに職業を授くべし。着々、教育を施すべし。然れども、その最も急とすべきは、身を彼等の群に投じ、彼等と共に生活し、彼等の暗憺たる心中に、友愛の何者たるを知らしめ、人情の最も深きところを解せしめ、人として何を爲すべきかを敎ふること、是なり。

此根本的要領を提げて、此獻身的事業に當る者、只一人にてもあらば、彼等幾多の人靈や、實に幸福なるべきなり。萬事、此人によりて、始めて決せん。智あつて智を弄し、識あつて識に亡びんとする、現今一般の社會を濟度せんよりも、寧ろ、かかる偏境に於て、成功の容易き遺利を集めよ。別に博識多才の人を要せざるなり。われは青年宗教家に待つところ多し。

湖上の虹

十一月十一日、朝、起き出でて見れば、特に寒し。湖上を見渡せば、長き虹、いにしへの滋賀の都のあとに面ずる水面より立ちて、横ざまに長等の山を越えんとする勢あり。虹、山のふもとより立て

ば、その日は日和なれど、水よりなれば、今日は雨ならんと云ふものありき。果して九時前後より、少しく降り出しけるが、間もなく止みて好天氣となれり。その夕つかた、また虹あり、堅田のあたりに見ゆ。その幅甚だ廣くして、ただ水面近くにのみあらはれ、そのうちに白き蒸汽船の浮べるは、何とも云へぬ畫ごころなり。朝の場合にも、堅田と水濱との間より一隻、粟田郡山田がよひの一隻、外に帆かけ船の數々、北より、東より、虹のもとを目がけて、集り來らんとする有樣、如何にも自然のふところには、何か意味あるが如く覺えられつ。

その日、比良に降雪あり。翌朝に至り、雲の晴れ間より望めば、その全頂、眞白となり居るを見たり。

江州無名の勝地

八池の瀧は江州の一奇勝なり。一たび行て之を見ざるべからず。とは、わが友人の親切なる忠告なりき。一日閑を得て之に向ふ。比叡の山おろし早や寒くして、時は恰も秋の末つ方なり。大津より太湖汽船會社の船に乘り、勝野に至つて、一泊す。いにしへの香取浦は、卽ちこのあたりを云ひし由。大溝候の城跡近きにあり。

翌朝十時頃、雨少しく降り出せしにも拘らず、知己二人を伴ひて發足す。岳山を左に、富坂山を正面に見て、進むこと里餘。伊里村に至る。同村に、富坂山の大蛇を實見せし老女ありとは、一友の話なりき。山の麓を流るる鳴川は、卽ち八池の下流なれば、之に添ひてのぼること一時間餘にして、鹿が瀨といふ小村に達し、ここに案内者をやとふことを得たり。

右の山麓に黑谷と稱する一村落あり、左に岩じやり、穴尾の兩山を望みて進む。道漸く狹くして、森林の間に入り、傾斜の度いよいよいちじるしくなりぬ。歩は一歩より重く、息は息ごとに苦しくなるを覺へつ。或は茅茨の間を過ぎ、或は絶壁の中腹を横ぎり、溪流を渡り、巖石を越え、昇降幾回たるを知らず。胸中大に心臟の鼓動に堪へ難き頃は、直ぐわが前を進む案内者の兩足、殆どわが額と相接せんとす。

山徑のやや廣くなれる所に達したれば、ここに一服しつつ、四方を眺むるに、一大溪壑を隔てて、先きの岩じやり山、突兀としてわが眼前に聳え、全面恰も大鍬を以て掘り散らせしが如き姿を呈し、その山腹を離れて、かすかに浮べるものは、椀を伏せたるに似たる竹生島なり。この風景に力を得て、又足を運び出せしが、既にふとき棒を左右する心地したり。

暫くして、風にもあらず、とうとうとして耳に響き來たる聲あり。案内者叫んで曰く、『さア、來れり』と。一行ここに立ずみて、足下を見おろせば、枝葉枯落せる灌木の間より、青藍を湛ふるが如き一池の現はるるあり。之を魚どめの淵と云ふ。白絹を流すに似たる一瀑布の瀧壺なり。之よりうへへ

は生魚ののぼるを得ざるを以て、この名ありとぞ。われ寫眞機を携へ行きしかど、あまり深きが爲めに、之をうつし取る能はざりき。

抑も八池の瀧は、畑谷の上にありて、そのある所を八池山といふ。八池とは、瀧の幾段にも分れて落つるところ、八の淵を爲せるによりて名づけしなり。古來この淵の深さを知るものなしといひ傳ふ。各池の周圍は、石、苔を生じ、滑かなること天鵞絨の如し。全池はその源を比良山のつづきなる武奈が岳に發し、二十餘丁にして、この大小の瀧となるなり。最も低きにあるものを魚どめ淵とす。

それより樹木の間を屈曲して、のぼり行くに從ひ、一池は一池よりも高くして、その奇を呈することといよいよ多し。峻嶮なる大岩は、わが前後左右をかこみて、開けるところはただ天上界のみ。障子が淵、唐戸淵、を過ぎて、大摺鉢と名づくるところに至れば、太鼓の如き圓形を爲して、落ち來たる水は、池中を循環して容易に流れざる樣、恰も無形の大摺こぎを以て、之を摺りつつあるに似たり。

次に小摺鉢あり、長淵あり。絹が淵に至つては、その瀧の高さ二丈餘、岩石その左右より狹く突出し來つて、腰部は少しくねぢれ居るを觀る。尤もその瀧壺へは下ることを得ざるなり。われ案内者をして、レンズをさへぎる樹枝をすべて切り去らしめ、わづかに良好の立ち場を得て、絶壁の上より之を寫し得たり。七遍返しは最後の瀑布なり。前者に對して之を大瀧といふ。その高さ三四丈、直射一寸の曲線をとどめず。堂々天に鳴り、地を動ずるの慨あり。その中程の岩石には、古人の地藏尊を刻めるありと雖も、ちいさければ、案内者の指示により、漸くそれと見わくるを得しのみ。

ここに道きわまりて、進む能はざれども、若し迂回してその絶頂にいづれば、手桶岩あり。土人の言によれば、この岩に雲かかる時は、必らず雨ふるといふ。わが一行はここに至らずして、歸途につきぬ。寫眞に取りしは七遍返し、絹が淵、大摺鉢の三が所なり。いひ傳へによれば、嘗て百貫目程の大石、この池中に落ち來りしも、その水勢の盛んなる、難なく之を押し出せし由。或は然らん。その池底のぬるぬるとして滑かなる、何物もこの水力には抵抗し能はざるべし。

初めてこの奇勝を發見せしは梁川星巖なり。もとより幽谷無人の境にありて、世人の之を知るもの少しと雖も、二三年前より、京都の新聞紙の之を紹介すること瀕りなるを以て、夏になれば、同地のわかき畫家の三々伍々、隊を爲して來るものあるよし。冬は雪、その全溪に滿ちて、いのしし、その上を渡るに易しといふ。われはただその、避地にあるを惜むのみ。讀者若し叡山の僧侶に問はば、かれ必らず答へて云はん、『八池は則ち靈地なり』と。

歸途、案内者の話により、大溝にめぐらずして、直に小松に出づる路あるを知る。このところは大津よりの航路にあたり、大溝より一つ手前の船つき場なり。昨、船中より之を望み、はじめて、人の賞讃して、天の橋立に譬ふる小松崎なるを知り、閑を得ば、また來り遊ばんと思ひし所なれば、これを幸に、案内者と約を改め、同行二人と相わかれ、道を轉じて寒風峠に向ふ。岩じやり山のふもとを行

くなりけり。先きにわが一行が八池の山腹にいこへるところは、溪壑のあなたにかかりて、白く禿げたるは、早や雪のつもりしかと見ゆ。ぜんまい岩と稱する巉巖のほとりをのぼるに從ひ、わがうしろ遙かに、武奈が岳はその頭角を雨雲の間にあらはし、われをして風雨の難をのがれたるを喜ばしめぬ。

寒風峠を越ゆれば、また一の峠あり。俗に之をのぞきといふ。琵琶湖全面を眼下に見おろすを以て、この名あり。時ゆふぐれに近けれども、白色の月未だいづくを照らすともなく、遠く見ゆる比良、堅田の出崎は、延長、野州の出崎と相接せんとする勢あり。竹生島、多景島、沖の島等、大小の島嶼一々之を指摘するを得べし。小松の濱は彎曲、一小內湖を抱きて、われを呼ぶに似たり。

この山路は、夜に入りて、狼の出づることまま之あるにより、案內者は遲くならぬうちに防き遮ず約束なりければ、われひとり重き足を引いて峻坂を下ること速かなり。左の山に氣をつけて行かば、又一の瀧を見んとは、かれと別るる時承知したるところなれど、ただわが右にあたりて、涓々たる谷川の音を聞くのみ。或は岩が根を渡り、或は木の根をよぢ、滑べるが如く、走るが如く、つづら折を下ること數十分。ふみとどまつて、一息つけば、忽ち又とうとうの響、わが心耳に徹するあり。暫くにして、一條の瀑布、雙峯魏々たる間より、その頭部丈餘を現じたり。これ卽ち、摩耶山布引の瀧に譬へらるる山桃の瀧なり。

突出せる巖頭に立つて、之を熟視するに、幅三間もあらんかと思はるる水、數十條の小流に分、立板の如き斷崖を下る勢ひ、幾多の岩角に觸れて、關節をあらはすところ、恰もふときつららの九歡に直下するかと疑はる。その物すごきこと、云はん方なし。少しく恐怖の念をいだいて、峻坂を一回すれば、この瀧の高さ更らに丈餘を加へ、尙且その末を見ざるなり。再び下ること數十間、右方の谷川せまり來りて、瀧の末流を受くるところ、短き石橋をわたせるあり。われその上に來つて、屏風の如き岩かげをうかがはんとすれども、雜木深くして、足を入るるにところなし。見えざる水勢、山間に轟きて、そのしぶきのわが額を打つに驚き、雨かと疑はれて、天を仰げば、舊十月十一日の月、やや靑き光を放ち來る。ああ、われは山神の威に追はれて、夕暮の底に沈み行くの觀を生じたりき。

うす暗き松林の間を過ぎて、わがかうべをめぐらせば、瀧をさしはさめる水谷の兩峯、ただその絕頂を突き出して、われを嘲けるものの如し。進むに從つてたき木小屋あり、水車あり、ちいさき神社ありて、漸く人の聲に接せしころほひは、既に午後六時過。北小松村より道を轉じて、南に向へば、わがかげ法師短く地上にうつりて、わが行く先を導くに似たり。みちみち出會ふ人に就て之を聽けば、山桃の瀧とは、天文の頃、足利義輝・三條關白晴良と共にここに遊べる時、義輝の名づけしもの——則ち楊梅瀧にして、雄瀧雌瀧の二に分れ居れども、湖上に浮んで之を望めば、ただ一條の白布をかけたるにさも似たりといふ。

月光を踏んで進むこと里餘、南小松の村に至る。それより細き小徑に入り、殆ど二十丁にして、砂白くしてわが足にのぼる湖邊に出づ。則ち小松の濱なり。幅三四間、廣きところは七八間もあらん砂地は、陸地より引ける弓の如くその出でて、幾多の古松その上におひつらなれる間を過ぐる時、一個のともし火、戸外にもるる（漁家なりしならん）に近き、案内して一やすみせんと思ひしに、うちに聲ありて曰く、『わたし場ならば、もう少し先き。ここには蛇が住んで居り升。』おやぢ、晩酌の最中なりしならん。又數十歩を進ぶに、二三艘の小舟をつなげるところ、わたし場の休憩所あり。汽船の來たるには未だ早し。腰をやすめて、暫くここに一服す。

わたし守の注意を受けて、わがひたひをなで見れば、――豈謀らんや――われは山路の埃塵を看板にいただけるなりけり。今にして、はじめて、かの鹿が瀾の案内者がうがてるもの、わらじに非ずして、ぱたぱたとそのかかとを打つ草履なりしを思ひ出でぬ。即ち八池行の難を白狀し、清にいでて顏を洗ふ。鏡にあらねども、水、わが黑きかしらをうつして、底清きこと玉の如し。ああ、八池、楊梅の瀧、既にわれに足れり。圖らずもこの處に來つて、この良夜に會す。琵琶湖の靈、われに幸ひせずといはんや。

見よ、彎弓の形、引いて放たざるは、あながちにこの崎の兩端、陸地につらなれる故にはあらざらん。三十餘丁の間、われそのひねこびたる松の數を知らず。この古松、整然列を爲して、相並べる長濱に抱かれ、比良の高峯をさかしまに映ずる小內湖のあるを思ひ見れば、かの九世の戸の天の橋立に比すべからんか。かれに成相山あり、これに釋迦が岳ありと雖も、ただそのあまり高くして、この景にそはざるを恨みとす。わたし守のわかきは、ここを舞子須磨の濱べにたとふ。これ正面に浮べる沖の島を、わが故鄉なる淡路に見立ててのことなり。これわれにはなかなかなつかしき見立なりけり。然らば、かしこの漁夫の釣にかかる赤鯛、黑鯛の如きは、ここのえりや大網に入りてあがる、はすわだかの類にあたるべきか。夏の頃は、村人ここに出張し、この名物を料理して、來觀の客をたのしましむる由。

『なにと、こは、小松が谷の松風に、
　散りても、花はまた匂ひつつ。』

といふ歌は、慈鎭がこの近所にて作りしものなれど、われその意の何をうたへるものなるかを解するに苦む。

わが勇氣少しく快復するや、こたびは大に冷氣を感じ來りしが、さいはひに汽船清しければ、はしけに乘つて之にうつり、船中燈火のもとにありて、此記を作りぬ。

再び兒を失へる記

一月六日。長男諭鶴、舊臘より病氣のところ、昨夜來の樣子はなはだ氣づかはしければ、朝早く、別なる醫師某を招いて、診察を乞ひしに、既に助かる見込なしといふ。われも今朝、目を覺してより、そのおぼつかなきことの、あまり意外に急なりしを思ひたり。

はじめ公立病院の醫者に見せしに、氣管喘息との話なれば、息づかひは苦しげに見えても、生命に關することはなかるべしと、安心せり。これ十二月三十日三十一日頃のことなり。一日より二日、三日にかけて、少し心よき樣子も見え、且、醫者を呼びにやること數回に及べども、來らず。正月のことなればと、藥のみはつとめて飲ませ置きつ。その間、誰にも見せざりしが、手落なりしなり。病勢、氣管肢肺炎にうつり、いきづかひ甚しくなり、仰のきて臥せる腹部を見れば、大波の如く筋肉の上下するあり。動悸烈しきを以て、頭痛もするならんと、醫者のいふがままに、手拭を水に浸して、之を被ぶせやりたり。

某氏の注射と投藥とにより、晝頃再び尋ねられし時は、少しくよろしき樣になり、病院より三時頃見舞ひに來れる時も、左程には云はれざりしが、此時、前に喘息と斷ぜし口振を變じ、疫咳、即ち俗にいふ百日咳の氣味ありしが、氣管肢肺炎にうつりたりと稱するに至り、某氏のもれる藥に同意を表して、歸り去れり。

午後七時頃までも眠らずば、別に一服の藥を與へんとの約あり。一日一夜は殆ど睡眠せざるのみならず、夕方に至りても、尙その樣子なければ、行きて、之を貰ひ來り、兒に飲ませしかど、なかなかその結果見えず。ただ息づかひに勞れ行くばかりなり。とても醫者に見限らるるものならば、今一人、誰かに見て貰はんものと、下婢を以て、まだ別の某氏を呼びにやりたり。妻は昨夜來の看護に精神を勞し居れば、かたわらに眠らしめ、下婢には、その歸り足にて、若し兒の引き釣ることもあらばと、その用意に、醫者のすすめし芥子を求め來るを命じ、われは一人、兒の苦みてばたつく手足を、ゆるく押さへ、その口のかわくに從ひて、牛乳を以て之を浸しやりたり。十時頃には、妻、その息づかひの甚しきを聽いて、到底覺つかなしと明め、その苦を見兼ねるとて、近づかざりき。

また別の某氏は、留守なれば、歸り次第に行くとの返事なりしが、待てども、待てども、來らざるなり。われ、どうせ死なすならば、速にその苦みを取り去らせんと思ひ（今は全く藥の力にて、苦みを覺ゆるだけの感觸、殘り居るなり）、もとの某氏のもとへ立ち向ひしが、一二丁行きしところより、急に呼びもどされ、家に入れば、妻も下婢も兒の傍にあり。兒、『あ』と一こゑ唸りて、大なる口を開きしが、之が苦の最後となりて、十時四十分に息を引き取りたり。またの某氏來りし時は、既に遲かり。妻、その出づる魂を追ふが如く、『諭鶴、』『諭鶴』と聲を放ちぬ。あとは涙なりけり。

九ケ月の生命、短しと雖ども、止むを得ず。一體に弱かりしと見え、毎月醫藥を服せぬことはなき程にて、顏の色よろしからず。肥え居れど、筋肉のかたく發達するにはあらざりしと、人々は云へ

り。先に亡へる兒も、同じかりしなり。嗚呼、前日來、日ばたきもせず、人の顏を見つむるを、勢づきしならんと話合へるは、父母の慾目にて、全くおのが苦みを無言に訴ふる心なりけんものを。死後は、再び無邪氣の顏つきに復し、安らかに仰のけるままに、寐かし置きつ、明日を待て、大谷村字弓神谷の火葬場に送り、遺骨は東京に携へ行き、先の亡兒と相並べて、之を葬むることに定め、其他の手順は凡べて、二三の友人、之を引き受けて歸りぬ。われらは共に兒の室に眠りぬ。

七日。晴。起き出づれば、比良の山一面に、雪を以て白し。去年の冬、堅田の方に當つて、ふとき虹の立てるを認め、翌朝に至りて、同山に大雪降りしことを知りつ。今や再び、その朝晴れを見て、兒を失へる悲みあり。嗚呼、積むものは積めよ。消ゆるものは消えよ。無天の天、いづくにか增減あらん。

雪の一日

一月十七日の朝、起き出でて窓外を眺むれば、天濛々として雪ふりしきり、湖水の四方を辨ぜず。水邊を走れる鐵道線路を通過し行く一人のすがた、黑きがそれかと見ゆるばかりなり。ややをやみとなりて、旭日の光雲間を漏るるに至れば、三井寺のふもとより叡山の絕頂に照り輝きて、白絹のころもをかけ渡したるが如く皓々たり。晴れ行くに從つて、比良の山々、一夜に三千丈の白髮を生じたるに似て、一きは人目を引くの威嚴をあらはし、尙、北にしては、賤が嶽の別峯をはじめとし、伊吹の山脈、連綿として、はるかにこの銀世界の際限を圍むを見る。湖東のかたには、三上山ひとりみどりの頭角をそば立てて、いまだ老いざるの意氣を以て、水面を臨めるあり。わが市の背面、馬場の山に、逢坂山に、兎獵る人はさぞよろこびしなるべし。

われこの景色を炬燵のうちに見すごさんも惜むべしとし、また降り來たる中をつき進むに、けふの雪は恰も水氣を含まざるが如く、からからして、乾したる粉に似たり。その、道につもれる上を踏べ行けば、ざくざくと音して、ここち好きことといはんかたなし。風は吹き猛りて、蝙蝠傘その用を爲さず。午前九時、馬場ステーションより、上り列車に投ず。雪はいよいよ甚し。粟津の松原、石山のふもと、勢多の唐橋など、車中にうち眺めて八幡驛に達せしころほひには、左右一面の麥田、七八寸も積めりと思はれたり。野州より八幡にかけては、雪殊に多しとは、かねて聽つるところなり。

同驛にて下車し、午後一時頃、再び上りに乘りしが、この時、車長、一人の小供をつれ來たり、わが車中に投じて去る。小供は忽ちしくしくと泣き出だせり。同乘の男女、之をいぶかしみ、一齊に聲をそろへて、『如何にせしや。』『母と共なりや。』『いづくより來たりしぞ。』『年はいくつ。』と、その左右より問ひ慰むるに、力を得てか、兩手もて涙を拂ひ、すすりあげつつ答ふるを聽けば、年は十一、京都に奉公し居りしが、いやになり、丹波へ逃げ歸へるつもりにて、七條停車場より、この汽車に乘

りしなり。人々その心をあはれみ、役員に乞ひ、下り列車にのせて歸しくるるようかけ合ひ、再びこを出で行かしめつ。老人等は互ひにその可愛さを語り合ふあり。うしろの方にありし年若き婦人は、おのが肩かけの端を以て、ひとり涙をぬぐひ居たり。

乘客の近江八景物語は、ここに一轉して、さまざまの哀れなる小供の事にうつりしがうちに、最もわが耳底にのこりしものあり。靜岡に家を持てるらしき人の話なり。そは同じく十一歳になる子の、東京にもらわれ行きしが、三ケ月經つかたたぬに、一人して歸り來りしかば、如何にせしと尋ぬれば、鐵道線路をつたひ來りしと答へし由。而して夜は路傍の樹の下に寢ねしなり。子ごころにも、左程に父母の家は戀ひしきものにや。あはれ、あはれ。

われ彦根に下り、金龜城にのぼる。伊吹山、近くその全形をあらはせども、切り落したるが如き前額は隱れて、雪に線劃あるに似たり。四方の景、ただ皓々。一塊の汚物を點せず。その昔、當城の主人、かの櫻田門外に斬られしも、かかる時なるを思ひ出されたり。馬場に歸着せしは、たそがれ時なり。水の深きに薄絹を張れるが如き空に、明星ひとりその光を專らにし、停車場のうしろなる山は、灰色にぼけて、天色と相分つこと能はず。長等山上にかた寄れる黑雲の間より、ぱらぱらと吹かれ來る吹雪は、かたわらの柳の枝にあたりて、寒氣五體に染み渡るを覺へぬ。嗚呼、先きの小兒は如何にせしか。別れてより既に五年間。

天地の父や戀しき寒やなぎ。

雪の三井寺

一月二十六日、雪景色見んとて、三井寺に登る。夕暮時なり。昨夜よりの雪、五六寸、數十丈の階段に積み重なりて、本堂の正面に迫り、その庭前は、白色の布團を敷きつめたるが如く、堂の背後にあらはるる大樹には、時ならぬ綿花の咲き亂れたるあり。坂上の石燈籠は、恰も雪女郎の出で來るを待てるかの如く、物さびしげに二ツ相並べり。十年戰役の記念碑は直立し、高きが上にいや高く、列なれる〻宇の棟簷は、こよひ、こと更らに、その曲線を繪くこと明なり。月見堂の家根、その四端は自然にはね上りて、重き風鈴のかかること、いよいよ美なり。

斷崖の一隅に立て、わが眸子を放てば、湖上朦朧として水天を分たず。大津全市は、無聲の銀波輕くその上を蔽へる中に隱れて、戶々に點ずる瓦斯燈の光の見え透けるを臨めば、恰も南方龍宮の巷、釋迦如來の來向を仰ぎ奉るかと疑はる。清淨の氣、暮色に滿ちて、撞き出だす鐘の聲は、浮世の塵埃を拂ふに似たり。

一種幽妙なる想像に乘りて、寺を下れば、長等神社に參詣の一婦人、樹木の枝より落ち來る雪片をあびつつ、歩一歩に、足駄を踏みしむる音さくさく、神前に進み行くうしろ姿を見たり。如何なる癖

願のありてにや。鳥居を出でてふり返れば、既に見えず。日は暮れたるなり。歸途、一句を案じ得たり。

大雪や祈のをんな兒を負はず。

思の種

（妻の作なり）

わが身の都に住める頃、琵琶湖の如何に廣大なるかを聞き、八景の如何に美なるかを、思ひつづけしこと多年。幸にも緣ありて、大津の濱邊に來り住むこと、既に三とせ。春は湖邊の露につつまれ、夏は長等の山風に吹かれ、秋は明鏡の小舟と共に浮べるを見、冬は時ならぬ花の、湖上に散るを眺めぬ。されど此間、碌々として過せしことの、浮世とは云へ、われながらうたてきかな。今やここを去るにのぞみ、他日の語り草にもなれと、思ひの種を播き置かん。見る人、笑ひ給ふこと勿れ。

琵琶湖を見て。

琵琶のうみ、幾世かはらで、世の人の
心になみを吹き立つるらん。

春の頃を詠める。

いつのまに春は來にけん、きのふけふ、
霞にこもる近江富士が根。

夏の頃を詠める。

月かげの涼しく見ゆる水の上に、
螢の飛ぶぞうれしかりける。

秋の頃を詠める。

名にしおふ粟津が原の秋來れば、
身にしむ風の袖返へすなり。

冬の頃を詠める。

をちこちの山の松原見えぬまで、
ふり來る雪の寒くもあるかな。

石山の秋景色を見て。

さびしくも、紅葉ふみ分け來て見れば、
石山寺にひびく鐘の音。

袖の上に散り來る紅葉見るにつけ、

人のうへこそかなしかりけれ。

源氏の間を見て。

敷島の道ふみ分けて、石山に
こもりし、人のむかし忍ばん。

わが身を思ひて。

再びは來ぬ年月を、いたづらに、
過ぎしわが身の上ぞ悲しき。

二　出　版

われ、湖畔に住める間に、二出版を爲せり。一は『英和警察會話篇』なり。のち、その內部を取捨增減し、『公用會話』として、某書店より出でしもの。これ至て通俗なるものなれど、之を以て後の出版費用を得んと欲せしなり。某警部長の紹介に依り、豫約を全國各府縣に募り、いよいよ印刷に附せんとするや、京都の某書店より、金二百枚を以て之を讓り受けんと、掛け合ひ來りしが、それ以上の收入あるを見込みたれば、神戸に於て印刷し、わが名を以て豫約者に分配せり。さて、その集金上、各署の證明あれば、不都合の廉はなかりしも、時日大に遷延し、少しづつ入り來るものは、或は生活

の資に加へ、或は旅行の用に供し、最後の計算となり、意外の小額を殘すに至れり。

次に出でしは、卽ちわが新體詩集『露じも』なり。その出版に關しては、是までに、如何に苦心せしか、わが語り能はざるところ。或は人を賴み、或は身づから至り、諸處の書店に掛合ひしこともありたれど、その功なく、空しく藏すること數年。漸く自費出版の運びに至り、之を批評家並に知友に配布するを得しなり。時、夏の頃なれば、眞面目に讀み呉れしもの、少なからん。且、二三の書店に送りし分もあれど、その後、何の音沙汰もなし。之を京都の月郊子に語れば、子も亦おなじ運命に會ひ居る由、答へられたり。

われ、詩に由りて、衣食せんとする者にあらず。而も尙、この苦悶あり。世の文を弄するもの、心に信ずるところあつて、而して後、立たずんば、必らず失望落膽の境に落入ることあるべし。愼めや、青年文士。

僧に贈る

世は　悲み　の　海　なれど、
君、かへり見る　ことなき　や。
人は　憂ひ　に　沈めども、

君は　高きに　います　なり。
ああ、いや高き　御山　には、
常磐の木々　の　森　深く、
湧き來る　水　の　清らかに、
君が　御こころ　洗ひ得て、
君が　御こころ　洗ひ得て、
悟り　の　道　に　すみ染　の、
ああ、すみ染　の　ゆかしさ　よ。
悲しき　上の　悲み　を、
つらき　が　中の　つらさ　をば、
つつむ　一乘、無差別　の
教理　に　堪ゆる　御力　や、
げに　大いなる　まこと　こそ、
隱れて、そこに　活くる　なれ。
あした　の　鉦　の　ひびき　には、

短き　人の世　を　觀じ、
ゆふべ　の　經の　つとめ　には、
長き　涅槃　の　さま　を　見つ。
春　啼く鳥　の　聲　聽きて、
涙の雨　の　寂しくば、
秋　吹く風　の　袖　に　さへ
助け　を　叫ぶ、聽聞　の
多き　世界　を　思へかし。
ああ、われ、今や、隔たりて、
雲路　も　遙か、君と　また
相會ふ　時　を　期し難し。
ああ、山　と　川、消え失せよ。
ああ、遠近　よ、相結べ。
幽明　二なく、萬象　の
歸する　ところ　に　從ひて、

こころ　に　心、飽くまでも、
君　と　われとを　泣かん　かな。

附錄

兒を失へる記

一月十三日。雨。小兒病氣の氣味ありとて、昨夕醫師のもとへ見せに行かしめしに、まさか實布垤里亞には非ざるべし。之を飲ませて、明日、午前九時頃、再び來れと、水藥一瓶を與へたり。その夜は、常よりも早く床に就きしが、小兒一睡の後、何となく氣息切迫して、腹の底より無理に呼吸するものの如し。あはれと思ひて、顏を近寄すれば、却て拂ひのけ、寢返りしては、枕元なる小ランプをつかまんとす。時には、身づから飛び起ること屢々なり。母之を休ませんとて、或は背に負ひ、或は寢かしつくるに、又起上りて便を呼ぶ。而して別に出づるにはあらざるなり。苦しかりし爲めならん。時にはまた湯といふ。湯あらざれば、水を與ふるに、『おべたいね』と云ひながら、舌うちして、之を飲むこと二三杯に至る。喉には始終たんの溜れる樣子なり。時々嘔氣を催し、吐きさうになれど、身づから之を飲み下して、出さず。一度は大に吐きしかど、藥のききめとのみ思ひ居たり（醫者

吐くことあらんと云ひければなり）。ただ早く夜の明くるを待つばかりなりき。

六時頃に至り、人の起き出でしを見て、おのれも起る氣になりてか、衣物を呼ぶ。その聲、喉にせかれて、しかと聽えず。衣物を着かへさせしに、そのまゝ布團の上にうつ伏して、眠れる樣子なりしかば、その上にまた小き布團をかぶせ置きつ。われらの食事を終る時、母を呼ぶさまなれば、つれ來たりて、いつもの牛乳を與へんとしけるに、さじ一杯を飲みて、再び口をつけず。喉の痛めること、なほその時も氣づかざりしが、兎に角、からだの弱りて、かほ色少しく變じ居れるを見たり。母之を負ひて、この度は專門の小兒科に行きしかば、われはその歸りを待ち居りしに、六時間餘を經れども歸り來らず。十二時を過ぐる頃、妹來たりて、喜代子の病院に入れるを報ず。さして行きし先にはことわられて、北里の研究所に行きしなり。直に入院して、之が診斷を乞ひしに、既に八分通り見込なしと云へりと。三ケ處に注射を行ひしも、その効驗見えず。入院後、半時程經て、終に果なくなりぬ。われ至りし時は、體溫去りて、その色既に變じ居たり。今はの際には、別に苦しみし樣子見えず。昨夜よりの苦みに、勞れ切りしものなるべし。急性實布垤里亞にして、心臟痲痺の爲めにいき絶えしなり。われより先、祖父の至りし時、既に之を覺えず、何をいふとも、聽ゆる樣子なかりしが、『とツちやん』といひ聽かせし時、三角の口つきして、笑ひしといふ。こは笑へるにはあらで、最後の苦みの形にあらはれしものならんか。享年二年二ケ月。

傳染病なれば、死體をつれ歸ること能はず。そのまま死亡届、棺桶の取り寄せ、二十四時以内火葬の許可、等の手續きを了し、午後八時頃、二人の人夫に擔がせて、病院を出づ。祖父と母とは途にて別れ、われ一人つき添ひて、目黒附近の桐ケ谷の火葬場に向ふ。九時過ここに着し、火葬室の鍵と鍵とを得て、人夫の棺につき添ひて、堂内に入る。折しも大雨降り來りて、ぶりきの家根を打つこと霰の如し。われは死神の下り來りて、恰もわが兒の靈を受け給ふかと思ひつ。

當夜は乞ひて、同處の茶屋に一泊し、明朝早く遺骨を受取りて、歸ることとす。茶屋は客の來たるに備ふとて、十時まで戸を閉ぢず。かたわらなる人夫の休息所に、燃え殘りの火も既に全く消え果てしやうなり。山中の一軒家、寂として、豪も世間の聲を聽かず。夜風、林樹に吹き渡りて、人の心を空しうす。これ悲嘆の湧出すべき時にして、而して殆ど之を感ぜざりしは、蓋し身體疲勞の爲めなるか、將又、その實際に於て、未だ兒の死せしを想する暇なきか。寢床に入りても、夢ともつかず、幻とも見えず。ただうとうととして、いつの間にか眠りけん。第一夢を結ぶ。小兒の苦しめるを抱きあげんとする時、そり返りたるに驚き覺めたり。これ既に明け方なりしと見え、起きて戸を開き見しに、うす明かりき。既にして又第二夢を結ぶ、この度は病院にありて、小兒は母と共にわれを見送り、われ出口のしきゐをまたがんとする時、『あばよ』といふ聲、うしろに聞えしかば、兒はいまだ健全なりやと思ひて、覺めたり。既にして又第三夢を結ぶ。こは現在、泊する茶屋の室にして、われ寢ねし時には、この家の人、この室は常に明け置くところなれば、戸の外には、障子などの必要なしと話せしものを。今や立派なるがはまりありて、茶屋の男、之をあけ居るに驚きて、目を覺ませり。この音は、即ちこの家の老人の、隣室に起き出でて、炭火をおこさんとて、戸棚を開くなりけり。時に午前六時三十分。

十四日。晴。六時半に起きいでて、庭先なる手桶の氷を破りて、顏を洗ひ、直に拂ふべきを渡し、昨夜の鍵を携へて火葬堂に入り、兒の室をおんぼうに開かしむれば、人體全く燒け通りて、灰となり、頭蓋骨の如きは半ばその形のままに黑くなり居たり。長き竹箸を以て、われ、そのぽろぽろと崩るる骨の一二を備への壺に入るれば、あとはおんぼう之を棒の先にて碎きつつ、入れぬ。われ、この壺をハンケチにつつみ、外套の裡に抱きて、ここを去り、靄いまだ深くして、人の衣をうるほす、田舍道を通りて、目黒に出で、汽車に乘じて澁谷に下り、某氏及び某氏を訪ふて、葬式の順序を定め、歸途、青山墓地の茶屋に立ち寄り、墓場の穴掘りを依賴して、家に歸る。その時の感、恰も兒は外に出で行きて、いまだ歸り來らざるものの如し。

十五日。晴。亡兒の葬式を自宅に行ふ。墓地はわが母の傍なり。遺骨と共に、兒の好み居りし羽根と、水くみと、坐せる形の裸人形とを埋めたり。花筒には、葬式の場に用し、梅と椿と水仙とをそのままに挿し置きつ。家に歸りて、始めて寂寞の情、胸に迫り來るを覺えぬ。

嗚呼、地下の一少女、靈となりて、今や何處の追羽根を習はんとする。

本篇は序言にもある如く、著者が琵琶湖畔にありし十二ヶ月中の日記の節々を書き集めて、一卷となし、未發表のまま筐底にありしものを、其後、遺稿として――三一六頁より三六五頁まで――新小説に掲載し始めたるが（誤字脱漏夥しく、原稿亡失したれば校訂困難なり）そのまま中絶せしを、今回全部輯錄せるものなり。（編者識）

紀行と印象

旅中日記

○（明治三十九年）三月三十日。雨。輕裝して、から傘と高下駄で宅を出た。この度の旅行は長くして居られないので、荷物は風呂敷包みと毛布とだ。途中に車があつたので、それに飛び乘つて、新橋停車場へ達したのは、午前七時。直ぐ汽車に乘れた。

列車が動き出してから氣が付いたのだが、おなじ車中の端の方に見た樣な婦人が居る、向ふから默禮したので、近づいて見ると、果して音樂學校出の某夫人であつた。ミネソタ號で出發する人を見送りに行くさうで――先づ、横濱までは途連れが出來たのだ。いろんな話からして、現今の音樂者連中には、兎角、酒色におぼれて不身持のものがあり勝ちだといふことが出た。然し、若し渠等にして、藝術家たる實効を擧げて行くものとすれば、何もそんな些細な事をかれこれ云ふまでもなからうと、僕は云つたが、所天を持つて居る人は之を是認しさうもないし、また、僕の言も實際の事情に一致して居るか、どうだか、自分も斷言は出來ないのである。

『何の本です』とゆび指されて、僕が出したのは、著者から送つて來た新刊の『破戒』だ。僕は著者が二年間の苦心などを說明した。『あの人も學校に居られたことが――』と、夫人が云つたので、僕が『あれは一時の迷ひでしたらう』と答へたのは、或は藤村君に取りては、あまり穿ち過ぎではないかと思はれるかも知れない。

近頃、僕の手に落ちて來たものに、獨步君の『運命』とこの『破戒』とがある。前者は出發前に讀んだので、後者を車中で讀まうと思つて持つて來たのだ。横濱で、夫人とそのお伴とを見送つてから、『破戒』をひもとき始めたのである。それで、國府津へ來た頃は、第四章、千曲河畔收獲の季節に、大飲酒家の細君とその兒等との勞苦をあしらつたところを讀んで居たが、それが別に深大な感じを起すでもないが、自然と人間とがなだらかに調和して居るのは、著者の得意、寧ろ特色だらうと思はれた。

ああ、海！僕の好きな海は、僕が國府津に下車すると、雨のうちに、洋々として僕を迎へる樣であつた。僕は、この二三年、相模灘に向ふと、何だか生き返る心地がするのである。早く汽船に乘らうと思つて海岸に出ると、あまり波も激しさうではないのに、生憎、けふはその發船所なる伊東から來ないことが知れた。止むを得ず、小田原へ來て宿を取つた。まだ午前であつた。實は、汽船の乘り場に

近いところで電車を下りて、一度飛び込んだ家は、けふの天氣が惡いので、風呂を立てないといふから、厭になつて、中食ばかりして、直ぐ宿を取りかへたのだ。もつとも、汽車に乘つて居る時から風を引いた氣味で、熱が出て、氣分が非常に惡くなつて居たのだから、もう、直ぐ、東京へ歸らうかとも思つた位である。

氣を持ち直して、例のを讀みつづけて居たから、夕方には、第七章のところに進んで居た。湯に這入つてから、夕飯が出たが食べたくないので、靜かに寢ころんで、著者が信州北部の山河を緻密に描寫するあたりに氣を取られて居ると、不意に氣分が變つた。――それは、浪の遠音が聽こえたからである。僕は、暫く浪の音を聽かないと、何だか、自分の生命が枯れて行く樣に思ふ性分である。

それで、また、僕は旅行に出ると、直ぐ自分が最も明確に踊り出るのであるが、氣分の惡いせいか、まだその時が來ない。ひよつとすると、手近かに人の書物を讀んで居るからかも知れない。こんな長たらしい日記を書くのも、心が中點に集らないからでもあらう。兎に角、不愉快なので、宿を出て、近處の料理屋に飛び込み、歌妓を呼んで暫く騷いで見たが、あたまが重くなるばかりだから、間もなく歸つて褥に就いた。

○三十一日。晴。昨夜は、熱の爲めになやまされて、眠られなかつた。平常、夜中に目が覺めた時見える、空想の親しい影も浮んで來なかつた。午前十時、褥を出た。朝飯は矢張り喰へなかつた。支度をして。濱へ出た――汽船は今日も來ない、來ないから、その國府津からの歸りに乘つて、目的地へ行くことは出來ない。また止むを得ず、熱海へ行くことに定めて、人車鐵道の乘り場へ行くと、うしろから僕の背中を打つたものがある、ふり返へると、以前に宿つたことのある宿屋の女中だ。『旦那のお顏は大變赤い』と云つた。成程、熱が非常にあつたのだ。手を握つて、別れた。女は、どんなお多福でも、どこかに愛すべき點があるとは、僕が不斷云つて居ることだ。

例のを讀んでしまつた時、人車は高い山腹を駈つて居て、海の方を見ると、果はむしられて葉ばかり青々して居る密柑山を越えて、遠く白帆が二つ三つ浮んで居た。多少、夢見る心地になつて來た。あの初島の左から烟が見えるなら、それが東京から來る汽船で、けふそれに乘つて行けるのだと、おなじ地をさして行く乘合ひ客は云つたが、僕はその汽船が來るのは朝だと知つて居たから、その言を信じなかつた。

熱海へ着いたのが、午後三時過ぎ。さいはひ、知つて居る宿屋の番頭が來て居たので、それに附いて宿へ行つた。からだの筋々がゆるんだ樣な工合であるから、溫泉に這入つて褥に就くことに定めた。去年の暮れもここに入湯したが、その時の病氣の爲めに、また今度も出て來たのである。然し風を引かうとは思はなかつた。

讀んでしまつた『破戒』全篇は、褥に這入つてから考へて見るに、單行小說として近來稀れな長篇

を、如何にも落ち付いて、ゆつたりとして居る書き振り、少しもあせつたところがないのは感服である。著者とその文章とはしつくり合つて居る樣に思はれる。それに、『藝苑』に出た風葉論の記者に云はすと、この著も――外國文學のお手本はあつたにしろ――その影響が見えて居ない方に數へられるかも知れないが、僕はこの方が贊成である。詩に於ても、僕はこの考へだが、外國の思想と影響とは、そのままで現時の日本だけには斬新にも見えやうが、それが良いものならば、之を日本的に同化してあらはすことが出來なければ、飜譯と同じで、――日本文學としては、世界の舞臺にいつまでも殘される性質のものでなからう。著者はどこまでも純粹の日本的、ちひさく云へば、純粹の信州的の行き方をつづけて居るところが、僕には心地よく讀めた――もつとも、かう云ふ書き振りだけが純粹の日本的だと云ふ意味ではないが。自然主義の行き方が面白い。氏の詩はもう時代後れになつたが、然しこの主義で新たに作るなら、作詩も氏に取りて惡くはなからうと思ふ。

この著の部分的缺點とも云ふべきものを思ひ付いたままに擧げて見ると、犧牲蓮太郎の死が仕組上あまり前から見え透いて居たこと、主人公丑松が自覺奮起した際に當つて、生徒並に同僚の前に平つくばるのは、著者が苦心して描いて來た主人公の人格を、普通一般の穢多根性と何の變はつたこともない樣にしてしまつたこと、などであらう。僕も穢多の材料を持つて居るが、こんな工合には描きたくない。また、事件を引き起すに、同一の形式が二三度重なつたと思ふ。また、澤山の人物をそれ〳〵始末してしまつた手ぎはは感心だが、その連絡にまだ〳〵こと更らめいたところが多いのは殘念だ。要するに、この著には、大きいとか深いとか云ふ方面は望まれないのである。獨歩君の『運命』には、外國の運命悲劇にあり振れた形式や、また、何でもない樣な筋などがある代りに、『酒中日記』の樣な、何となく僕等の心に深く喰ひ入る作がある。これは、兩者の感想が違つて居るからでもあらう。獨歩君をその『空知川の岸邊』に描いてある森林に譬へると、藤村君はこの作中に寫してある、北信の田園であらう。『破戒』には、自然と人間とが、最も平且な――平凡の意ではない――ところで活躍して居る。

○四月一日。晴。昨夜も熱は出たが、對して寢苦しくはなかつた。午前四時半、汽笛の聲に目を覺まして、支度をした。飯は喰ひたくないので、玉子を三つ四つゆでて貰つて置いたのである。漸くのことで海に出ることが出來たが、けふに限り小さな船が代つて來たので、狹い甲板へは出ないで、船室に籠つて居た。

網代を過ぎて、伊東町へ近づく頃から、甲板に出ると、向ふの山の中腹に寺らしい建物が見えて、薄赤い花が澤山咲いて居る。『あれは何でしよう』と僕が問ふと、軍人が一人『桃でしよう』と答へた。あとでこれは日岸櫻と知れたが、それと同時に、この寺に關して一つの腹案を得たのである。

午前九時頃、町へ近づくと、濱邊は、あちらこちらにほうづき提燈を引き連ね、砂上の船はすべて

旗を以つて滿艦飾を施してある。忽ち花火が上つた。はしけに乘つた客のうちから、學生がひとり笑つて、『僕等の歡迎だらう』と云ふと、船頭は眞面目に『なアに、兵士の大歡迎會です』と答へた。

僕は先づさして來た某亭に行くと、そこの歌妓どもは髮を太いちよん髷に結つて、異樣な服裝をして居る。どうしたのだと尋ねると、これから濱へ行つて、『鞘當』をやるといふ。間もなく、近邊の妓等一同は、船形の花車を引いて、出て行つた。町中はすべて家業を休んで、最後の歡迎會を催すのである。

僕はそこの娘二人と共に、宿は別に定めて貰つてから、同じ樣に濱へ出た。こんな時は、自己の悲愁も痛苦も、一時はどこかへ行つてしまうもの――滑稽だけ辛抱することが出來れば良いのだ。それも、人間の到底出來ない化脫などを虛說して、身づから澄まして居られる人々の滑稽と孰れがまことであらう。然し、これは只今印刷中の拙稿『神秘的半獸主義』の論究するところである。

海では、二雙の獵船がかつを釣りの眞似をして見せて居る。町會議員、小學校長などは、委員のしるしを胸にして、得々と奔走して居る。獵師は、また、脊中や裙に赤い辨天樣などを染め出した、間祝ひの衣服を着けて、喜色は滿面にあふれて居る。宿屋、料理店などから一人づつ出した女の子は、いづれも揃ひの赤前垂れをして、ここかしこの假飲食店を世話して居る。すし屋もある、酒屋もある、ビール屋、甘酒屋、しるこ屋、菓子屋、麥湯屋などもある。

僕等は一わたり歩いて、藝者の手踊りを見たが、感心にも『北州』を澄まして踊るものがあつた。それから、僕等は、酒の食券などを持つて居たから、その店へ這入つて休んだ。見て居ると、いろんな風俗をして居るものがある。男子が女子に扮したり、女子が男子に裝ほつたり、嚴密に云へは、科料金を拂ふべきものがある。また、わけの分らない帽子を被り、薄い紙子の背にクロパトと書いたのを着て通るのもある。砂糖をつつんであつたむしろを社衿の代りにして、棕梠の皮の笏を以つて、澄して行くのもある。また、人々からかけ離れ、浪もとを、年の若い藝者が青年と手をつらねて行くのは、海を背景とした最も良い畫である。また、どこかの隱居らしい老人が、唐人あめを賣る人の樣に、長い帽子をつけて、眞面目に瓠簞を提げて居るのもある。小學教師がつけ鬚した軍人の眞似を見ると　僕が國に居た頃、不斷こわい顏の教師連が、天長節の儀式が濟むと、つれ立つて飲みに行き、それから鼓を打つて町中をねツて行つたことがあるのを思ひ出す。

『あひの子が來た、あひの子が』といふ注意を受けて見返ると、二三歲の兒の手を左右から引いて、西洋婦人と丈の低い日本人とが、洋服すがたで、浪もとをやつて來た。これは當地に住む傳道者夫婦である。年は二十程女が上である。靜岡市で結婚をした當時、新聞などでは冷笑的記事を揭げたのを見たが、男女の情事をさう冷笑すべきものではなからうと、之を讀んだ時、僕は思つたことがある。その家族を今目の前に見ると、なほ更らその情を汲んでやりたくなつた。情は弱いものの樣だが、燃

え立つ時は、知力をも意力をも燒き盡すことがある。僕の聽いて居たことを思ひ出すと、熱海の海岸から、或時、小舟に乘つて大島へ遊びに來た中學生が一人あつた。島には、耶蘇教の傳道をして居る獨身の外國人がふたり居た。一人は意志の堅固と云ふよりも、寧ろ頑愚な男子、また一人は自己の寂しさを優しさに包んだ老婦人。この婦人がこの中學生に頻りに神の愛を說き聽かしたところが、感服して、その翌月も亦やつて來た。そのまた翌月もやつて來た。それが二十日毎になり、十日毎になり、一週間毎になり、その接近の度が重なるに從つて、一方の聖人は之を見て顏をしかめる樣になつた。老婦人は遂に島を立ち去ることになつた。かの聖人は之を墮落と吹聽して、今でも島に行く人に向つて、神の爲めに憤慨の意を漏らすさうだが、その老婦人と中學生ととが、乃ち、この『あひの子』の兩親であるのだ。

僕等は、それから、福引の場所へ行つた。或者は杉マサの天井板、或者は太い床ばしら、また或者は時計や反物や俵炭を持つて行つた。をかしな物など當つて、女どもの困る有樣は、いづこもおなじである。僕等は手拭と下駄と箒木とが當つたが、箒木だけは厭だと云つて捨ててしまひ、下駄と手拭とをひとりが袂に入れた。それから、僕等は歸つて來た。

田舍でこんな賑ひは稀れである。浮き島で名高い吉田の池のほとりや、大島などからも、わざ〳〵出て來たものがあつた。食券だけでも、二千人分を出したさうだ。一時は、濱邊は、蟻のむらがつて居る樣に、人を以つておほはれて居たのである。

宿へ歸つてからも、花火はなほポン〳〵上つて居る。ああ、お祭りの濟むのは早い。町人よ、思ふ存分に遊んで、またあすからしつかり働けば良い。汝等とても、眞面目の時は、苦と悲みとは脫し得られないのではないか。智と無智とは、對して違ひのあらう筈はない。

これを書き終つてからも、まだあたまが作詩に向ないので、小山內君から借りて來た、ヒウンケルの『アイコノクラスツ』を讀み始めた。

旅中雜記

一

年末におし迫つてからの旅行であるから、至るところ、のんきなのは自分ばかり。新橋で二度乘り後れ、某辯護士に別盃を酌んで送られ、いい氣持ちに醉つて乘つた夜汽車が、富士山麓を通る頃は、靈山が寒い月夜に薄い輪廓を畫いて、幽靈の樣に現はれて居た。夜が明けて琵琶湖畔にかかり、午前八時過ぎ馬場驛で下車した、僕の古戰場を七八年振りに見舞ひたいのだ。

大津には、いろんな友人が居る。縣廳に於ける僕の後任は、相變はらず警察部の英語教師をつづけて居るし、僕の教へた中學には、その時代の同僚がまだ五六名留任して居て、眞面目くさつて教鞭を

執つて居る。市民中には、大きな酒屋の主人で、片足はきかないが、なほ春秋に富み、一方の有力者に數へられて居るのがあるし、また、身づからは身を晦まして居るが、器用なところから、畫を書き圖を引くを業とし、一たび人の一身にかかる事を賴まれると一歩も跡へは引かない、男達肌の友も居る。また第九聯隊の大尉で、戰爭以來まだ相會ふ機がなかつたのは、兩脚に負傷し、一脚はちんばになつて居るが、頭腦がいいので、今は重要を地位を占めて居る。またお仙といふ老妓があつて、これは、もと、兒玉大將が大津の聯隊長をして居た時、最も多くその愛を受け、その夫人になるつもりで居たのがしくじツたので、そのまま年を取つてしまつた者だが、同地藝者の總取締とも云ふべき程勢力があつたので僕、もたびたび呼んだことがあつた、一度など、渠の覺えて居る踊り――その時代に、もう、人に敎へこそすれ、自分では踊る年でなかつたの――を踊り『けふの樣に興の湧いて來る晩はない』と感泣したこともある。それが、今度來て見ると、まだつつがはないが、廢業して、獨力でお茶屋の女將になつて居る。聽いて見ると、五六千の負債をしよつて立つて居るのだ。

僕は同地で一つ忘れられない話を聽いたそれは戰爭談である。日露戰爭の當時、第九聯隊の豫備兵から成り立つた高木聯隊が、旅順の難局某地進擊の命を受け、全滅とは知りつつも、河底に整列して、敵に悟られない樣に、口から口への點檢をすまし、個人個人の行動を取る覺悟で、一度に土堤へ飛び上ると、忽ちに速射砲を向けられ、つづけ打ちの散彈に味かたがどうなつて居るのか、分らなくなつた。そのうち、某といふ卒が木の株を楯に彈丸を避け、あたりを見まはすと、いづれもいづれも敵の方にあたまを向けて倒れて居る。死んだものばかりらしい。そこへ『沈着にやれ、沈着にやれ』と云ひながら、近づいて來た人を見ると、自分の見知つて居る軍曹であるから、その命令に從つて進行したが、いつまでも同じ『沈着にやれ』をつづけて居るのを不思議に思つて、その樣子をうかがふと、その行動は平生の練兵の時と變はらないが、全く狂つてるのだ。幾多の部下がその命令に從つて居るものと思つてゐるらしい。

やがて、また大きな音がして、探海燈の樣なのろしがあがる。某卒は、その光を避けて、地上に平伏する。ばらばらツと彈丸が飛んで來る。脇腹を打たれたので、一目散に脫げ出したが、苦痛に堪へ切れないで、倒れてしまう。『しツかりせい、しツかりせい』と云ふので氣が付くと、例の軍曹が自分をかかへて後方に走つて居る。その後のことは夢中であつたが、卒自身が兎に角、再び正氣に返つた時は、野戰病院内に助けられて居る。然し、軍曹のことは誰れも知る人がない。跡になつて分つたのは、某卒が手傷を負つたところよりも遙かにさきの大きな岩の上に、劍さきを以つて敵陣をゆび指したまま、聯隊長が倒れて居たといふ、その岩よりもずつとさきに進んだところに、かの軍曹と同じ名の軍曹が戰死して居たさうだ。多分、負傷兵を誰れかに渡してから、自分は再びもどつて行つて、例の『沈着にやれ、沈着にやれ』をつづけて居たのだらう。

前項に紹介した男達肌の友人は、目をしばたたきながらこの話を聽かした。僕も一滴の涙が頰に傳ふを覺えた。同時に、また、之を詩に歌つて見ようといふ考へを得た。外人（または皮相的觀察者）はわが國の軍律が正しいといふが、これは命令的軍律の行はれると解釋するよりも、國人の個人的行動が戰爭に於て同一方向を取るのだと說明すべきものだ。僕が、加藤博士を評する論文に於て、わが國の特色に國家主義と個人主義との合一を數へたのは、この挿話を讀んでも分るだらうではないか？

二

京都へ行つたのは、一度大阪へ下つて軍用金を用意してからだが、停車場へ着いた足で、先づ訪ねたのは新烏丸の高安月郊氏宅だ。氏は幸ひに在宅して居た。氏の書齋は比叡山の景を專らにして居て、その山々、朝の綠、夕べの紫を主人は餘程自慢であるらしいが、その癖、自分が特有して居るのでも、何でもないのだ。然し、鰻屋の前を通らし、香ばしいにほひを嗅がして、それで客を歡待すると思つたのではないのは、僕の保證するところだ。僕が同氏と泣菫氏とに土產として持つて行つた出來たての自著を、これには氏等の攻擊もあるから見て呉れ給へと云つて渡して置き、腕車を連ねて島華水氏を銀閣寺の南隣に音づれた。

僕が曾て京都附近に引ツ込んで居た頃、銀峯會の公開演說が丸山の某樓にあつた。僕もそれに出て演劇に關する演說をやつたことがある、その節初るて華水氏と月郊氏とに會つたのだが、故寧齋氏の葬儀以來、僕は華水氏と相會ふ機會がなかつたし、月郊氏も亦同氏と殆ど二年ばかり會はないのであつた。僕等の音づれた時、氏は丁度山腹に枯れ葉を燒いて、夕日を送るところであつた。立ちながら燃える火を圍んで、京都の住人は共に頻りに雲形、山色の美を賞して居たが、僕には餘り興が乘らなかつた。夕ぐれの銀閣寺も珍らしからうと、裏門から這入ると、暗い竹籔の根もとが透いて、殘照の光にふさがつて居るのを見て、如何にもレンブラント式の畫になりさうではないかと語り合つた。

三人は、樹かげに落ちる細い瀧の音を聽きつつ、寒い椽がはに腰かけて、花袋、天溪、有明、藁等の諸氏に宛てた畫はがきに署名したが、薄田氏にも署名ささうではないかといふ說が出て、華水氏と別れて、直ちに室町へと車を驅けらした。泣菫氏も丁度居たから、あかん坊の泣いてる家を連れ出し、近所の料理屋で一杯を酌みかはし、翌日の再會を期して、その夜は相別れ、僕は僕の欲するところに行つた。

三十六峯を見て暮す女は、活氣がないと云はば云へ、その顏立ちと肌合ひとに於ては、到底、東京女の及ぶところではない。且、その客を持て爲す點に於ても、全く愛憎の念を絕し、純客觀的おもちやたるを敢てする勇氣または素養があるのは、嫖客に取つて最も賞すべきところである。僕はかういふ考へを久し振りで初めて呼び起した日の晝過ぎ、泣菫氏を誘つて月郊氏の宅に集つた。さて、どこへ行かうとの相談に、僕はまだ豐太閤の墓所、阿彌陀ケ峰に登らないから、且、兩氏もまだだから

それへ登ることになり、絶頂に達した頃、豫期した通りに、再び落日の美景に接することが出來た。ところ柄とて、金屏風に圍まれて、豊公の威儀堂々たる死に樣もかくやと思はれ、且、デカダン派の終極も迫めてこの景況まで達すればと感じられたが、あとの兩氏は多分別なことを考へて居ただらう。それはさて置き、五百五十段の石段を攀づるに、兩氏の足の弱いのは意外であつた。

そこでも、畫はがきに署名したが、宛名は誰れであつたか忘れてしまつた。社務所の印を押して貰つた時、そこの禰宜の娘であらう、年の若い女が寂しさうな顔をして出て來た。そんなところに住む女の心はどんなであらうといふ話が糸口になつて、泣菫氏は一つのあはれな物語を思ひ出した。氏の友人で、鞍馬山に登つたものが、一銅半錢もなくなつて、絶頂の神主の家に、ただで一夜の宿をして貰つたが、そこに一人の娘が居て、之を氣の毒に思つたのであらう、翌朝握つて與へた結飯の中に二十錢銀貨が入這つて居たさうだ。かういふ話をしながら、四條へ來て、河邊に浮べた（となぞらへた）船の中で、晩餐を共にし牡蠣飯を喰つて別れた。

そのまた翌日は返報として僕がおごることに定め、晝過ぎから集まつた。もう、別に珍らしい名所古跡もないから先づ市中の古本屋をひやかさうと發議し、諸方をぶらつくうち、或店さきに『光琳百圖』があるので、何となく開いて見ると、希臘神話人面馬體のケンタウロスではなく、人面牛體の不思議の畫があつた。思ふに、支那神話に於ては、伏羲氏は蛇身人首、神農氏は人身牛首、西王母は『その狀人の如く、豹尾虎齒』また人羊といふ獸があつて『驢の如くして馬尾』その他種々あるが、いづれも不釣り合ひにあらざれば、甚だ柔弱で、もつともな自然の趣きを缺いて居る。僕の半人半獸の極致を現はすに於て、かのケンタウロスの如く均整と剛健と活力とを比較的完全に表するものは、最も不思議な神話的地理書とも云ふべき『山海經』を調べても見當らない。それに、僕は多少之に近い表現を光琳の畫で見たのだ。馬を牛で行つてるのは、剛健の感じを薄くする缺點だが、渠はどこからこの想を得て來たのか、誰れか之を研究するものはなからうか？まさか希臘神話の直接變形ではなからう。兩氏に話しても答へはなかつた。

夕かたになつて、僕の好きな豆腐料理、棒鱈に長薯を出して來るいもぼうに行かうと云ふのを、それは餘り通でもないから、たぬきへ行かうといふことになつた。名からして鳥渡何が出るやら分りさうもない。平木白星氏が曾て來遊して、兩氏に案内きれ、スツポン料理へ行つた時、毒にはなるまいかと心配したさうだが、その格で行くと、化されはすまいかと云ふのが本統であつたらう。薄暗い内路地を通つて、奥坐敷へあがると、狹い庭の隅に狸の社がある。床の間には、誰れのいたづらか、蛸の化けたところを書いたかけ圖がかかつて居る。左右の額には、化け物の句が澤山記されてある。先づ出て來たからすみで傾けて居ると、やがて狸の持つ貧乏德利が別々の膳に乘つて出て來た。何のことはない、これが奥の手で、三段にはづせると、上段は酒、中段は肴、下段は吸ひ物で、甘いことは

甘かつた。今一度有明氏に畫はがきの代りを送らうと云ふので、店の印形を持つて來さすと、どれもどれも狸の形をして居ないのはなかつた。悉くそれを押して、泣菫氏が『狸汁』と書くと、月郊氏が『三人醉ふて』、僕が『年のくれ』と附けた。何の意味もない句だが、年末にこんな呑氣なことをするものは餘り多くはなかつたらう。

久し振りの會合――三人、三度會して、三方に別れた。兩氏はいづれも神に近い人々だ。僕が神と云へば、必らず架空的虚僞的といふ形容詞が附く奴だが、それにしても、短所ばかりを見ず、長所をも斟酌して云ふと、この形容詞を附けたままで、月郊氏は神の質あり、泣菫氏は神の智ありだ。共に京都的思想を脱することが出來ず、直接に現實の苦痛に當らうといふ樣な勇氣はなく、かの外國宣教師が西洋館のがらす窓から傳道して居る樣に、人生に對して間接な觀察、描寫、解釋等をするのが却つて上品だと思つて居るらしい。上品は古典派の特色ではあらうが、僕等東京人はそんなものを唯一の生命とすることが出來ない。もつと深刻な心熱的生活を經驗する爲め、迫めて一年半歳なりとも、手ぶらで東京へ來て住んで見給へと、僕は兩氏にすすめて置いた。兩氏とも隨分新傾向の舶來書を讀んで居る樣だが、その解釋消化の仕方が僕等とは丸で違つて居るのである。

それから、僕は獨りして、歳暮の飾り附けが立派な街を通り拔けて、四條に出で、京都女にまだ名殘り惜しいところがあつたので、ぽんと町に這入り、曾ては二三度あがつたことのあるお茶屋をたねたが、店のものは見忘れてあげて呉れなかつたので、橋の上に來て、醉ひの出て來たいい氣持ちをぶらついて居ると、獨りの女があつて、別な女のいやといふ手を無理に引ツ張つて、『まア、行きましよ、獨りでは寂しうおすさかへ』とすすめて居たが、一方はとう〳〵脱げて行つた。身なりから並みの婦人ではないと見たので、僕は殘る一人に話しかけ、わけを云つて賴むと、渠も飲みに行くのだから、一所に行かうといふことになつた。渠は祇園の或お茶屋の女將であつた。意外の案内を得て、意外の醉ひを重ね、京都最終の宿りは大阪への話みやげとなつたのだ。

三

神戸へ行つて、國木田收二氏に面會した。十數年前、氏は初めて僕の貧居を尋ねて呉れたが、生憎僕は留守であつて、爾來そのままになつて居たので、今回の訪問はその返禮を兼ての初對面であつた。令兄獨歩氏の病狀を餘程心配して居る樣であつたので、それは僕よりも花袋氏に聽く方が本統のことが分るだらうと助言して置いた。氏の兄弟思ひは、僕等の間に有名な美談になつて居るのだ。

關西地方は、大阪の新聞に占領されて居るので、地方新聞の經營はどこでもなか〳〵六ケしいが、收二氏の主筆をして居る『神戸新聞』も、漸く兵庫縣下に多少の需要があるので、持つて行けるらしい。神戸市では、外來の諸新聞に壓倒されて餘り勢力がないのみか、それよりも古い『又新日報』は、地方新聞としては、依然として可なりの勢力をつづけ、東京の小新聞社には劣らない程の立派な建物

を樽へて、二三萬も出て居る。僕の生國淡路から出た新聞記者は、東京にも隨分居る樣だが、もとは大抵この社を經ないものはなかつたのだ。これは鹿島秀麿氏の勢力によつてであつた。

もとの兵庫市の人民は、相接して居ながら、神戸人とは一風變つて、その家屋の建て込んで居る樣に陰鬱で、また因循であつたが、神戸市と合併し、湊川の河底も平らげられてしまつてから、餘程活氣を帶びて來たさうだ。神戸市もずん〳〵發達して來て、今では人口殆ど三十萬、數年のうちには、沈滯して居る京都の五十萬を越す樣になるだらう。神戸と兵庫とを一緒に聯想するので思ひ出されるのは、その境になつて居たもとの湊川の土堤で、借馬の馬方をして居た男だ。僕は、まだ小供の時、渠に二十五錢の借馬料を拂はずじまひになつたことがあるのだ。この度聽いて見ると、渠は馬方として澤山の金を儲け、立派な紳士になつて居たが、一二年前、鳴尾の競馬に乘り手として出て、馬から落ちて死んでしまつたさうだ。あはれや、僕の目には、紳士としての渠は浮ばないが、櫻の植わつた高い土堤を、馬に乘つて片手にまた別な馬を引いて行く渠の姿が見える樣だ。然し、今は實際にその人もなく、その土堤もない。

長狹通りに僕の從兄弟の家がある。煙草と印紙とを賣つて、可なり富有にして居る。伯母は一昨年、伯父は昨年なくなつて、夫婦と小供三人の暮しである。總領娘は七歳で、もう學校へも行つてるが、片足が不具の爲め、思ふ樣に通學が出來ない。然し、勝ち氣で、利發で、活潑で、而も顏立ちがいいから、一しほ可愛さうだ。無邪氣に遊んで居られる時は、他の小供と同樣何の苦も知らないで居ようが、年頃になつてからのつらさが今から思ひやられる。千代子といふが、僕は大阪へ來てから、年賀狀に小供の手鞠をつく畫葉書を買ひ求め、『髮のおぢさんから』として、その子に送つた。

神戸の東山病院には、尋ねたい看護婦が居るのだが。流行病者の收容所だし、また當時は天然痘で最も繁盛して居ると聽いたから、氣味が惡くなつて、行かずにしまつた。

四

大阪で文事に關係あるもので、僕が知つて居るのは、先づ正岡藝陽氏と北里龍堂氏とである。藝陽氏は、僕、さきに當地へ着した日にも訪問したが、旅行中、新年になつてからも行つて見たが留守で、とう〳〵會はずじまひであつた。二度とも大阪日報社へ行つたものだが遠い住宅まで尋ねて行く氣は出なかつた。人の話に據ると、相變らず例のお茶屋に入びたりになつて居るのだらうとのことであつたが、事情を知つてる或藝者に聽いて見ると、そこの女將の方からは非常な熱心だが、肝心の御本人は年上なのを嫌つて脫げ出したいのださうだ。かの靑入道の由來はそれに附會されたものでがなあらう。

龍堂氏とは、行つては居ず、來て會つた。氏はさきに文人は全く文筆を以て、生活するのが本統だらうといふ考へを起し、獨逸遊學の時代に脚本を書いてあちらの人士に歡迎された時の熱がまだ殘つ

て居たので、この考へを實行する爲めわざ〳〵學習院の教職を辭したことであるが、わが國現時の狀態ではまだ思ふ樣に行かないところから、再び獨逸語の教師となつて、大阪高等醫學校――ここには、僕の知つてる少壯有爲の醫學者も居る――に奉職し、もはや滿二年を經過した。話し對手のないので、殆ど閉口して居るらしい。一緒に人形芝居を見に、堀江座に行つた。(文樂座へは、その翌日、他の友人と行く約束があつたのだ。)

今一人尋ねて見たかつたのは、まだ會つたことはないが、僕が一昨年から公けに屢々論戰した角田浩々氏だ。幸ひ、僕の宿つて居た大川町に、同氏の出る大阪毎日新聞社があるので、一日行つて名刺を通じた。或人の說に據ると、論敵と會見すれば、知らず識らずその論旨が交互して、旗幟が不分明になる恐れがあるといふが、それはもう一歩極むればナポレオンの所謂『屢々敵と戰ふべからず』と同樣、ただ單にその場の勝敗を決する必要がある時の態度であらう。自信を以つて自己の發展を期するのが生命であるものが、敵と會つたからと云つて直ちに意見が移り行かう筈もなし、且、また愉快なところもあるのだ。浩々氏も愉快だから一緒に飲まうと云ひ出し、堂島の魚岩といふ料理屋に行つた。龍堂氏が僕のところへ尋ねて來るかも知れなかつたから、來たら直ぐ來る樣にと電話をかけて置いたが、その日は見えなかつた。

現今、新體詩を論ずるものは、詩作家そのものでも、ただまた問きのそのまた又問きを敷衍して居る。ただ二三の偏見を人手に通して議論して居る。つまり、評者に自己の獨得がないのである。これからは、先づ僕の新著『新體詩の作法』から始むべきものばかりだ。浩々氏の詩論も、泣菫氏並に鐵幹氏の云ひさうなことが多いので、僕は平生同じ疑ひがなきにしもあらずであつたから、僕はわざと氏の說が明星から出るのか、明星のが氏から來るのかと尋ねたら、『いや、わツちのは支那の詩話からです』と答へた。その古い平凡な點に於ては、支那から出ようが、明星から來ようが、現代の新傾向に對しては對した相違がないのだ。昨年までの論戰に對しては、氏は他に多忙のことがあつた爲め無精をして、僕に云ひ負けてしまつたのだと辯解した。互ひに育つて來た樣子を語り合ふと、氏と僕とは正反對で、それがお互ひの言論に現はれて居るのだらう。僕は初めから激されて來たから、今でもまどろツこしい折衷說を立てる氣にならないが、氏は多少自己を曲げても、無難な道に安じようとするのだ。島村抱月氏も、その云ふところを見ると、この肌合に屬する人だ。かういふ傾きがあるから、浩々氏は會つて見ると溫厚な君子だが、君子と云はれるもの程、人に知らさないで、手段に腐心して居るのが常だから、その手段の方に心が取られて、つひに要領を得ない動物になるのだ。新自然主義は決してさういふ人を待つ必要がない、然し、僕は大阪に一人の友人を增したのを感謝する。

五

僕が故鄕を出て、初めて大阪に遊學した時出來た友人が三名ある。青年時代は、この四名とも、別

別に諸方を流離し、東京、大阪、仙臺、上海、米國等から、書信を取りかはし、會ふ機が少かつたが、今は二名づつ東西兩都に分れて落ちついて居る。乃ち、僕と今一名判事をして居るのが東京で、大阪に居るのは、一名は商人、一人は某保險會社の社員頭だ。たまには、四名相會することもあるが、いづれも少年時代から向いて居た方へ向いて行つたのであるから、一人が大金を儲け、また一人が位階を貰つても、別に意張りもしなければ羨みもせず、或はまた社會に失敗したり、女に沈溺したりするものがあつても、對した忠告も與へない代り、見棄ててしまう樣なこともなかつた。氣の小い者、勘定高い者、學問嫌な者、無遠慮な者、互ひに面目不面目はなく、この二拾年來、他と違つた交際をつづけて來たのだ。もつとも、書生時代には、四名のうち、吉原に三四日も居つづけするものがつたので、押しかけて行つて、その一人をぶちのめしたこともある。

僕が宿つたのは、この仲間の一人なる商人の新らしく購つた控邸だ。店は外にあつて、大きなボタン商店だ。その父が一代に仕上げて、つい近頃殘して行つた財産三十萬を背負ひ込み、重い責任を感ずるせいか、わが友は爰に人物が一段あがつて居る。渠が半年ほど前に米國から歸つて以來、僕が逢つたのは今度が二度目だが、第一に嬉しく思つたのは、この事である。渠はまた別に新意匠の化粧品を賣り出さうとして居る。その店はまた別にあるのだ。控邸といふのは、なか〳〵意氣な構へで、それが手に入るまでは、有名な高等麁寥であつただけの察しは附く。あらい格子戸を明けると、直ぐ黑いくぐり戸があつて、その上方の壁を切り拔いて電燈がつく樣になつて居る。夜などは、かたはらの鈴を押さなければ、戸を明けに出て來て呉れない。それをくぐると、一間幅の路地の、左右は色壁を以つて隣家を仕切つてあるのが、眞直ぐに五六間石だたみを敷かれ、その左右には短い樫の木を植ゑ並べてある。それから、また瓦斯燈つきの格子戸を這入つて、玄關になる。家の間取りもなか〳〵凝つたもので、且は、下にも二階にも、あかりは電氣と瓦斯との用意がある。

友人は、故あつて、父の遺言に由り、細君を離緣してから、表面は無妻だが、女中代りに某お茶屋の仲居を連れて來て、二人して住んで居るのだ。至極質朴なまた平穩な暮しである。かの女は數年前から素性も分つて居るし、また最も柔順に働いて居るので、わが友は、現今のところ、へたな女房を持つ必要はないと云つて居る。料理をしても熟練なもので、龍堂氏も一度來て、直ぐ感服した。客を持て爲すにも、諸器具の整つて居るのとよく釣り合つて、注意は周到なものだ。僕が二階にやすんで居ても、たとへば藝者を歸した跡で、待合の小座敷で、粹を氣取つて獨り癖をして居る樣な氣がした。友人の店の帳簿整理は、近頃或簿記學者にやつて貰つたのだが、その人の話によると、表面は先づ五拾萬あると云つてもいいさうだ。然し、僕などから見れば、そんな三拾萬、四拾萬の大金は無用の長物も同前で、却つて拾圓、百圓、千圓の金が役に立つ樣な氣がするのだ。

藝者なども年末年始の禮に來たが、それは素封家である故ばかりではない、同居の婦人が居るから

であつた。仲居といふものは、大阪では、『ねいさん、ねいさん』と呼ばれて、なか〳〵勢力があつて、藝者等はそれに頤使されて居る。渠等と共に坐して、お座敷以外で、無邪氣なお正月ばなしを聽いて居るのも面白いものだ。

六

大阪はペストの流行地だから、長く留るはよくないと、途中で忠告されたが、來て見ると、東京に於ける虎列刺騒ぎと同樣、どこに花道からせり出す鼠が居るのやら、殆ど心配はない。然し、たまに、その界限をトタン板で圍んであるのに出會ふと、餘り氣味のいいものではない。知り合ひの醫者の言に據ると、市民の衞生的あたまが發達して居ないので、患者を隱蔽する風がある。一方からいふと、誰れしもへぼ醫者の爲めに、さうでないものをさうだと見誤られたくない心もあらうが、兎に角、全滅してしまはないのは歎ずべしだ。今回は、まだ、醫者にやられたものはないが、檢疫巡査が二名も倒された。

大晦日の晩に、市中をぶらついて見たが、東京と違つて、街幅が狹いので、店屋の飾り附けと云ひ、人出の工合と云ひ、隨分盛んなものだと思つた。その間を自轉車に乘つて通らうとした紳士が、僕の直ぐ前を行く人にぶつかつて、飛び降りたが、僕も鳥渡癪にさわつたので、『やつつけてやれ』とけしを掛けたら、何だかふたりで云ひ合ひが始まつたらしかつた。雜誌屋の店さきには、『少年、』『少女界、』『女學世界、』『實業の日本』等が最も多く出て居る。大阪で出る『滑稽新聞』(月二回)の如きは、百八十號もつづいて、毎號三萬も刷るさうだが、東京の『パック』と同樣、まだ滑稽も諷刺もごツちやになつて居て、その意味と云つたら、どれもこれも、ただ直接に人身攻撃にあるかの樣に見えるのは、僕等の取らないところだ。もつと有情的に、または銳利に、而も有効であつて貰ひたい。

大阪人の洒落は東京人のよりも下品で、また、ねつねつして居るので、嫌氣がさして、その本義を失ふことが僕等と話をして居る間にもある。或時、玉突き屋へ行つて、初めて逢つた人と玉を突いて居ると、『負けたら十錢損やさかい』は洒落のつもりだらうが、實際に負けかかつて來て、その一生懸命にしやべり出す樣子と云つたら、前言の心持ちを眞面目に實現して居るとしか見えない。金錢本位の都會には、趣味的餘裕は發達し難いだらうか？

新年三日間といふものは、店を閉ぢて、商買をしないので、煙草一つ買ふのにも困つた。夜などは、しんとしたものであつた。初荷といふ見えもしない。すべて物事がじみで、實利的で、東京の樣な花景氣をつけない。すべてが、もう、商人的に出來て居るのだ。且、一事件が起ると、直ぐ同業者に分り、また僅かの事も同町内に知れる樣な組織になつて居る。それに、近來、新空氣を呼吸する人士が增して來たので、商人でも人間としての價値をも考へる樣になり、新らしい發展を預表して居な

いでもない。新聞で云つても、保守的な『大阪朝日』よりも、進取的な『大阪毎日』が市中に於ては讀まれる樣になり、また『大阪時事』は品のいい新聞と云はれて根據が据わりかかつて居る。以上に『大阪新報』と昔の『萬朝』式で行く『大阪日報』とが加つて、競爭の姿だが、東京の樣に新聞社の數が多くないから、それぞれ發達の見込みがあるらしい。趣味といふ樣な問題も考へられるので、之を名とする東京雜誌もあちらこちらの應接室で見ることが出來る。『新思潮はまだ出まへんか』と、雜誌屋へ這入つて來た青年を見受けた時は、これが編輯者に對してその異數なのを祝した。

清交會といふ毎月一回の會合があつて、同地には珍らしい談話交換會である。僕等が東京でやつて居る龍土會の樣には、まだ歴史もなく、また邊幅を飾らない工合には行かないが、菊地侃二氏を初め、兎に角、多少の新智識にあこがれて居る有力家、辯護士、醫師、教育家、新聞社員、實業家等、三十名ほどが加入して居る。大阪の醫師社會には、割合に政治家的人物が多いので、議員または有志家として市の事業に容喙するらしい。新帝國大學の初めて關西に設けられることになつた際、之を大阪から退けて、京都へ持つて行かしたなども、同市に醫科大學の病院が出來ては、多くの開業醫がその影響を被るのを預知して、醫者中の有力家が反對運動をした結果だ。つまり、京都の同業者等はそれだけの意氣地がなかつたのだ。然し、角田浩々氏が朝日から毎日に轉社したことに對し、上級の社會から、まだ正當な理由を見留められて居ないのは氣の毒だが、かの菊地幽芳氏の如き者が小説家として大先生と呼ばれ、自家も亦それが爲めに自重して、大抵の會合には出席を斷つて居るのは、最も滑稽なことで、さすがは、まだ大阪だわいとうなづかれる。先般巖谷小波氏一派の來た時、その歡迎會にのぞんだのは珍らしかつたと云はれて居る。

七

芝居に就て云へば、大阪はもと、俳優の藝を磨く點に於ては、東京よりも寧ろ本場と見られて居た程で、現今でも、兎に角、物故した團菊左と時を同じくして居た右團次、團藏、仁左衛門、雁次郎等が踏ん張つて居るのだから、渠等から見ると、一時代若輩たるものばかりが居る東京とは、その威力に於て到底比べものにはならない。然し、渠等は舊劇の型ばかりにとびりついて居るのだから、新時代に適する新らしい藝道――新聞物を舊劇の標準で見せるのを指すのではない――を望むことは出來ない。この點に於ては、芝翫、八百藏、猿之助は似たり寄つたりとしても、東京の若手連、たとへば高麗藏、羽左衛門、左團次等の方がまだしも――五十歩百歩の差に過ぎなからうが――他日の望みがある。

右團次は老いぼれて、その得意の踊りももう冴えないにしても、仁左衛門の澁み、雁次郎の輕妙、團藏の塗りこくツた藝風には、或程度まで甘みが附いて居る。然し、團藏がもと東京役者であつたといふ事情を除いては、いづれも東京には向かないのみか、渠等の土地に於ても、同じ樣な型を見せられるに倦じて來て、高田一派の新劇に觀客を分たなければならなくなつたのだ。現に、道頓堀の

五座のうち、一は新演劇に、二は活動寫眞に占領せられ、餘すところの二座が漸く彼等の舞臺である。僕の行つた時は、いづれも滿員になつたが、三ケ日のことであつたから、當前であつたのだらう。四月頃に團藏が上京するさうだが、十年前とは違ふから、その有名な光秀や仁木彈正も大した歡迎は出來ないだらう。

人形芝居は文樂座と堀江座とに分れて居るが、前座に攝津、津太夫、越路あり、廣助、吉兵衛、猿糸あり、後座に、大隅、伊達あり、團平、小團次あり、桐竹紋十郎または吉田兵吉の人形つかひ振りも實に甘いものだ。東京人は一般に淨瑠璃を人形に添はすのを嫌ふが、それは聽き馴れない、また見馴れないせいでもあらう。馴れれば、なか〳〵賞翫すべきものだ。吉田屋に於ける夕霧伊左衛門、信長記の天下茶屋などに至つて、上手な淨瑠璃と三味線とつかひ振りとがぴツたり一致すると、場が引き締つて、聲は人形から聽えて來る樣になるのだ。かうなると、現今の樣に不熱心な俳優の似而非藝を見るよりも、遙かに人形の方が活きて居て、ずツと藝術の本領を得て居る。

人形芝居は僕の生國淡路が本元である。志賀矧川氏がその紀行文の一節に『淡路の誇るべきもの、兆殿司、嵐雪、高田屋嘉兵衛のみにあらず』と云つたのは「淡路常磐草」の著者にして、享保年間、國禁を犯して韓半島を跋涉し、後日、日露戰役の時益に立つた地圖を製した奇傑、仲野安雄翁を加へようとしたのだが、現代の如く藝術なるものが認められる時代には、傀儡師の元祖、貢蕉坊（因みに云ふ、木偶をでくのぼうと云ふのは、この人の名を訛つたのだ）の遺業も、一種の誇りとするに足るだらう。人形操座（一名、淡路座）といふのがあつて、その座本が二十軒餘もあり、一村擧つて同業者で、淨瑠璃語り、三味線ひき、でく使ひ、道具方を分業し、その魁たるものを市村六之丞、上村源之丞と云ひ、年中諸國を巡歷興行してあるいたものだ。日本一の大人形を使つて、なか〳〵文樂どころではなかつた。

淡路の源之丞と云つたら、代々その名を繼ぎ、明治年代になつてからも、有名であつた。僕が渠を最後に見たのは、十數年前、京橋木挽町の厚生館であつた。今では、その別派の藝術が大阪に固定し、文樂座となり、堀江座となつて居るが、淡路へ行くと、若い衆と云はれて、煙草入れを腰に提げ出すと、必らず淨瑠璃を稽古するので、何屋の主人、どこそこの隱居と云へば、素人でも、之を披露するのに、操りに掛けなければ滿足しないのだ。中には、上手から本氣になつて、大阪の本場へ乘り出し、金がふり撒ける間は『太夫、太夫』と歡迎され、いい加減使ひ果した時、まんまとほうり出されてしまうものがある。僕のまだ國に居た時、淨瑠璃が大相甘い娘の子があつて、その道の爲めに五百金で買はれて行つたのを覺えて居るが、若しその子がまだ生きて居て、尙その道に忠實であつたら、どこかの一座で名を擧げて居るだらう。

大阪築港があらまし出來たと云ふ當座は、なかなかな人氣であつたが、また今でも行つて見ると、隨分宏大な事業であるのは事實だが、陸上の設備がまだそのままにうツちやかしだから、目的通りの繁榮を見ることが出來ない。且、その計畫を立てた當時の人々には、七千噸――これが最大標準――より以上の船舶は、殆どその念頭にのぼらなかつた程だが、現今では、一萬噸以上のものがわが國に於ても出來る樣になつた。これは、大阪築港の樣な大計畫でも、半ば急速の進歩を見拔き得なかつた所以の一つである。然し、兎に角、あれだけの事業を進めて置きながら、大阪市民はぐづ〳〵して、いつまで之を、回航船で出かける呑氣人の、魚釣り場にして置く氣だらう？

電車も、築港から花園橋までは通じて居るが、他の計畫は漸く梅田停車場から天王寺へつツ切る一線を着手して居る。もつとも、目拔きの場所をうち拔いて、新たに道をつけるのであるから、その困難と費用とは、東京の比較を以つて考へては間違つて居る。大阪は、東京、京都、名古屋と違つて、電車の便はない代り、人力車の安いところだ。京都でも、或朝、北野から塔の段まで、一里半もあるところを、二十錢呉れいと云ふので、試みに十五錢に値切ると、まア、乘つて見た上で、値打ちがなければ負けますと出られたことがあるが、大阪の車夫も同じ行き方で、かけ値がないから、安心して乘れる。

抱への車夫などは、わざと威勢よくかぢ棒をおろすと、乘り手は直ぐ膝かけを車夫の背中に投げて、車を下りる。車夫は、また、手早く、背中のを取つて、脇へ挾へる。これが、東京でも同じだが、意氣な風だと思はれて居る。それに、車の速さは日本一流と大阪人は自慢するが、路幅の狹いせいか、四角や人込みで、自他の車夫がよけ合ふ工合などは、まどろツこしくて、僕等は見て居られない。もつとも、數年前、麻裏を穿いた若車夫の車に、天王寺から道修町まで乘つたことがあるのを、僕は思ひ出したが、そんな頓馬なにやけ車夫は、當今絶えてしまつたらしい。ただ見ツともないのは、相乘り車の澤山あることだ。二人分が一人半で濟むから、大阪人の始末な氣質に引かれて殘つてるのだらうが、夫婦相乘りなどは、馬車と違つて、餘り見よいものでもない。然し、一つ面白いのは、酒にでも醉つてる時で――或夜、お茶屋を引き上げる時、呼んだ藝者どもが『姉はん、相乘りがよろしい』と云つてるのを聽き、ずう體の大きい友人と僕とが一緒に乘せられるのかと思つて居ると、藝者どもの中から、二人が別々に分れて、僕等と同乘で、宿まで送つて來た。

風呂場の流しは、どの風呂屋でも、すべて石を敷いてあるのは、東京の板敷よりも氣持ちがいい。殊に朝湯などには持つて來いである。然し、水槽のふち石の上に桶を置いて口をすすいだり、同じ桶でふんどしを洗つたりするものがあるのは、面白くないことだ。且、細長い亂れ箱に足袋や股引や着物を入れ、自分の紋羽の腰巻でその上をつつんで居る男を見受けた時は、さすが、贅六根性の一發現だわいと思はれた。床屋も一體に奇麗でまた丁寧だが、何だか手のろい樣な氣がした。或時、天主教

の宣教師らしい外國人が這入つて來て、日本語で『いつもの樣に』と命じて、髮を刈つて貰つて居たが、神の與へる時間を空費しないといふ手本を示すかの樣に、刈つて貰ふ最中にも、左右いづれかの手を膝までさし延ばして聖書を廣げ、刈り子の臂をあちらこちらへ避けるに急がしい樣子と云つたら、最も好良なポンチ畫にもなりさうであつた。大事なレフレツシユメント、乃ち、休養をさうまでして遠ざけ、而も活人生に迂い書を讀み耽けるから、尙更らに活人生に迂いミイラ教師が出來るのである。

車屋にしろ、風呂屋にしろ、床屋にしろ、年末年始の御祝儀を貰つた時で、その袋を飾りつけて、もつと貰ひたいと云ふ樣子が見えるのは、どこの人情も變はりはないが、さういふ時節に限らず、寄席へ女義太夫を聽きに行くと、何町のなにがし樣よりだれそれへ何圓御祝儀と披露し、その紙幣を竹に挾んで、語り手の見臺のそばに立てるなどは、大阪でなければないことだらう。

今一つ競馬だが、花を引いたり、賭博をやつたりするのと違つて、勝負を公然とその瞬間に決するのであるから、男らしいかけ事だと云つて、大いに奮發して行くものが、大阪にも多い。人間を數倍した大動物が、一生懸命に疾驅して、一瞬一歩の決勝點を爭ふ勢を見ては、如何なる卑怯者と雖も、快哉を呼ばないことはあるまい。浪花節の讀み物が日露戰爭勝利の一大動機となつたと同前、競馬の如きは國民と社會とを活躍さすに於いて盛んに奬勵すべきことである。殊に、貴賤老若を問はず、不斷は內氣な婦人も多く行くのは賴母しい。大阪でも、之は同じことだ。僕が或料理屋へ行つてる時、その女將と女中とが鳴尾の競馬から歸つて來て、挨拶に出たが、その話をするにも胸が躍つて居たのは、社會の生活問題を頭腦に置いて考へて見給へ、金錢上の損得以上の或物が動いて居たのではないか？必らずしも馬に關するから景氣で終るばかりではない。前項に擧げた床屋に於ける宣教師とこの女將とは、興味に對する消極積極兩端の好一對ではないか？その日の勝負のうち、一方は馬がさきに、一方は乘り手の首がさきへ出たといふので爭論が始まつたが、後者をかけたものがかけ金だけを戻して貰ふことになつて、定りが附いた。

九

もとの同窓で、今はその學校の長をして居る友人と、住吉へ遊びに行つた。住吉は大阪人に對する最もいい公園である。今年の惠方に當つて居るので、詣人が殊に多かつた。あんなに長い松林の間を逍遙したのは天の橋立に遊んでからこの方初めてのことだ。もつとも、橋立の風景はその奇、神に入り、住吉の平凡で俗氣ある如きではない。そこを通り拔けて、わざ〳〵海岸まで出て見たが、大阪灣——茅渟の海の——海氣を吸つて、對岸、淡路島の浮ぶを雲霧の間にのぞんだ時、僕は先づ亡くなつた慈母の顏が見えた樣な氣がし、次ぎに九歲の時の初戀が思ひ出され、次ぎに又、美姬三千を從へて歸ると云つて鄕關を出たことが追懷された。更らに又、住吉のよりも長い松原——その松の葉色

は、今幽かに見える薄暈に加つて居るのだ――に、小學の同窓數名をつれ行き、『十八史略』で讀んだ藺相如が、趙の國から、秦の昭王の强請に從ひ、『十五城を以つて之に易ん』と云はれた和氏の璧を持つて行き、昭王に欺き取られかけたので大いに怒り、璧を取り返し、柱下に卻立して『臣が頭は璧と共に碎けん』と云ふくだりを仕組み、之を渠等に演じさせたところ、相如に扮した小供が璧を取り返すまではよかつたが、その次ぎの大事なせりふを忘れ、却つて『怒髮冠を指す』とある地の文句を云つてしまつたので、皆のものが笑ひ崩れたあり樣が、僕の心に浮んで來た。この剽輕者は床屋の繼子であつたが、あはれや、繼母の爲めに、下駄を以つて眉間を割られ、齒の跡なりに腫れた傷が死因となつた。

かういふことを思ふ時の外は、僕は故鄕が戀しくない。僕には、日本國その物を離れない間は、人の戀しがる樣な故鄕がないのだ。父が維新國引けの際、淡路へ移され、僕はそこで生れは生れ、育ちは育つたが、江戸言葉を使つて居た爲めに竹馬の友は少かつたのみか、小供ごころに印して消えない迫害を受けたことが多かつた。故鄕は寧ろ、僕の爲に、孤獨性と傲慢の念とを養ふところであつた。それに、僕の家の墓所も、祖父母一對のを除いては、すべて代々、故鄕とするには騷々し過ぎる東京にあるのだ。然し、それも馴れツこになつてしまへば、不安と騷擾との間におのづから休養も得られるので、かの古典派の喜ぶわざとらしい懷舊的隱れ家などは必要がない。僕の生涯は餘りに夢の如く現はれ、夢の如く消えて行つたので、今では僕の外に僕の賴むところはない。僕の故鄕は、乃ち。僕自身である。宇宙の騷擾も不安も悲痛もただ、僕の双肩にかかつて居るのだ。

水銀を流し込んだ樣に重く、平らかな海の表面は、平穩と云はんよりも、寧ろ數々の悲痛が込合つて、動きの附かないのであるかの樣に見えると、くるくるまわつて沈んで行く眞ツ赤な夕日は、不言不語の間に、心熱的努力の最後の色を呈して居る樣である。この勢ひを見ても、なほ、世人は之を不健全といふだらうか？僕はこれで以つて一生の活動をつづけたいのである。僕の落日觀は、この度の旅行に於て三轉した。はじめは、銀閣寺の山腹に於て、古典派と讃美を共にし、次ぎに阿彌陀ケ峯の絕頂に、獨り、わが國最大のデカダン家豐太閤の沒落を聯想し、住吉の海岸に至つて、終ひに自己の生涯に對する一奬勵を得たのである。デカダンたれ、デカダンたれ、デカダンは決して手段や方法ではない、實に一大努力の必須避くべからざる結果である。

住吉の社前、舞樂の庭で、敷いてある莚の上に坐はり、六名の巫女に舞ひを舞つて貰つて居る商人體の一族が居たので、立ちどまつて見ると、巫女は揃ひの扇を以つて、東遊じみた一曲を笛に合はせて舞つたばかり、極お粗末なもので、飾つてある鈴さへ手にしなかつた。何の祈願があつたのか知らないが、一族が奉納した物が少かつたのだらう。また大樹の根もとに小石が澤山あるのを、その石垣の間から杖などでかき寄せては拾つて居る多くの老若男女があつた。その小石が子供の出來るまじな

ひださうだ。迷信はいづこも同じことながら、さう手易く人間が繁殖せられるものなら、如何に大戰爭のあつた跡とは云へ、日本國民がうぢや〳〵出來て、例の移民問題が一層盛んになるだらうから、腰の弱い現今の外務省の官吏泣かせをやつて居るのだといふ、一種のなさけない感じが僕の腦に浮んだ。發展國民の一人からこの感じを全く取り去るのは、當局者の一急務とすべきところではなからうか。

松原の間に小さな茶屋が澤山立つて居るのは、この公園の最も俗な點だ。友人はどこかで晩餐をやらうと云つたが、さういふところでやりたくなかつたから、大阪へ歸つてから牡蠣飯屋へ這入つた。牡蠣は、大阪でも、廣島から來ると稱して居て、これ專門の料理は、殆ど至るところの橋ぎはにつないだ船で、客を待つて居る。滋養もある上、なか〳〵甘いものだ。東京でも、これを盛んに、また京都大阪の樣に簡便に、やつて貰ひたいと僕は思ふのである。

一〇

奈良は二三度見たことがあるので、この度は行きたくなかつたが、歸途、關西線に乘つて、法隆寺驛に下車し、同寺の伽藍寶物を一見した。非常に寒い日で、僕の外に參觀者はなかつた。規摸を印度に資り、匠を百濟に徵したといふ佛面伽藍の結構、木造にしてその美觀を一千三百餘年の久しきに保つものは、恐らく、世界に稀有の誇りであらう。寶物は隨分丁寧に見たつもりだが、金堂にしろ、寶藏にしろ、四方の扉を明けさしても、何分光線の這入り方が不自由なので、がらす越しに見せてある物などは一しほはツきりとは分らない。直接に研究の必要あるものが行くなら、一々之を光線中に取り出すか、またはランプか蠟燭を持つて這入るか、どちらかの便利を與へて貰はなければ駄目だ。

ふツくらした曲線によつて出來た地藏菩薩立像（國寶、百濟の國渡來）や丈のひよろ高い、ヤンキー然たる虚空藏菩薩立像（小野妹子將來）の如きは、然し、特色があるから、直ぐ目にとまる。金銅の鑄像などはいづれも奥深く飾られて居るので、却つてはツきり見えず、ただその輪廓と光背とが分るばかりだ。椎古天皇の御物、玉蟲の厨子といふのは、玉蟲の羽根を以つて靑貝の光に代へた物で、その扉に出て居る模樣は、丸善から發行する『學燈』の裏表紙に載つたことがあるさうだが、手にしながら、僕は氣が附かなかつた。その實物は單純な模樣であつて、まだ繪畫とまでは進んでゐない。

わが國に於ける壁畫で殘つてるのは、奥州の一寺とこの法隆寺とであらう。金堂の四壁は、各々その中央について居る重い扉で開らかれると、その左右に各々一間面の彩色佛畫が二面づつ（都合十六面）並んで居る。四隅に接して居る八面は光線不充分の爲めに餘り見えないが、入り口に寄つてる八面は、四方の口から這入る光に照らされて、多少全面を判ずることが出來る。古色蒼然たるものだが、變色やら、脫土やら、勞痕やらで、完全のままなのは殆どない。然し、赤珊瑚を碎いて色づけてあるところなどは、ぽろ〳〵しながらも、まだよく殘つて居る。原畫は止利佛師の作だが、一度燒け

たので、凡そ百年後、再營の時、和銅年間の名匠が元のままに再現したのだ。止利時代の畫式は、支那六朝の遺物と同樣、形體凹凸の變化に乏しく、曲線と雖も並行してゐるので、間が拔けて朝鮮人的である。壁畫の如き規模に於ても、まだ兆殿司の筆に於けるが如き卓犖の大規模は見えてゐない。高麗の僧曇徴が聖德太子を畫いたのだといふ掛け圖を見ると、また、丸で日本人にはなつて居ない。

もつとも、太子その人は輕浮淺薄なハイカラ黨の面影があつて、一面は僕の最も嫌ふものの一つだが、この法隆寺建立者當事の新事物は、すべて朝鮮唄かつたのだらう。舶來の佛像が朝鮮づらをして居るばかりでなく、日本で出來たもの、畫いたものでも、すべて朝鮮づらをして居る。一も二もなく佛法を盲信した太子に取つては、或は、朝鮮人の樣な間拔けな面に畫かれて、却つて得々として居たかも知れない。法隆寺に來たつて、この點を思ひ起さすものが多いのは、餘り氣持のいい方ではないが、さればとて、日本美術の源淵も亦ここにありと思へば、また有難い氣もする。ただ殘念なのは、光線の不充分なことで、あんなことなら、いつそのこと、大枚一圓の觀覽料を拂ふ代りに、それだけの畫はがきを五六組買つた方が、實物の形が跡までもはつきり殘つていいと思はれた位だ。

大佛は今修繕中で見られなかつたとは、奈良見物濟みの旅客が汽車中での話だ。あの圖拔けた大佛と大阪城の石垣の大石（下から上まで一石のところがいくつもある）とは、わが國史に於ける大權力者の發現を追想さす好材料である。ああいふ樣な千人萬人の力を要する馬鹿げた工事は、絶大の威嚴と壓制とが行はれる時代でなければ、決して出來ないことだ。かういふ考へをめぐらして居る間に、汽車は名古屋驛に着したので、鳥渡下車して、一老友の傳馬町に居るのを訪問し、歸途を急ぐので、ただ二三時間の懷舊談に名殘りを惜みて、再び同驛へ戻つた時は、もう夜が更けて居た。

二

いてふ返しの意氣な年增が、隅の方で、その袂や帶の間を頻りに探して居たが、つひに席を立つて、待合室を出て行つたのは、何か落し物でもしたのであつたらう。再たびもとの席へ戻つてからも、矢張り何かを氣にして居る素振りを見ると、落した物が見當らないのであつたらしい。やがてその態度が變はると、今度はハンケチを出して涙をぬぐつて居た。附近の休息所の女中にしては餘り品があり過ぎるので、誰れかの別れを惜みに來たのでもあらうが、そばに居る人も見えなければ、之に話しかけるものもなかつた。その寂しさうな樣子に、僕の好奇心が釣り出され、一方の隅から注意を怠らないで居ると、下り列車が着いた時、中央のテーブルに向つて腰をかけて居る會社員風の一老紳士が立ちあがつた。すると、その手から、女は白い毛布をひツたくる樣にして取り、無言で、紳士の跡について出て行つた。

他の旅客もおほかた居なくなつたので、跡の寒さを僕獨りで占領するかの樣にちぢこまり、ストーブの消えかかるのを見つめて居ると、いろんな妄想が形を現はして迫めかけて來た。やがてそれが油

のしたたる樣にをさまると、禪定の境が開らけて行く時の樣な氣持ちになつた。そこへ、突然、驛夫が石炭をくべに來たのに氣がつくと、ふと忘れて居たことを思ひ出した。外でもない、雜誌『少年』に送る原稿のことだ。同誌の發刊以來、ここに四五年間と云ふものは、僕は毎號少年詩二篇を出すことに定つて居て、そのうちの一篇には必らず北村季晴氏の作曲がつくのだ。對して骨折りを要する物でもないので、僕は毎月末の一二時間を之に當てがつてあるのだが、今回は旅行の爲めに七八日も後れてしまつたのだ。

鉛筆を持つと、おのづから出て來る習慣になつてるから、寒さにふるへながらも直ぐ出來た少年詩は『雪の汽車』といふのである。かうだ。

窓から　見れば、
いづくも　白い。
雪の　あした　の
汽車　こそ　面白けれ。
ぽツ、ぽツ、ぽツ、
がツたん、がツたん、がツたん。

すくめよ、すくめ、
枯れ木　も　綿に。
雪の　綿野　を
汽車　こそ　横切る　なれ。
ぽツ、ぽツ、ぽツ、
がツたん、がツたん、がツたん。

野やま　も　すさび、
枯れ木　も　去れよ。
早い　朝汽車
朝日に　勇みて　飛ぶ。
ぽツ、ぽツ、ぽツ、
がツたん、がツたん、がツたん。

右は作曲の出來易い樣に注意して作る方だが、今一つはいつも小兒に自然な調子を撰んで、おのづから口にのぼる樣にしてやるのだ。左に出來たのはねんねこ唄の口調によつて居る、『鳶の子』と題す

る物だ。これが出來た頃、漸く上り列車に乘れた。

ひゆうどろ、ひゆどろの　鳶の子　は、
都の　お母さん　を　戀しがり、
寒中、田舍　の　さむ空　を
山　より　高くも　あがつたが、
都は　遠くて　見えも　せず。
何日　寢たなら　歸るやら、
吹く風　ばかり　が　邪魔を　する。
いそいで　その巢　に　舞ひ下だり、
なアぜに　見えぬと　たづねたら、
お父さん　は　その子　を　だき寄せて、
お前の　お母さん　は　人でなし、
お前を　すウてて　家出した。

一二

行きには、月夜に何かの出現であるかの樣な富士をのぞみ、歸りには、また、ふもとまで眞白な雪を被つて、刻めば音がしさうなその姿を目前に見た。さきには遠く高く、のちには低く小さく、富士は之を見る時と場所と氣持ちとに從つて種々な樣子に見えるのだ。時に威嚴を以つて臨み、時に愛情を以つてほほゑみ、時に力ある命令者の如く、時に實體なき亡靈の如く、時に實物の如く、時に空想の如く、夢の如く見える時もあれば、うつつに似たる時もあり。大なる時もあれば、箱庭的の時もあり。何だか要領を得ない山だが、汽車旅行の際、窓に倚つて之を遠ざかり行くに從つて、なす〳〵なつかしさの湧いて來るのは、僕に限らず、すべての人がこの山に對して實驗するところだらう。（明治四十一年一月）

日高十勝の記憶

オホナイの瀧

日高の海岸、樣似（ように）を進んで冬島を過ぎ、宇山中のオホナイといふあたりに來ると、高い露骨な岩山が切迫してゐて、僅かに殘つた海岸よりほかに道がない。おほ岩を穿つたトンネルが多く、荷車、荷馬車などはとても通れない。人は僅かに岩と浪との間を行くのであつて、まごついてゐると、寄せ來る浪の爲めに乘馬の腹までも潮に濡れてしまうのだ。

或高い岩鼻をまはる時など、仰ぎ見ると、西日に當つて七色を映ずる虹の錦の樣なおほ瀧だ。その

裾を、瀧に打たれながら、驅け拔けなければならなかつた。その次ぎのおほ瀧は高さ五十尺、幅七八尺、俗に白瀧といふ。そのもとに、ぽつねんと立つてゐ南部人の一軒家がある。夫婦子供四人の家族だ。板や雜草で組み立てた、して家根には石ころをつみ重ねた家だ。

近年殆ど漁がなく、毎年、昆布百四五十圓から二百圓、フノリ並にギンナン草二三十圓、ナマコ三四十圓ぐらゐの收入を以つて、僅かにその生活を維持してゐる。十月初旬から雪がやつて來るが、それにとぢ籠められては、山へのぼつて、焚き木でも切るより仕かたがなくなるさうだ。

さう聽いて、頭上を仰ぐと、その山は直立した崖で、殆ど道もついてゐない。山に迫られ、冬と雪とに迫られるこの家族の寂しみを思ひやつても、ぞつとする。

そのあたりの潮が吹きかかる岩の間から、澤山のみそばへ並に岩れんげが生えてゐるのを二三株摘み取り、僕はそれを瀧と一軒家と自分の馬に瀧の水を飲ましたとのなつかしい記念にした。

猿留の難道

太平洋に突出する北海道の東南端、襟裳岬のもとを南海岸から東海岸に出るには、本道三難道の一なる猿留（さるる）山道を踏まなければならない。

追ひ分坂を歌別から庶野に越え、段々高くのぼつて行くのだが、この邊はよくおやぢ（乃ち、熊）の出沒するところだ。然し生き物のにほひがするのは僕等と馬子の愛奴（あいの）のセカチ（男兒）と、それらが乘る馬と、ついて來た小馬としかなかつた。

如何にも寂しいからでもあらう、氣がせかれ、自然に馬をぽつ立てるので、馬子のセカチは僕等に注意して、さう馬の尻を打つなと云ふ。早くつかれさしては、いよ〳〵難道にさしかかれば、倒れてしまう恐れがあるからであつた。

難道は降りだ。俗に七曲りと云ふのは、その實、十三曲りも十四曲りもあつて、それがおの〳〵十間または二十間づつに曲り、何百丈の谷底に落ちて行くのだ。馬上から見あげ、見おろすと、ぞつとして、目も暗んでしまう。親の乳を追うて僕等の馬につい來た小馬（三ケ月の）は、或曲り角で石ころに乘つて倒れ、すんでのことで谷底へころげ込むところであつた。

そんなにしてまでも、ポニイと云ふものは、てく〳〵と、どこまでも、親馬について來るのだ。日高を旅行すると、大抵の乘馬には、女馬なら、小馬が必らずついて來る。當歲から三歲まではさうだ。それがなか〳〵面白いもので、どこを來てゐるか知らんと思つて、時々乘り手がふり返つて見る。すると、相變らずてく〳〵やつて來るのだ。

山上の萩の露

僕等が猿留村に着したのは午後二時頃であつたが、驛遞ではつぎ馬がない、且、あすも十一時頃でなければ用意が出來ないと云ふのだ。で、そこにとまるのも胸くそ惡くなり、勇氣を出して、もう一驛さきまで徒歩することにした。然し二里半だと聽いたのが、實際、四里あつたには閉口した。

一里ばかり海岸を行き、それから山道に這入ると、日高の國境を越えて、十勝になる。僕等は足は勞れて來るし、日暮れには近くなるし。薄暗い低林の間の、アイノが毒矢にぬるブシ（とりかぶと）が立ち並んだ道路を進み、屢々小川を渡る度毎に、おやぢが出はしまいかと心配した。

僕は樺太の山奥に入る時、熊よけに、汽船から借りて來た汽笛代用の喇叭を吹いたが、さういふ用意がないので、僕は下手な調子で銅羅聲を張りあげ、清元やら、長唄やら、常磐津やら、新内やら、都々逸やらのお浚ひをして歩いた。その功德によつてか、幸ひ、おやぢの黑い影も白い影も現はれなかつた。

然し猿留山道の七曲りに似た九折道を登る時などは、唄も盡き、聲もよわり、足も亦疲れ切つた。これを越えれば、もう直ぐだらうといふを力にして、やつとのことで山の背まで達し、それから勾配のゆるい下り坂になつたが、今度はまた非常に喉が渴き、からだ中びしよ濡れの汗が氣になる樣になつた。

然し道に澤山生えてゐる小萩が、葉毎〳〵に露を帶びてゐるのは、それを見るだけでも實に氣持ちがよかつた。僕等は國境を越える時鳥渡雨に會つたが、それがこちらでは非常な降りであつたらしい。その名殘りで、道もじぶ〳〵してゐるし、萩の葉毎には觸れてこぼれる白露が置いてゐたのだ。

その露を踏み分けて進むと、そのこぼれが靴を通して熱した足にひイやりと浸み込む。それが僕等にはコツプで冷水をがぶつくよりもうまい味であつた。

中下方の農村

日高の中下方（なかげはう）には、僕の子供の時に聽かされた記憶を呼び起す淡路團體の農村がある。

王政維新の頃、淡路に於て稻田騷動なるものがあつた。阿波藩の淡路城代稻田氏が藩から獨立しようとする逆心があると誤解し、阿波直參の士族どもが城代並にその家來を洲本の城に包圍した。

そんなことがあつたのが動機になつて、稻田氏並にその家來の一部は、明治四年と十八年との兩度に、北海道に移住してしまつた。渠等には、淡路をなつかしい故郷と思ふ樣な氣はなくなつた。といふのはかの騷動の時、渠等のうちには、その妻女は直參派の爲めに强姦されたり、姙婦はその局部を竹槍で刺し通されたといふ樣な目に會つてゐるものがあるからである。

この鬱忿並に主君と同住するといふことが、渠等の北海道開拓に對する熱心の一大原因であつたらうと思ふ。第一回の移住者等が國を船出する時は三百戸ばかりであつたが、紀州の熊野沖で難船し、

百五十戸分の溺死者を生じた爲め、半數だけ（それが現今では僅かに三十戸）が北海道開拓の祖である。中下方にあるのはそれだが、第二回の五十戸は、今、同じ染退川添ひの碧藻村にある。兩村とも實に北海道の模範農村になつてゐる。

一見して、耕耘に熱心なことや永久的設備をしてかかつたことなどが分る。石狩原野の如きは、札幌でも、岩見澤でも、矢鱈に無考へで樹木を切り倒したり、燒き棄てたりして、市街地や田園などに風致がなくなつたばかりでなく、風防林までも切り無くして、平原の風を吹くがままにしたところがある。然し淡路人の村には、大樹をところ〴〵切り殘して風致を保つてゐる上に、家屋も他の方面で見る樣な假小屋的でなく、永久的な建築をしてある。

然し染退川が年々五十町歩も百町歩も、渠等の集積土質の良田を缺壞して行く爲め、その度毎に村人の戸數が減じて行くのは殘念なことだ。

新冠の御料牧場

僕が新冠の御料牧場に行つて調べた時、馬の全數千七百餘頭――そのおもな種類はトロター、ハクニー、サラブレド、クリブランドベー、トラケーネンなどだが、競馬用にはサラブレドが最もよく、この種の第二スプーネー號と云ふのが園田實德氏の一萬五千圓で買つた馬の父であつた。そのうちを馬舍から引き出して歩かして見せて呉れたが、それ〴〵特色があつた。背の高いのや、毛艶のいいのや、姿勢の正しいのや、足の運びの面白いのや――して、アラビヤ種のすべて目が鋭く、凉しいのが、最も深い印象を僕に殘した。

周圍二十里、面積三萬三千二百十町歩、放牧區域七十二區、各區をめぐる牧柵の延長七十里に達する大牧場――高臺の放牧地は、天然のままだが、造つた樣に出來てゐて、恰も間伐したかの如く、樹木がいい加減に合ひを置いて生えてゐる地上には、牧草が青々育つて、實に氣持ちのいい景色だ。

僕等は、行きには、その間を驛遞の痩せ馬に乘つて得意げに走つたが、立派な馬を澤山見た歸りには、一種の耻辱を感じて、逃げる樣にして驅け出した。

火山灰地の狀態

日高の門別村を東へ拔ける時、後ろを返り見ると、遙か西方に膽振の樽前山の噴火が見えた。眞ツ直ぐに白い烟が立つてゐるかと思へば、直ぐまたその柱が倒れ崩れて、雲と見分けが付かなくなつた。

あれほど活氣ある火力を根としながらも、空天につツ立つた烟柱は周圍の壓迫に負けて倒れるのであるが、僕はその時地腹に隱れた火力を想像して見た。

がうツと一聲、物凄い響が僕のあたまの中でしたかと思ふと、その火山の大爆發當時のありさまが瞑目のうちに浮んだ。その時、西風が吹いてゐたのであらう、日高の方面へ向つてその噴出した熔岩の灰が雲と發散して、御空も暗くなるほどに廣がつた。

その結果が今僕の目を開いて見る火山灰地である。數百年もしくは數千年以前に出來た地層がまざまざと殘つてゐて、膽振から日高の一半に渡つて、地下六七寸乃至一尺のところに、五寸乃至一尺の火山灰層となつて、その白い線が土地の高低を切り開いた道路の左右に、郵便列車の中腹の赤筋の如く、くツきりと通つてゐる。

旅中印象雜記

其一

▽明治四十二年九月二十八日。岩見澤、雨あり。

札幌にばかりゐて、餘り退屈になつたから、烏渡急速な、飛脚的な旅行を試みるつもりで、午後汽車に乘つた。して上ツつらばかりではあらうが、僕の心に受ける印象を書いて見たいのである。何が書けるかは、僕の旅中に出會はす物の何であるか分らない以上は、同じ樣に分らないのである。

車中で、ふと氣がつくと、あたまを繃帶した子供をつれた女客が三組乘り合はしてゐた。それが、子のあたまを緣として、話し合ふのを聽いてゐると、いづれも札幌の病院へ行つた歸りである。『あたたもですか』、『わたしの子供も』と云ふ樣な挨拶だ。どうせ、その御亭主の舊惡露顯の一端であるのを知るや、知らずや。その手合ひは、停車毎に一組、一組とゐなくなつてしまつた。

岩見澤で下りると、直ぐ北海タイムス支社の名島氏を訪ねて行つたが、烏渡留守であつたので、獨りで市街を散步して見た。鐵道四通の中心でありながら、市中は餘り活動してゐる樣にも思はれない。家々の建築工合を見ても、假建築が永久的な住まひになつた樣なのが多く、發展最中に不景氣の爲めにあたまを壓さへられてしまつたといふあり樣が見える。多分都會の發達に必要な『近在』なるものが少く、且汽車の客は通り過ぎてしまうのが多い爲めだらう。假建築のままに燻ぶつてゐる店などが少くない。宿へ歸つておかみに聽いて見ると、當地の宿屋のお客と云つては、多くは荒物の賣り込み屋、呉服屋、越中富山の藥屋、さなくば、色女をつれ込みの男ぐらゐださうだ。かう云ふのでもなければ、岩見澤大小二十軒ばかりの旅館が喰つて行けないと語つた。

散步の眞ツ初めに、四ツ角で、誰れかの葬式の行列に出會つた。餘り緣喜でもないと思つたが、横切るわけにも行かず、停立しつつ脫帽してその行列を通した。何々宗說敎所といふのが多いのに驚いたが、その一つを鼻垂らし小僧がわが家として出入りするのを見た時は、餘り感服も出來なかつた。

ところどころに、唐きびの實を軒に釣した家がある。樺太で云へば、漁師の戶外におほ蟹を繩で結

はへて釣すところだが、それを北海道的百姓で行つた型であらう。畑などは、茄子にせよ、大根にせよ、なか〳〵よく出來てゐる。

同宿の客に、京都から來たお婆アさんがある。話して見ると、當地に陶器の原料にいい土があるのを發見したので、職人を呼び呼せて、陶器製造所を初める、その場所を定める爲めださうだ。その話に據ると、室蘭線の某停車場地で料理店を開業してゐるおかみだが、その家業では儲けが少いので、人のやらない事業をと思つて、そこに考へが行つたのだ。それもなか〳〵いい考へだらう。京都あたりで十五錢、二十錢する陶器が、運賃と割れとを見込んでだらうが、北海道では實際五十錢から六十錢するのだ。それを運賃入らず、割れも少く製造出來るものとすれば、五十錢が四十錢、三十錢に賣れても、利益は充分に望まれよう。小樽附近にも陶器の原料にいい土があるさうだ。

其二

▽九月二十九日。岩見澤、晴。

朝、名島氏に伴はれて、先づ廳立空知農學校を觀に行つた。教師は十二三名、そのうち學士が四名。本年で三學年とも完成し、生徒總數百六十餘名。甲種農學校は、本道に於て、これが一つあるだけださうだから、札幌の理論的な農科大學と違つて、實際の農業に從事する人物を出す樣になればよからうに、若林校長の談に據ると、道廳、その他の月給取り志望者が殆どその全數を占めてゐるらしいのは、本道の農業界がまだ〳〵充分の發達をしてゐない證據であらう。

それから、空知教育會の圖書館を觀た。備へ附けの書籍が少く、市街のはづれに建つてゐ、且、讀書家の少いところであるから、入館者の數が寂しいのは尤もなことだが、教育が割合に發達してゐる空知管内であるから、今少しそんなことにも注意して、堅苦しい書物ばかりでなく、小説、お伽話、雜誌等、廣く讀まれさうなのをも備へて、一般人が餘暇をそこに過す便利を與へたらよからう。然し活動圖書館の設けがあつて、その書籍を管内の各村に巡回さしてゐるのは、わが國では、まだ珍らしいのである。

岩見澤牧畜生産販賣組合の北海道バタ製造所も亦ら珍しい。牛を飼ふ以上は、種を目的としなければ、バタや乾酪、鑵詰などを製するまで行かなければうそだ。牧畜が盛んらしい本道でも、そこまで行つてるのはまだ少い。それを觀てから、所々の田園や、果樹園や、牧場などをまわり、玉泉館といふ溫泉で午後半日を暮らした。

至るところ、かの腐爛病に罹つた林檎畑荒廢の跡を見ては、ぞッとするほど農産物盛衰の速かなのが思ひやられた。

名島氏の言に據ると、空知管内では、農家が餘り家畜を入れない習慣があるさうだ。然し北海道の

様なところでは、農夫は鋤鍬を取るかたわら、また牛馬を成るべく多く飼育する必要がある。その糞尿がどれだけ自然の肥料になるか分らないのだ。石狩原野が如何に肥えてゐるとしても、開墾の初めに肥料を使はないでもよかつたのをいいことにして、今でもそれを習慣にしてゐるのは無考へなことだ。そこになると。樺太の露西亞人はえらいところがあつた。その本國がさうなのからだらうが、農牧兼業をして、あんな痩せこけた島に於ても充分な農産物を擧げてゐた形跡がある。

其三

廿九日のつづき。

前便に於て、僕、岩見澤は發展の中途に於てあたまを壓さへられてしまつた、狀態があると云つた。今のところ、同町は外部から刺擊を受けることがなからう。餘り便利がよ過ぎて、汽車の通り越し客が多いからだ。然し內部もしくは近在からの發達は隨分見込みがある。廣い沃野を控へてゐるだけに、農牧事業が、どうせ、もツと盛んになつて來るには相違なからうし、その上、近い幌向川の上流に萬字炭山といふ立派な財源を持つてゐる。

同炭山は水準點以上に炭量三百七十萬噸、水準下のを合すれば一千萬噸以上に達すといふではないか？その炭質は本道最優等の夕張炭に匹敵し、一ケ年約十五萬噸の採掘量を豫定することが出來るさうだから、それを炭礦汽船會社が今やつてゐる樣な、架空鐵索によつて三里の道を夕張に運ぶなどさせず、速かに萬字から岩見澤まで幌向川を添ふた鐵道を布設するに如くはなからう。幌向川沿岸も亦一體に炭層が連つてゐて、露頭は累々として至るところにあると云ふではないか？して、その沿岸はまた殖民地になつてゐて、大きい農場や鹽泉もあるさうではないか？さういふことを考へて見ると、岩見澤は今意氣があがつてゐない樣な町でも、なか〳〵望みの多いところだ。

僕は札幌からの急報に接して、今夜、最終列車で札幌に向つた。車窓からながめると、十五夜の月は廣漠たる原野を照らして、秋の夜氣が僕の寂しい周圍に迫つて來た。六月から家を出で、樺太に一夏を送り、引きつづいて今また北海道を放浪する僕は、早く東京に歸りたい樣な氣持ちになつたが、汽車が幌向原野の一端を走つてゐる時、この不毛な泥炭地にもところどころ人家の燈火が見えるのを不思議に思つたと同時に、その燈火は丁度僕の樣な一文なしの寂しみを表してゐるのだと考へた。如何に北海道へ來ても、金がなければ何等の計畫も成立しないと等しく、かの火をともす家人が一個人として如何にこの大泥炭地の一小地積を開墾し得たとても、原野全體を乾燥さす爲めに大排水をしない以上は、その小開墾は殆ど無効力に終るだらう。

幌向原野に限らず、その他に美唄原野、雨龍原野など、國家事業の一つとして、先づその全體の大排水工事を起し、それから耕作、もしくは牧草培養などに使用さすやうにすれば、不毛の泥炭地と

て、決して馬鹿にして置くべきものではなからう。

其四

▽十月三日。膽振國鵡川、晴。

道會議員田口源太郎氏が土木勸業調査員として膽振、日高を巡視するに付け、僕も氏と共に行くことになつた。今一人、道廳の古賀技手もこの一行に加はつた。汽車で沼の端まで來たが、それからがたくり馬車に乘つて、鵡川へ着した。

勇拂まで來る間に、石垣某の大牧場や、殆ど全く大きな樹木のない泥炭地がある。三間幅の道は附いてゐるが、原野の表面と同じ高さである上、左右に排水溝を用意してないから、雨の日に車のわだちの喰ひ込んだ跡がでこぼこしてゐて、僕等の車が非常にがたくりして困つた。至るところ、火山灰のあるところだから、それを利用して何とか甘く道路を堅めるやうにすればいいのに。

勇拂は十五六戸の漁付で、小鰊とイリコとによつて立つて行くらしい。そこから一里半ばかりは丸で沙地で、車の輪がさく〳〵もぐり込んで道を毀して行くので、道路のつけ方が殆どないくらゐだ。そこには、イガボタンが赤い實を結んで澤山生えてゐるのを見た。イリシカベツ原野は三百戸の殖民豫定區劃が出來てゐる火山灰地だが、地盤が低い爲め、毎年五月頃になれば、水につかるし、開墾しても、二年目には肥料を施す必要があるさうだ。

鵡川、外七ケ村の役場は千六十戸ばかりを支配してゐる。僕等はその戸長高松氏に會ひ、種々の事情を聽き取つた。三十里を流れる鵡川の沿岸は、三井並に王子會社の木材を供給するところで、本年、兩社の流送した石數は十萬だが、來年からは王子會社だけで二十萬石の豫定ださうだ。ところが、それが爲めに河水を汎濫せしめたり。堤防地を缺壞せしめたりすることが多いので、その沿岸の農民は會社に向つて、損害賠償的抗議を申し込むし、會社はまた、この川が河川法によつて規定されてゐないのを楯に取り、傍若無人の態度をつづけてゐる。この問題は、互ひに讓り合つて、早く無事にかたづけるがよからうと思はれる。聽けば、隨分あはれな川で、その兩岸は沖積土であるから、浸水毎に濕める灰の如くずぶ〳〵解け崩れて行くので、流れの道筋が度々變動し、堤防地と農地との區別がなくなつてゐるところが多くあるさうだ。

この村から三四里奥に蔚別の土人部落があるが、そこは土人の方が却つて勢力があり、小學校でも、日本人の子供が土人の子供によくいぢめられるばかりでなく、日本人が土人の爲めに小作をしてゐるのもあるさうだ。大河内コビサントクといふアイヌの如きは、一ケ年に百圓の村費を負擔し、大きな土地の所有者であると同時に、殘忍な手段を弄する金貸で、金と女とよりほかに樂しみはないと云つてゐるさうだ。

僕等は五時間の汽車と六里の馬車とに乘りくたぶれたが、內地では見られない大原野を横切るのは雄大な氣がして實に愉快なものであつた。殊に、膽振の原野のどこまでも一直線に走つてゐる道路は、がた馬車を驅りながらも、最も強い印象を與へた。

其五

▽十月四日。日高國下下方（しもげはう）、晴。朝、鵡川に初霜あり、下下方になし。

七時半出發して、平取に近づく頃から、土人に出會ふことが多くなつた。アイノのセカチ（男兒）が一人僕等の馬車と共に二丁ばかり走つたが、なか〳〵足が速い。沙流川の上流、平取には、アイノが四五百戸、全戸數の九分まであるさうだが、僕等は行く暇がなかつた。佐瑠太村は五日目毎に函館から定期船が來る便利を持つてゐる。沙流の大橋は鐵木混合だが、長さが九十五間、して馬國にあるだけに、橋の欄間には驅け馬を切り拔いてある。親馬が行くと、殆どどれにでも、必ず小馬がついてゐるのも亦僕には目新しい。

門別村を通り拔ける時、後ろを見ると、遠く樽前山の噴火が見えた。眞ツ直ぐに白い烟が立つてゐるかと思へば、直ぐまたその柱が倒れて、雲と見分けが附かなくなつた。それから多少高低があつて、切つた道路の左右には、東海岸一帶の地層の特色を現はしてゐる。上ツつら六七寸乃至一尺は土質が惡くもないが、その下が直ぐ五寸乃至一尺餘の火山灰層で、その白い線は、第一層と第三層（これはいい土だ）の間を、郵便列車の中腹の赤筋の如く通つてゐる、而もそれが膽振の一半から日高一半に續いてゐると云ふのだから堪らない。牧場には差支へなからうが、して、牧場は僕等の道の兩がはに、柵をめぐらして澤山あつたが、農地には不適當だ。榊の木が多く生えてゐるが、一樣にひねこびて、低く曲りくねつてゐるのばかりで、眞直ぐに高く延びたのはない。して、そのところどころに、日本人の家族で、アイノ人と同樣なみじめな小屋に住んでゐるのがある。

鶴鴿の多いのも注意を引いた。賀張村からこちらへ濱なすが多くなつた。前便でイガボタンと云つたのがそれだ。樺太では、六月の末にその花の時期が過ぎ、七月の中頃にはもう實がなつてゐたが、日高では、今頃赤い花が見られると同時に、また赤い實が附いてゐるところもある。

門別から荷馬車であつたが、厚別から、僕等は僕の長らく廢してゐた乘馬になつた。僕も、怖々ながら乘つて見ると、腰はふらつくが、然し、左程心配するには及ばなかつた。右に山（海岸まで低い山が出張つて來た）、左に洋々たる太平洋を見をろし、落ちても怪我はない砂濱を驅けらすと、尻の痛いのも忘れて、僕の心は延び〳〵した。春になればトドが集つて來るといふトド岩を後ろにして、少し山路にも這入つたが、下下方まで五里の道を午後二時から四時までの二時間で乘ることが出來た。

下下方、外十四ケ村の靜內村役場に行き、長谷川村長から土地の狀況を聽いた。和人の戸數九百

零五、人口二千六百三十五に對し、土人の戸數三百七十、人口一千六百八十四だ。耕地二千五百五十七町歩に對し、牧場地九千七百九十四町歩だ。して牛二百八十六頭に對し、馬が一千七百九十三頭だ。耕地よりも牧場、牛よりも馬だ。海岸から三四里奥へ這入らなければ、熊笹がないさうだ。村民の馬は殆ど全く實用向きに育てる方針だ。と云ふのは、昨年來競馬熱が冷却したので、軍馬もしくは普通の乘馬としてより外に賣り口がなくなつたのだ。値段も昨年よりは半額もさがつたが、馬市で平均百二十圓であつたさうだ。

同村でも、二三里上へ行けば、濶葉樹が繁茂してゐて、枕木の原料になるさうだ。然し、ここにも染退川と云ふ難問題がある。山までは五里ばかりあるが、その間を、他の川と同樣、北海道流に曲りくねつてゐるので、雨が一日降り續くと、たとへ溢水しないでも、その水勢が兩岸の隅々をつつき毀し、集積土を以つて成る田地を三十町歩も五十町歩も流してしまひ、河底は荒れ果てて、ヤチや河原となつてゐるところが多い。村費を以つてそれが回復の出來ないのは勿論、地方費でやることにしても、充分の調査をしてから莫大な費用を要するのだ。然し工事をせずには置いとけまい。

この染退川の奥には、大理石があるさうだし、滋石がとまつたことがあるのを見ると、鐵鑛もあるらしい。また、松前侯が掘りかけた金鑛もある。厚別の國道には、石油が湧いてゐる。この日の行程十三里。

其六

▽十月五日。下下方、雨、時々降る。

新冠の御料牧場を見に行く途すがら、染退川の荒廢を調べた後、中下方の淡路團體の農村を通つた。ここの農民は、明治四年、阿波藩の淡路城代稲田氏に從つて移住して來た從臣だ。三百戸ばかり一緒に出たのだが、そのうち百五十戸は紀州熊の浦沖で難船してしまつた。その殘部（現今では僅かに三十戸）が北海道開拓の祖である。僕も淡路生れであるから、この話は子供の時から聽かされてゐたので、その實際を見て、多大の感慨を催さざるを得ないので、そのうちの一軒を訪問して見た。

淡路人のまた別な團體が同じ川の上流、碧藻村に五十戸ある。これは、明治十八年、移住した仲間で、赤心社經營の荻江村と共に、本道の模範村となつてゐる。中下方附近は土質もよく、餘程深く掘らなければ火山灰などは出ない。米は一反歩に付き五斗入り四俵半をあげるさうだ。全體、淡路人の開拓成績がいいことは、一般の認めてゐるところ——その一二例を云ふと、耕耘に熱心なこと、永久的設備をしてゐること等だ。石狩原野の如き、風防林は勿論、家屋の附近にも樹木が殆ど全く影がなくなつてゐるに反し、淡路人村では、ところどころ大樹を切り殘して、風致を害しない樣にし、家屋も亦假小屋的でなく、永久的な建築をやつてある。思ふに、これは、城主に從つて來たのが尻を落ち

付けた一原因でもあらうが、今一つ忘れてはならないことがある。乃ち、稻田の從臣等は、移住の少し前、淡路に於て、阿波藩主蜂須賀氏の直家來から、藩主のあづからない事情の爲め攻め擊たれ、妻女は强姦され、姙婦はその局部を竹槍で刺し通されるほどの目に會つたのだ。その鬱忿が乃ち本道開拓熱心の一大原因であつたらう。

御料牧場に行き、山下場長から多くの種馬や牝馬を見せて貰つた。少しでも馬に乘つて見ると、馬の說明などにも耳を傾ける樣になるものだ。今、全數千七百餘頭ゐて、おもな種類はトロター、ハクニー、サラブレド、クリブランドベー、トラケーネン等だが、競馬用にはサラブレド種が最もよく、この種の第二スプーネー號が園田實德氏の一萬五千圓で買つた馬の父だ。競馬熱が冷めてからの調馬方針は、乘り馬、引き馬として丈夫なのを出すにあるさうだ。前月の馬市で、同牧場の雜種馬は平均二百二三十圓に賣れた。蕃殖の割合は雜種で七分强、洋種なら八九分に行くさうだ。

四十二年度の收支豫算を見ると、收入十一萬八千百十三圓、支出十一萬〇百四十四圓。差引利益七千九百六十九圓。利益の少いのは設備擴張の爲めで、前年度は三萬餘圓の總益があつた。牧場の周圍二十里、面積三萬三千二百十町歩。放牧區域七十二に分れ、各區をめぐる牧柵の延長七十里に達す。高臺の放牧場は自然のままだが、造つた樣に出來てゐて、恰も間伐したかの如く、樹木がいい加減に生えてゐる地上には、牧草が青々育つてゐて、實にいい景色だ。その間を通る時には、驛遞の痩せ馬に乘つてゐても氣持ちがよかつたが、立派な良馬を澤山見た歸りには、僕等は一種の耻辱を帶びた心持ちで逃げる樣に驅けて來た。

牧場で、空知農學校生徒の修學旅行組に出會つたが、その多くは腰を曲げ、顏を青白くして歩いてゐるので、田口氏はそれを見て云つた、渠等は蝦の樣だ、如何にも元氣のないのは、運動の不足を證するのかも知れないが、あんな生徒が社會に出て有爲な人物になれるかどうか、疑問だと。

アイノの家が市父並に遠佛のヌツカに十餘戸ある。僕等はその一軒に立ち寄つて見たが、耕地があつて、不完全（雜草を充分に拔き取つてない）ながら農業をやつてゐる家だけに、生活狀態が多少進歩してゐる。家には立派な床板を張り、子供は小學校で習つた字を障子に寄麗に書いてあつた。

歸りにも、川の破壞場所を見たが、實にひどいものだ。淡路團の所有農田などは五十町も百町も流されてなくなつてゐる。鵡川は木材流送の爲め缺壞するに反して、染退川は洪水の出る每に田地に喰ひ込んで來て、ほうツて置くと、つひには人民の所有地を平らげ、その餘波は御料地にまでも及ぶに相違ない。今、急に之を豫防するの必要がある。これは沿岸人民を安堵せしむる所以であると同時に、開拓の祖たる功勞ある淡路團體を遇する一端にもならう。且、この川の沿岸には開鑿道路がない。現今通つてゐるのは、人の田地內に出來た自然の小徑に過ぎない。これを直す必要もある。

この日の行程八里。僕等は前夜のと同じ宿に一泊。前夜も今夜も村長、村會議員、並に有志諸氏が

來て、陳情するところは水と道路問題であつた。

其七

▽十月六日。日高國浦河、小雨あり、夜、强雨。

昨夜は大風雨あり、僕等は下下方の旅舘が津浪に襲はれはしないかと思つた位だ。今朝、樺太の僕の工場からの電報が來て、直ぐ來いとあつたが、何のことか聽きにやつた。

午前八時出發。昨日、浦河から迎へに來て吳れた岡崎技手と都合四名、荷馬車に同乘だ。このあたりから山が海岸に迫つてゐる。その間に國縣道を走るのだが、火山灰があつても少いので、草木の繁殖工合が違つて來て、牧場並に耕地が多くなつた。

海岸にあがつてゐる船で、形は磯舟に似てゐるが、左右が前後に迫つて、ぴんとした舳艫の反り方が如何にもいい氣持ちなのは、僕が露領樺太のギリヤーク人部落で見たのと同じで、ただ舳さきの左右にそれと等しい定紋が附いてないのを多く數へることが出來た。アイノの所有に相違ないと思つて注意すると、シヤモとアイノの見すぼらしい雜居部落がそこ、ここにある。春立村の如きは、比較的に大きい。して、いづれの人種に拘らず、板どりやその他の草を逆樣に編み並べて、家の壁板に換へてあるのがあつた。

三石村六ケ村は戸數八百八十、人口五千百零四のうち、土人九十戸、四百二十九名だ。役場で鈴木村長と話してゐると、アイノのメノコが數名收入支出口へ出頭して來たのが見えた。同村の海岸三里の間に於て、秋鰺（鮭）鱈、鰯なども取れるが、ここの昆布は有名な物だ。然し、年三千石内外を標準としてゐるのが、年々減少しく行くのは、濫獲にも依るだらうが、ここにまた菅藻（俗に青藻）と稱する害草があつて、昆布の繁殖を妨げることが非常たさうだ。或人がこの害ある海草を十坪ばかり拔き取つて置いて見たら、海底はそこだけよく昆布が育ち、船三杯に積み切れないほどであつたと云ふ。この村内にも、三石川並に鳥舞川の治水問題があつて、調べて見ると、なか〳〵うツちやつては置けない事情が分つた。

鳥舞原野や、赤心社農場のある狩伏村を通る際、ブシの花が咲いてゐるのに氣が付いた。三笠橋を渡つた時、山手の方にぴかぴかする物があつたので、御者に聽くと、鳥を追ふ爲め鏡を樹上に懸けてあるのだと分つた。豚芋といふ草で、一丈ばかり延びて、黄色の花の咲いてるのがあつた。

浦河へ三時四十分に着いた。支廳と共に、浦河町、外三ケ村の組合がある。この組合管内の戸數千五百九十四、人口六千五百九十三、そのうち土人の戸數六十六、人口三百二十一。他の國と違つて、土人の年々增加するのは、保護の行き届いてゐる結果かも知れないが、また純粹種でなく、雜種あひの子の殖えるのかも分らない。先月の馬市から、札幌や岩見澤の博勞が五十名ほど、例年の通り、平

取からこちらへ這入つてるさうだが、渠等は馬の價格を踏み倒して、今年甚しきは一頭四圓五十錢、七頭五十圓ぐらゐに買つたのがあるとのことだ。

これまで見て來たのに據ると、縣道は沼の端から鵡川までは三間幅だが、それから二間半幅になり、日高に入つてからは二間幅になつてゐる。もつと廣くする必要がある。而も排水用意が足りないので、いつもじぶ〳〵して乾かない。その狹い道を車馬が通るのであるから、道路の保存上面白くない上、往來が不便だ。三石村長の如きは、崖崩れの爲めその乘り馬車がころげ落ち、馬の前足が道路にとまつたばかりで、足の强い馬であつたからでもあらう、僅かに引きあげられて、生命に異狀がなかつた經驗を持つてゐる。そんなことはまだ珍らしくないので浦河の前支廳長西氏の如きは、韓太子來遊の際衝突して、馬車が顚覆し、大怪我をして、今だに療養中だ。これは、その道の技術家等が學理と體裁とに拘泥して、實用を輕んずるのにも由るだらう。

日高はまた海運の便に乏しい。函館からの補助航路は浦河に一ケ所寄ることに定まつてるが、復航の時は素通りすることが度々だ。それが爲め一昨年末から今年の初めにかけ、米噌が缺乏し、大小豆や蕎麥粉を喰つて僅かに饑渴を免れた樣なことがある。

田口氏の云ふには、國道が海濱を通じてゐる間はまだ駄目だが、二三里も內部に出來る樣になつてこそ、初めて日高の繁榮が期せられる時にならう。何故この國人がやかましく云はなかつたのであらう、海陸の交通聯絡が不足で、やがて敷設されるだらうが、今では鐵道もない。早く航路と鐵道とを完成して、貨物の集散をもつと自由にしなければならないと。實際に、この國の主產物たる馬は他日各府縣に出して販路の競爭をやらなければならないのに、今では、運賃その他の諸費の爲めにいくらも利益にならない。木材でも、隨分豐富なのに、不便の爲め手を着けるものが少い。その他、日高がすべての鑛物國であるのは知れてゐる上、浦河街道筋には粘土で洗ひ粉になる物があるし、幌別川の上流には、硫黃もあるさうだ。然しかういふ物は、交通がもツと便利になつてからでなければ、その利益を得られないのだ。

この地の經濟狀態を見るに、交通不便の爲め土地に金持ちがないので、函館などから融通をして貰ひ、甘い汁は他國人に吸ひ取られてしまう。たとへば、二分三分の高い金利の金を借りて、馬を飼ふのだから、到底引き合ふものではない。殊に、昨年からの不景氣では、多少氣の利いた下駄同樣に馬を賣つてしまうのは、實に端から見ても殘念だが、國人が眠つてゐるのが其一大原因ではなからうか？

天理教なるものの發展には驚く。鵡川に一つその教會があつたが、ここにもその仙臺分教會浦河出張所がある。

支廳長村本、組合長瀨島兩氏、その他有志の發起により、僕等の爲めに歡迎會が催された。その席

で田口氏は一場の演說をした。隨分盛大であつた。

日高の國では、各町村に向つて共同放牧場が付與されてゐる。これは北海道に於て多くないことで、馬產國の特典であらう。

この日の行程十一里餘。

其八

▽十月七日。日高國幌泉、晴。

午前八時、浦河出發。組合長瀨島氏、西舍村の鎌田氏、その他有志諸氏の案內で、西舍の國有種馬牧場を見に行つた。その總面積一萬五千町步、種馬十二頭、牝馬八十頭。すべての設備に於て、御料牧場には及ばない。世間からの刺戟がないままに眠つてゐては、馬も人も退步してしまうだらう。然しアラビヤ種の馬は、どこで見ても、眼が銳敏でいい。また、アングロノルマン種で、その脊が五尺五寸のがあつた。

田口氏は、臨時道會の爲め一旦歸札する必要が出來たので、ここから僕と暫く別れることになつた。從つて、僕等の爲めにいい說明を與へて吳れた古賀技手とも別れ、僕は浦河支廳の岡崎技手と二人で、幌別川を渡つて進行することになつた。この川は今日までに二百町步の耕地を流してしまつた。して、橋がないので、僕等は馬を泳がせた。それから少し行くと、山腹の道路が四五十間ほど水の爲めにぐちやくしてゐるところがある。これは、西舍の牧場へ行く途中の山道が谷底まで崩れてゐるのと同樣、山ぎはの方へ充分な排水溝がついてゐないからである。

樣似村八ケ村の役場へ立ち寄つたが、村長は留守であつた。管內の戶數六百四十七戶、人口三千二百七十七、そのうち土人が七十四戶、三百三十六名、放牧の馬一千五十頭。海產物は昆布がおもな物だ。この奧には石灰石が澤山あり、ウンベには小樽人が私營する金山があるさうだ。ソビラの岩といふのは、山からかけ離れて、海中に二つも三つも高くそびえてゐる。天台宗の等樹院は百五六年以前の建物だ。

それから、崖上の道になるが、その十數丈下の海濱では、和人が土人と共に昆布の拔けて來たのを、長い紐のさきに石を結び付けたのを以つて、拾ひ取つてゐるのを見た。冬島の小學校で、樣似村長の菊池氏に會つた。氏の話に據れば、同小學校にはアイノ生はないが、他にゐる土人は、どこでも、すべて算術などは成績が惡いが、從順で、眞面目で、習字並に作法はいいさうだ。然しその家族が無敎育であるから、家庭に於て丸でぶち毀されてしまうのだ。かういふことは、これまでの道すがらにも聽いたことで、土人はまた力が强く、お祭相撲ではいつも和人に勝つさうだ。

冬島村字山中、オホナイといふ所に、大きな瀧が二つ三つある。高さ五十尺または三十尺、幅七八

尺のもある。そこらは海岸で、浪うち際を浪の退く間を見て通るところもあるが、僕等が高い岩端をまはると、しぶきが當るので、急に雨が降つて來たのかと思へば、頭上に瀧が落ちてゐるのであつた。それに西日が當つて、虹を現してゐるのは奇麗であつた。白瀧のもとに夫婦子供四人の家族(南部人)が板や雜草で組み立てた、して家根には石ころをつみ重ねた家に住んでゐる。近年殆ど漁がなく、毎年、昆布百四五十圓から二百圓、フノリ並にギンナン草二三十圓、ナマコ三四十圓ぐらゐの收入を以つて僅かにその生活をささえて行けるだけださうだ。このあたり、おほ岩を穿つたトンネルが多く、荷馬車などの通ふ道はなく、漸くにして岩と浪との間を行くのだ。岩には、奇妙な草花が二種あつたが、二種とも僕等の見たことのない物だ。

幌萬川の橋ぎはに、函館人某の小製材會社があつて、昨年は三萬石、本年は一萬石ばかりを流送したさうだ。同所の驛遞は馬があるのにないと云つて僕等を止めようとしたので、樣似から乘つて來た馬をつづけることにした。おかげで、馬の進みが遲く、日暮れ頃、五時半に幌泉へ着した。

幌泉九ケ村は戸數六百五十、人口三千六百四十五、馬二千五百九十二頭、水產物はおもに昆布・鰯・鰈・鱒等だが、本年初めて靜岡縣から卷き網を取り寄せ、マグロを取つて見たら、八月末から九月一杯で三千尾ばかりあがつた。然し魚港がないので、勢力を樣似に取られてゐる。もとは浦河を初め、十勝の廣尾、大津の漁夫は一旦ここへ引きあげて來たので、宿屋も十二三軒、女郎屋も九軒あつたさうだが、今は前者は木賃を入れて六軒、後者が三軒だ。八十噸ばかりの汽船をこの村で所有してゐる。

この春、軍馬購買があつた節、浦河では三百頭のうち十九頭採用されたが、この幌泉では、四十四頭のうち二十七頭當つたさうだ。村人の產馬改良組合がある。不思議なのは、牧場に牧柵なく、農地に却つて柵をめぐらす必要があることだ。雪が年中降らないので、最も自由な放牧の仕方で、いつ子が生れたのか分らないほどだ。ただ種馬が少いので巡回交尾の必要を訴へるものが多い。

ここにはアイノがないと云ふ。その理由は雜種ばかりだからだ。日高は火山灰が少くなり、土地がよくなる方に來るに從つて、土人が消えて行くのが一つの不思議だ。アイノはいつもいい土地を發見する先導者であるが、それをよく開墾しないので、追つ拂はれて、和人がそれを占領してしまうのだ。

この日の行程十三里餘。

其九

▽十月八日。十勝國音調津、途中雨あり。

太平洋に突出する、北海道の東南端、襟裳岬は、幌泉の宿から僅かに三里だ。この宿から初めて山

道といふ山道を踏むのだが、而も本道三難道の一なる猿留山道がある。それを避けて海岸を行けば、近いさうだが、おほきな岩を攀ぢて渡つたり、浪の退く間を四五十町も走つて通らなければならないところがあつて、馬などではとても駄目だ。その上、風が強く、そのあたりの小越村の如きは、全部九十戸が九十戸とも、九尺も十尺も吹き集る砂の爲めに埋められ、別なところに移轉するの止むを得ざるあり様になつた。して、また、山道の方もこの頃熊が出ると云ふのだ。

僕等は八時出發、襟裳岬の根もと、追分坂を歌別から庶野に越え、在田牧場の前を通つた。谷々の樹木は半ば紅葉してなかなか風景がよかつた。角岩の坊主山が最も高い。その山を左に見ながら、廣い、深い谷を一つ隔てた山腹または山顚を進むと、東海の青浪が見えつ隱れつする。して、三四里行くと、猿留山道のこなたを登ることになるが、そこまでには牛馬の放牧されてゐるのがあるから、何となく人間のかをりもする樣な氣も出る。然し、實際は、幌泉へ歸つて行く役人に獨り會つた切りで、あとは僕と岡崎氏と馬子と、してついて來た土人のセカチと、三人だけだ。寂しいからでもあらう、氣が急いて、自然に馬をぽつ立てると、馬子は屢々僕等に注意して、さう、馬の尻を打つなと云ふ。

いよ〳〵猿留の難道を降つて見たが、俗に七曲りと云ふのは、その實、十三曲りも十四曲りもあつて、各々十間または二十間づつに曲つて、何百丈の谷底に落ちて行くのだ。馬上から見上げ、見下すと、ぞつとして、目も暗んでしまう。親の乳を追ふて僕等について來た小馬（三ケ月）は、或曲り角で石ころに乘つて倒れ、すんでのことで谷底へころげ込むところであつた。そんなにまでしても、ポニイと云ふものは、てく〳〵と、どこまでも。親馬について來るのだ。僕は、これによつて、かの米國文豪アーヰングが、リプヴンキンクルの子が、ぎやア〳〵泣きながら、リプの鼻アを追ひまわす形容に、小馬を持ち出したのを思ひ出すのだ。

兎に角、この山道が通路である限り、日高十勝の聯絡は東南方ではよく取れない。浦河から直ちに十勝線に達する道路が開けるまでは、たとへこの道が改修せられないまでも、指定工事費を以て、年年修繕を加へる樣にでもしなければなるまい。これを下りてしまつたところに助け小屋が一軒ある。そこに、巡回の馬政官を送つて歸りの幌泉村長と在田牧場の主人とが酒を飲んでゐた。大分醉つてゐたので、僕等は眞面目な話はし出さなかつたが、渠等の勸めにより、そこで中食をした。アイノの馬子にも持つて來た辨當を喰つたらどうだと云つたが、馬が勞れるほどぽつ立てて來て、ここで暇をつぶせば、何の甲斐もないではないかと、泣き出しさうになつた。然し、在田氏が勞れる樣な馬をなぜ貸したと怒つた眞似をしたら、セカチはまた泣き出した。慣した馬の可愛いのは尤もなことだと僕等は思つた。

午後二時十分、猿留村に着したが、驛遞ではまた馬がない、且、あすも十一時頃でなければ用意出

來ないと云ふので、そこにとまるのは胸くそ惡くなり、僕等は勇を鼓して、もう一驛さきへ徒歩することにした。然し二里半だと聽いたのが、四里あつたには閉口した。一里ばかり海岸を行き、山道へ這入ると、日高十勝の國境になる。二人とも足は勞れて來るし、日暮れには近くなるし、度々小川を渡る毎に熊が出はしまいかと心配になつた。僕は樺太の山奥へ這入つた時、熊よけに汽船から借りて來た喇叭を吹いたが、その用意がないので、下手な調子で銅羅ごゑを張りあげ、清元やら、長唄やら、常盤津やら、新内やらのお浚ひをして歩いた。その銅羅聲に恐れてか、幸ひにおやぢの黑い影も白い影も現はれなかつた。

然し猿留の七曲りに似た九折道を登る時などは、聲も勞れ切り、足も勞れ切つたので、これを越えれば、もう、直ぐだらうといふのを力にして、漸く山の背まで達し、それから下り坂になつたが、非常に喉が渴き、からだは汗でびッしよりだ。然し道に澤山生えてゐる小萩が、葉毎に露を帶びてゐるのは、見るも持氣ちよかつた。それで思ひ出したのだが、僕等が國境を越える時鳥渡雨に會つたのが、こちらでは非常に降つたのだ。その名殘りに道もじぶ〳〵してゐるし、萩には露が置いてるのだが、その露を踏み分けて進むと、それが靴を越えて熱した足にひイやり浸み込むのが、コツプで冷水をがぶつくよりも甘い味がした。

直ぐだらうと思つた音調津がなか〳〵來ない。薄暗くなつては來るし、道路はまた水だらけだ。何でもかまはず、びしやり〳〵歩くと、畑などはあるが、人家は見えない。もう野宿なり、ぶッ倒れなりしようとまで疲勞した。あかりが一つ見えたが、直ぐ隱れてしまつた。僕等はまたその次ぎの驛へ進んでるのではないかと考へ出したが、そのうち漸く驛遞についた。そこであすの馬をあつらへ、四五丁さきの宿屋へ案内されるまでがまた一里も歩く樣に氣が急かれたが、宿についたのが五時四十分であつた。

この日の行程十三里餘。音調津は三十戸ばかりの村だ。黑鉛鑛山事務所があるのを認めたが、廣尾の人が小く經營してゐるのださうだ。

其十

▽十月九日。十勝國大樹、晴。

八時、音調津出發。一山越すと、難道はないが、道路がまだよく出來あがつてゐない。一昨日の雨から水が出て、人の歩くところが全く川の樣になつてゐる場所もあつた。

きのふは馬子のセカチに歌を歌はせたが、けふは、僕等は馬子を隨分冷かした。渠は、北海道がいいところだと聽いて、四五ケ月前親類の驛遞をたよつて來たのだが、故郷の二本松よりも面白くないと云ふので、僕等はまたからかひ半分に、どうせ逃げて來たのだらうから、驛遞の馬を二三頭盜んで

また逃げる方がいいではないかと云つてやつた。ぼんやりした青年で、まだ土地の案内がよく分らない。

廣尾に着くと、驛遞は留守だ。よそから來てゐる番人に聽くと、馬政官の一行に必要な馬を山へ取りに行つてるので、十一時頃でなければ歸るまいとのこと。近處で樣子を尋ねると、かみさんには出られ、娘は病氣の爲め札幌で入院、おやぢ獨り家の世話から馬追ひまでするのださうだ。とても話せないから、アイノの家に賴んで馬車馬を借りた。附き人になるものがゐないと云ふので、僕一人でぼツて行くことにした。して、種々世話をして呉れた岡崎氏と別れた。この村もアイノの雜種が多いさうだ。

これからは、海岸に近い原野だが、平坦な道路の左右に懈の木が植ゑつけたかの樣に生えてゐて、ところどころ、雜草を切り開いて、燕麥を刈り取つた跡があるのを過ぎながら、出會つた土人のメノコにここはどこだと聽くと、野塚原野と答へた。丸で大きな造り庭と云つてもいい。この繁茂した濶葉樹の間を驅ける時、ふと目を眠つて、その葉に當る風の音を聽くと、急雨がやつて來たのかと驚かれた。まして、目を開くと　遠くの山々には雨雲が迫つてゐて、今にも降つて來さうな暗影を僕の頭上に投げるのだ。僕は一種のおごそかな寂しみと戰慄とをおぼえた。

公立野塚尋常小學校には百十四名の生徒があつて、一里も二里もさきから通つて來るさうだ。この學校附近は耕地殆どなく、澁を目的に懈の皮を剝ぐのを仕事にしてゐる。雪は五尺ほど積むさうだ。

豐似川を渡ると、一物品販賣所の主人が店さきで木を挽いてゐた。そこに立ち寄つて話を聽くと、このあたり雪は三尺が關の山だが、懈の密接林であるから、地味はよくない。蕎麥、燕麥、大豆などは播けば出來ようが、上土が三寸ほど黑い岩土で、直ぐ火山灰が三四寸あり、そのまた下が黑土で、乾燥すれば、風にぱツぱと飛んでしまう。山ぎはに行くと多少地味はいいから、這入り込んでゐる農夫もあるさうだ。

そこで馬政官の一行に追ひつかれたので、馬に慣れない僕はその跡から行かうと思つたが、一行の進みが如何にも遲い。僕の馬はけふはまだぼツ立てないから弱つてゐない上、時間が早ければ以平まで行かうとしてゐるのに、大樹でとまる人々の跡をつけてゐたらやり切れまいから、僕は無言で一行を追ひ越すと、やがて『驅け足』と云ふ聲が聽えて、一行は僕を抜いて出た。僕も負けぬ氣で拾餘丁も一緒に驅けつた。すると、また一行の歩みが遲いので、今度は、僕、以平までけふ中に行きたいから、失敬すると挨拶して、一行を抜けてしまひ、渠等のおかげで初めておぼえた驅け足を二度も三度もして、三時半に大樹に着した。

然し換へ馬の都合がうまく行かないので、大樹にとまることにした。この邊も水の都合が悪いので、田地がない。ヒカタ川の上流には、砂金取りが大分這入つてゐるさうだ。ここまでは、商業上、

廣尾商人の勢力範圍になつてゐる。ゆふべからビールを飲みたかつたのが、漸く今夜の宿にあつた。一瓶三十錢だ。實は昨夜は勞疲の爲め、一昨夜は醉ひつぶれて、この雜記を書くのを忘つてゐたが、今夜は時間も早いし、ビールの氣嫌で三日分を書いたのだ。

この日の行程九里餘。

其十一

▽十月十日。十勝國帶廣、晴。

大樹附近では、けさ、初霜があつた。八時に出發したが、途中にはまだそれが消えないで、濃く殘つてゐた。凍死馬追悼標といふのが立つてゐる。四里半ばかりの間は人家が一軒もない。よく凍死者を出し、またおやぢがよく出沒するところださうだ。牧柵の朽ちかかつたのがつづいてるところが三四ケ所もあるが、すべて不成功に終つたものらしかつた。茅の中では、きり〳〵すがうら寂しく鳴いてゐたし、カケスが澤山飛びまわつてゐた。山葡萄が隨分ある。原野は全體に槲の密接林だ。その間を幅の廣い道路が開けてゐるが、日に二人か三人しか通らないのであるから、雜草がそこまで跋扈してゐて、僅かに細い一筋か二筋の路がついてるだけだ。或橋を渡る手前で馬が急に戰慄してあとずさりをするので、僕もぞつとしておやぢが出て來たのではないかと思つた。然しそれは異樣な木の切り株に恐れたので、ぼツ立てると、馬はそれを避けて一丁ばかり驅け出した。

以平に人家が一軒ある、それが驛遞だ。それから、三里半、また家が全くない槲と薄との高原だ。薄野を出でて槲林に入り、槲林を出でて薄野に入る、その單調子と云つたら、馬上で僕は半ば眠つてゐたのでも分らう。ただ道路が一直線に渡つてゐるので、獨り手に前進してゐるばかりだ。思ひはうつら〳〵と都の友人のことや、長くまた近く會はない愛婦の上に馳せてゐると、馬がつまづいたので、手綱を引き締めた。ふと見渡せば、僕は青、黃、または紅色で彩取つた大風景の中を進んでゐるのだ。種々な色の競進會中を通つてゐる。

晴れ渡つた天空の藍のもとに、馬上の人は黑く地に投影し、すすきのぼツとした穗が近く遠くかさなり合つて、うす綿を敷きつらねた樣な原野に、木々の枝葉は青に、淺黃に、黃に、赤に、また紅。山は遠く薄墨の遠近と高低とを以つてうねり行き、その後ろから幸震岳がかしらを現はし、眞ツ白に雪が積んでゐるのが見える。して、海上らしい方面には地平線と相つらなつて、灰色の雲が平かに日光に輝いてゐる。僕は暫く馬をとどめて名殘を惜んだが、馬（荒馬であつた）のいななきが如何にも山野の靈氣を呼び寄せる樣な氣がして、孤獨の停止に堪へなかつた。

行く手の槲林をのぞんで急ぐと、いつまで行つても、すすき野だ。して、目の前には遠く林が見える。いつそれに這入つて、いつそれを拔けるのか分らないほど、近よれば、まばらな樹立だ。幸震の

驛遞も一軒屋だ。寒暖計があつたので、それを見ると、華氏六十五度であつた。以平でも、幸震でも、朝は、もう、ストーブを燃いてゐる。そこから一里半ばかり來ると、郵便局などもあつて、人家や耕地を見ることが出來る。官吏らしい人で、紋附きの羽織を引つかけたのが、羽根をむしり取つた庭鳥を提げて行くのに出會つたが、僕は之を見てこんなところに出張する官吏などは、半ばごろ付きではないかと云ふ感じが起つた。あたりに樹木を切り開いて、その切り株や燒き株の殘つてる間を、農夫は實際の勞苦を盡して僅かに生産物をあげるのだが、官吏などはそこへふところ手で飛び込んで來て、事務のひまなままに、百姓の勞苦を喰ひつぶすのだ。

十勝は大小豆を以つて生命とするだけに、耕地には、さういふ物が澤山つくられてゐる。然しこの邊は、よく知られてゐるので、詳しく見る必要もないと思つたから、僕は馬を飛ばして、五里十餘丁の道を一時間半で來た。帶廣の河西館についたのは、午後二時半だ。この日の行程十三里半。

其十二

▽十月十一日。十勝國帶廣、雨。

昨夜、北海タイムス支社の鶴卷氏が尋ねて來た。或料理屋へ行つたら、藝者が僕を山本さんか、伊藤さんであらうと云つた。この二名は舊北鳴新報社の人々のことだらうが、兩氏の名がさうよく知られてゐるのを僕は私かに友人として祝したわけだ。

大原野を獨り旅の氣が張つてゐたのが、ここに着いてから急にゆるんだのか、からだ全體が强い樣で、痛い樣で、精神がぼうつとして、丸で氣力がなくなつた。烏渡酒を飲んで宿へ歸つたら、そのままぐツすり眠つてしまつたが、けふになつても、あたまがはツきりしない上、股に鞍ずれが出來て、座ゐるのに不自由だ。その箇所へおしろいをつけようと云つたが、女中は笑つてそれを持つて來なかつた。

帶廣町、外四ケ村の組合は、戶數二千三百六十一、口人一萬零二十三。河浦町外三ケ村よりは少し大きい。帶廣も、岩見澤と同樣、假小屋的な建築が多い。その發展は、礦山もなく、海もないから、單へに農作物に由るのだが、本年は稀れな雨天つづきで大小豆も出來がよくない。然し組合管內からあがる雜穀の豫定總額は十二萬五千俵、その價格約三十萬圓だ。もツと組織がつく樣なれば、亞麻・小麥粉、醬油、味噌等の製造によつて、景氣を添へる時が來るだらう。且、この町は隣村として、北見の國境に、晉更（やとさら）といふ一郡一村の大村を控へてゐる。割合に新らしい開墾地だが、戶數千零五十八、人口五千百十一あつて、本年も雜穀十七八萬俵を出すのだ。して、また、帶廣は小い町の割合に各新聞の競爭が激しいだけ、人間には活氣があるらしい。然しその市街には、切り殘した樹木が殆ど一本もないので、札幌區の或部分の樣な樹影の美觀がない。無考へに大切な木を切つてしまうのは、

新開地の弊害であるから、これからは、官民ともに多少の美的趣味を養つて、餘程注意するがよからう。

北海旭新聞支社の岡本氏並に釧路新聞支社の小田嶋氏が來て、鶴卷氏と僕と四人そろつて、午後雨を冒して、伏古の土人部落に行つた。同部落は戸數五十五、人口三百餘。二百數十町歩の給與地を持つてゐるが、土人は不精で山獵、出面取りなどばかりを爲し、農事に努めないので、僅かに强制的にそれを行はしてゐる。然し古川辰五郎といふアイノの如きは特別で、自分の受け持ち地を耕作する外に　なほ和人の未開地をも開いてゐる。安田巖城といふ人（福本日南氏の令弟）が、アイノ研究がら　獻身的な世話役だ。僕等は先づ同氏を音づれて案内者になつて貰つた。

ここの廳立土人學校は、十勝に三つあるうち最も古い一つで、それでも明治三十七年の設立だ。生徒は四十名あり、明年第一回の卒業生を出すのだ。他所の土人生徒と同樣、習字または圖畫の樣なものは成績がいいが、數學のあたまがないと同時に、綴りの中の濁音を正當に發音することが出來ない。作文などは可なり出來てゐる。校長の三野氏が注意深いので、生徒に學問と共に自營と貯蓄心とを起さす樣にしてゐる。して、先月の如きも、札幌まで修學旅行に出した。その費用はすべて生徒が前以つて用意した草刈り賃の積み立てで出來たのだ。

學校教育の結果か、または土人の特性か、どちらか分らないが、生徒の一人が非常に個人的な性格を顯はした例がある。渠はトクサを刈つて儲けた金でまんぢうを買つて歸ると、その母が少し呉れいとねだつた。すると、子供は、これは自分の儲けたもので買つて來たのだからやらないと云つて、皆自分で喰つてしまつた。親の無努力と無教育とに比べて、これは決して惡いことではない。然し、學校を中途で退いたものや、なまなかシヤモ殼になつてるものの狀態は、東京に於ける外國歸りの半可通と同樣、甚だ面白くないのだ。アイノはどうせ滅亡してしまうのだから、教育などはよしあしであらう。

さきに樺太ギリヤーク人種の使ふ船の紋があると云つたが、アイノのマキリやその他の物に附いてるのにも、同じ樣なのがあるのを發見した。して後者のは寶物入れ、乃ち、シントクについて日本から這入つて來たので、巴と笹輪藤とは殊に古くからあつた。然しそんなのはただ模樣としてのみ用ゐられてゐるので、アイノには別に渠等特有の單純な紋がある。それはイトツパと云つて、神に祭るヌサまたはイナウの棒に就くのだ。たとへば、十こんな十文字樣なイトツパの下に、〓〓かう云ふ數字の二をふたつ棒で連ねた樣なのが加はつたり、また人こんな曲り一文字の樣なのが添つたりしてゐる。その紋の劃がまた亭主と女房と違つてゐる。その畫の工合によつて何代目かの親類だといふことが分るので、それを見せ合はして、至るところに頼りを求めて行く。渠等はよその家でとまることを少しも苦にしない。生徒でさへ、通學しながら、十日も十五日も家に歸らないことがある。教師が如

何に外泊を禁じても、親からしてさうだから、なか〳〵その習慣は直らない。なかには、情事の爲に、野宿同樣にして數日も行衞の知れないことがある。男女間のことに至つては、昔は嚴格であつたが、今ではただ保護者に對する依賴心ばかりあつて、同人種間の制裁がない爲め、實にその風俗は壞亂してゐる。して、馬と女房を取り換へた事實もある。

曾て、僕の知人が、アイノに向つて、古い鐵砲をやるから熊の皮をよこせと云つたら、皮を持つて行けば銀の鐵砲が買へるだらうと答へた。これは昔のことだが、近頃でも、或人が土人の一人に寶丹を飲ますと、すつとしたのを不思議に思ひ、ニシパよ、これは奇體なくすりだ、鼻からも、口からも、風が這入つて來ると云つたさうだ。

其十三

▽十月十二日。帶廣、晴。

昨夜は岡本、小田原、『鶴卷三氏が僕の爲めに歡迎會を開いて呉れた。して、寺井、その他二三氏にも會つた。その席で追分を聽かされたが、僕は仙臺のさんさ時雨を聽くと、非常に心が愉快になるが、上手な追分を聽いてゐると、また、それと反對に、好きな女さへあれば、心中でもしたい氣になるのが常だ。どちらかと云へば、寧ろ後者の方をいつも聽いてゐたい。

まだ土人の話のつづきだが、或時、その一人が官林を切つて盜伐罪に問はれた。然し渠は平氣なもので、その云ひ草が面白い。今のお上の木を切つたのではない、今のお上の木ならいくら大きくても、さし渡し一尺ぐらゐにしかなつてゐない。自分の切つたのはもつと太いのだから、エンドカモイ（江戸の神）乃ち、德川樣の木だと。和人に接することが稀れな土人部落に行けば、今でもエンドカモイから命じられて來たと云へば、今のお上の官吏よりも丁寧に歡迎されるさうだ。

二六新聞に樺太通信を書いた時、僕はオロチョン人の奇妙な裁判の一例をあげて置いたが、アイノ人にも隨分面白いのがある。その一例を云つて見ると、熊といふ奴はその隱れ穴が定つてゐるのだが、甲村の土人が乙村の熊を追ふて、その穴に於いて打ちとめたのだ。すると、それが土人間で裁判にのぼつた。乃ち判事の酋長が熊の捕獲者に向ひ、先づ貴樣はシャモか、アイノかといふことを尋問した。シャモなら、この裁判は捕獲者の勝ちだが、その代り、以後はアイノとしてのつき合をしないと云ふのだ。

捕獲者はシャモでない、矢ツ張りアイノだと云ふことを誓言すると、つまり、土人の裁判法に從ふのであるから、酋長は喜んで下の如き宣告を與へた。熊はもと乙村の物であるが、甲村の人が捕獲したのだから、皮は乙村に返せ、然し肉は捕獲者が取れ。その代り、乙村は高價な皮を得たのであるから、祝ひとして酒一斗を甲村の人にふるまへと。實にこれはアイノの大岡裁判である。

伏古にはチョマトーといふ沼がある。この原語は忌むべき沼の意だ。古戰場で、十勝アイノと日高アイノとが大戰爭を爲し、敵を三百名この沼に投げ込んだ跡だ。それで祟りがあると云つて忌まれてゐるさうだが、或日、學校の教師がその水を泳いで見せて、決してそんな迷信のあるべからざることを示めした。然しアイノ地名を研究すると、種々な傳說や歷史が分るものだ。安田氏の如きも、それにはよく注意してゐるらしい。して、近頃の研究により、古事記の地名によく何々別とある、そのワケは土人語のイワキで、古い都もしくは果のところの意だといふことを發見したと語つてゐた。國名磐城もその一だ。

石狩岳と阿寒岳の傳說も面白い。この兩山はもと夫婦であつて、石狩岳が男で、マツネシリ、乃ち、阿寒岳が女だ。ところが、夫婦喧嘩をして、女山が釧路に逃げた。その時、男山は赫怒し、おほきな矛を投げて、女の耳を貫ぬいた。女山は耳を貫ぬかれたが、その矛を受けて投げ返すと、非常な速力で飛んで行つたので、當りさへすれば男山の生命を危くしたのに相違なかつたのだが、その急を救ふ爲め、ヌブカウシヌブリが拔けて出で、大速力の矛を受けとめた。このヌブリ、乃ち、神山の拔けて出た跡が今のシカリベツ（獨りで出來た沼）であるのだ。

其十四

▽十月十二日のつづき。

僕が安田氏を音づれて行つたのは、一つにはアイノの史詩もしくは戰詩なるシヤコロベやユーカリの歌ひ方を、氏の紹介によつて、アイノから聽かして貰ひたかつたのだが、歌へるものがなかつたのは殘念だ。伏古の土人は、割合に古くない。北見もしくは日高から移住して來てから、僅かに六代か七代にしかなつてないらしい。それから見ると、音更の方も同樣だが、まだしもユーカリやシヤコロベを歌へるものが二名あつた。然しその一名は老死し、また一名は行くへが知れなくなつてしまつた。網走線のポンベツに行けば、或は聽けるかも知れないとのことだ。僕は眞似だけでもいいからと云つて、近所のメノコを呼んで來て貰つたが、その女は歌の話は出來るけれど歌ふことは出來ないと答へた。

全體わが國人はアイノに關して間違つた考へを有してゐる。殊に直接關係がある北海道廳の方針が間違つてゐる。アイノも生き物であるから、土地を給し、生活の道を立てる樣にしてやるのは當り前だが、どうせ滅亡の運命を有する、而も殆んど滅亡に頻する、劣等人種ではないか？それを敎育したとて、何程の爲めになるのだ？たとへ一人前になる男女が少しばかりあつたにしろ、それの混血兒がシヤモの間に出來るのは餘り有難いことではない。僕の考へでは、生き物としては飼ひ殺しにするだけの保護を與へてやればいい。

その代りだ、その代り、昔は一度盛んであつたアイノ人種の殘すべきものを、なくならないうちに、保存してやることだ。殘すべきものとは、決して腐つた熊の皮や器物を云ふのではない。同人種が持つてゐる言語と文藝とである。希臘羅馬は亡んでも、その文藝は永久に殘つてゐる。アイノは、アイノとてしだけの永久に殘る文藝がある。それを研究もしくは保存する爲め、中央政府もしくは道廳は今日まで恐らく何等の費用も出したことがなからう。嘗て札幌師範學校の教師をしてユーカリやシヤコロベを取り調べさしたと云ふが、文學や音樂の素養がないものが行つて、文學や音樂の素養がないものに飜譯さして調べたとて、何程の價値があらう？ただうはツ面と概略とに過ぎない。

徒らに土人學校などを設けて、道廳が國費を空費するよりも、その金を以つて語學の才あり且文藝的思想のあるもの數名を撰んで、アイノ語を研究さし、アイノ文學を出來るだけ正確に原語のまま羅馬字または假名に書き現はすが急務だ。書き現はすにも、これまでに時々出た樣な現はし方、乃ち單語單語に句點を打ち、わが國の物語の樣な書き流しをするのでなく、外國詩の書き方の如く單語毎に一字あきにし、意味の切れるところに相當の句點を打ち、句調上の一行毎に行を改めるといふ樣な、はツきりした頭腦を以つてやつて貰ひたい。それさへあれば、その飜譯などはいつでも出來る。また その歌ひ方の如きは田中博士や北村氏の如き音樂通を賴んでくれれば、一度で樂譜に移してしまうことが出來る。これがアイノ人の滅亡に對する最も同情ある仕事だ。

東京大學や北海道廳には、コロボツクル論や非コロボツクル論の言ひ爭ひが出來る學者はあらう、然し眞にアイノ語を研究して、アイノ文學を傳へようとする特志家は、日本人にはまだ殆どない樣だ。空しく之を外國宣教師のバチエラー一人に委して置くのは、最も無同情の極であるのみならず、アイノ人の眞相をあやまる恐れがある。現にバチエラーの研究には誤まりが少くない。耶蘇教的偏見のあるのは、勿論渠は日本語の智識が多くないので、日本語のアイノ語に混入してゐるのを、純粹のアイノ語として取り扱つてゐることが多い。且渠の智識不充分な一例は僕が樺太アイノを視察して發見した。乃ち渠の說に據れば、梅毒と肺結核とはアイノ固有の遺傳病だと云ふのだが、實際は日本人中の劣等種族なる漁師、土方、鑛夫、軍人などから移されたのだ。その證據は、樺太通信で云つた通り、和人に接觸したことの少ない樺太土人には、そんな病氣が少いのだ。

宣教師などの偏見的研究を賴りとせず、わが國人の誠實にまた熱心にアイノ語を學んで、文學、音樂、人種學の諸方面から確實、研究に從事するものの出るのを、僕は眞心から希望するのである。

其十五

▽十月十三日。帶廣、晴。

音更村のアイノ部落を見に行つた。十勝川を渡ると直ぐ同村になる。同村全體はもと音更川の川底

であつたらしい。それは、鳥渡幅の廣い長原野の兩がはを、築きあげた樣な高臺がどこまでもさし挿んでゐるので分る。ところが、今春、大洪水があつて、そこらあたりの土地が十五六町歩流れたが、土人間にも天文學者見た樣な者があり、雲の工合によつてそれを豫言した。して、その言を信じて家具や畜類を高臺に運んだものはすべて難を免れたさうだ。

兩がはの高臺は樹木の紅葉を以てなか〳〵立派であつたから、僕はその景色に見とれてゐるうち、乘馬がそれて、横道に渡る小橋の眞ツぱなへ前足をかけたので、手綱を引くひまもなく、前へのめつたから堪らない、僕は馬の首を越えてずでんどう——幸ひ、見てゐる人もなく、また泥水もなかつたので、無事であつた。一里半ほど來ると、土人學校があるので、その高木教師に面會した。生徒は二十六七名で、成績は他と違ひがない。校内に湯殿があつて、毎週一回づつ生徒を入れるさうだ。また、教師は生徒の臭いにほひを去る爲めアイノ葱などを喰ふなと教へてゐるが家庭に於て親がそれを承知しないそうだ。

その向ふがはに土人開墾事務所があつて、中村要吉といふ土人があづかつてゐる。僕はその男を當てにして來たのだが、ゐなかつたのでまた半道ばかりさきにある、仁禮子爵の音幌農場を訪び、仁禮氏並にそこの主任高田氏にも會つた。そこに要吉もゐたので、晝飯の後、相伴つて、同人の事務所へ歸つて來た。同人は、帶廣町では何となくハイカラ土人視されて評判が悪いが、高田氏の證明によれば、從順で、忠實で、同族の爲めには、一身を賭して盡力してゐるさうだ。年齢はまだ三十前後だ。家では、妻子に日本語を以つて話し、馬も五六頭を有し、簞笥、茶簞笥、机、茶道具、ショールなどを持つてゐる。日本流の床の間には、肩から幅廣の綬の樣なものでかける刀を二振りと、シリカツプやスイコロゼブといふ魚骨を寶物として飾つてゐる。

同家のそばに、簡單な倉庫樣の物が一つ出來かかつてゐるのは、土人等がその生産物を飲みつぶしてしまはないやうに、來年の耕作時期の喰ひ物として、その生産したきび、稻きび、粟、唐もろこし等を預り貯へて置く爲めだ、また、渠の勸めに從ひ、土人等はもと犬を飼つてゐたのを（して、土人の仕込んだ犬は熊を恐れず、その後ろから行つて、熊が人に飛びかかるのをとめるが）、豚に換へて見たが餘り儲けがないので、近頃は庭鳥にしてゐる。僕があがつてゐるうちにも、雄のひよこを土人等から集めて、一匁目八文半の割で、帶廣町から來た鳥屋に賣つた。

音更土人は五十八戸、百二十名ばかりある。すべて相當の耕地を持つて割合によく農業に努めてゐる。僕が部落をゆふ方巡回した時も、まだ家々にはメノコの老人ばかりで男子並に若いメノコは畑で働いてゐた。ここでは毎年人口が增加するさうだが、而も雜種は一軒しかない。病氣の多い部落とは緣組みをしない樣にしてゐるから、死亡者並に病人が少い。親族結婚は止むを得ないとしても隣村の芽室土人の如く早婚はないさうだ。芽室で死人の多いのは、早婚の結果だが、また、一つには、イチ

ヤシカラといふ詛ひの上手なものが少くないからだと、要吉氏は云つてゐた。イチヤシカラによつてのろはれた者の妻子兄弟は、またその詛つたものをのろふと云ふ様に、次ぎから次ぎへ敵意が傳つて行く習慣があるさうだ。

要吉氏は農業に從事せず、他の商買をして、帶廣町にも必要上座敷を一間借りてゐるが、音更部落の酋長の様なものだ。多くの酋長じみたすれからしアイノは、一般土人の愚に乘じて、隨分不埒なことを働いた例があるので、信用なるものが薄らぎ、昔の様な酋長らしい位を持つことが出來るものは殆どない。從つて、渠もただ好意を以つて同族の爲めに盡すだけで、實際の制裁を加へる力はない。土人等は依賴心と怠慢とばかりが增長して、風俗は壞亂するばかりだ。たとへば、一つの訴訟的問題が起つても、もとは腕力に訴へる様なことはなく、ツアランケといふ立會裁判に出る。して、そこで訴者にも被訴者にも云ひたいだけ云はし、考へをめぐらさす間は、烟管を指さきでまわしなどしながら、神を呼び起す言葉を節附きで歌つてゐる。かうして、結着のつくまでは、一週間でも二週間でもつづけるのだ。そんなことは、今ではない。

渠も亦バチエラー氏のアイノ研究結果には不滿を懷いてるらしい。同氏がシヤモの言語とアイノ語とを混同してゐるなどは、土人を非常に侮辱したかの様に憤慨してゐた。シヤモと云ふ語も、實は、シシヤムと云ふのが本統ださうだ。

僕は畫間馬を返してしまつたので、夜になつて、要吉氏の競馬用の馬に渠と僕とが二人乘りで送られて來た。實は、僕、暗夜の泥道でもあるし、馬はまた扱ひ難いので、獨りで歸ることが出來なかつたのだ。

其十六

▽十月十三日のつづき。

音更部落には、シツンプ（日本名、淺山彌太郎）と云ふ百餘歲の老人がゐる。それがシヤコロベやユーカリを歌へると聽いたので、僕はわざ〳〵同部落へ行つたのであつたが、もう目は見えず、耳は聽えず、齒は、悉く落ちこぼれ、腰は立たない。それでも、先年巖谷江見諸氏の來た時はまだしも歌ふこと（して要吉氏がそれを通譯すること）が出來たさうだが、今回はもう酒も飲めないほど老衰して、とても起きて歌ふことを得なかつたのは殘念だ。

然し今夜お祝ひの家があると云ふので、その唄や踊りを見聞したい爲めに、夜までとどまつてゐたのだ。二三日前もお祝ひがあつて賑かであつたさうだが、それは十三年目に、この部落へ歸つて來て女房をもらつた祝ひだ。今夜のは、百日以上山へ出かせぎに行つてまたこの秋貂取りに出るまで、鳥渡歸つて來る人の爲めだが、それも本人がゆふ方までに歸つて來なかつたのでおじやんになつてしま

つた。殘念に殘念がかさなつたのは如何にも殘念だ。

アイノの詩謠中、シャコロベはその歌ひ方が最も位がある祖先史詩だが、ユーカリはそれを眞似た英雄詩だ。(兩者の梗概は、要吉氏の口譯したのを筆記したのが昨年の『殖民公報』に載つてゐる。)その他、ウチャシクマ（古い物語）と云ふ歌の附かない歴史談や、ツイダク（短話）と云ふ作爲的談話や、オイナ（擬音）と云ふ鳥獸の聲に擬して歌ふ述懷がある。日高の沙流や平取では、かういふのをよく習ふ土人があるが、專ら人々に分り易くしようとする爲め、歌ひ方でも、すべて古風な眞相を失つて行くさうだ。その他わが邦人の端唄や都々一の樣な、酒席で歌ふ短い歌が澤山ある、タプカラは劍舞の樣なもので、之を歌ふのは男の老人に限る。男が座わつてやるのにシノッチヤケがあり、女の立つて踊るのにウボボがあり、男女すべてが立つて踊るのにリミセがある。

ここに、安田巖城氏から得たのを、僕が土人中村要吉氏に訂正さした歌謠が二三ある。それを僕の云ふ書き現はし方に從つて、筆記且飜譯して見よう。アイノの古謠、虫のくどき話に左の樣なのがある。

アルクラン　モコラン　アクス、(一晩　寢たさうしたら、)
パイカラ　アン。(春が　來た。)

また、左の如きがある。

イデッキ（決して）
ウプウイナヤーン。(鮭の白子を取るな。)
ウバイコロ　ホン　アラカベ。(それを喰べたら　腹　痛くなる。)

子守唄で、左の如きがある。

ホッコーコーク、(鳥「鳶」が舞ひあがる、
ネイタロツクン　チカプ、(おりたらどこにさまるやら、鳥、)
ホッコーコーク、(鳥が舞ひあがる、)
カリコロカヤ。(あすこにくる〳〵舞ふ。)

また、わが國の祝詞式な物で、酋長が、神に申しあげる言葉に、最も莊嚴なのがある

クロコ　アベウチ、(わが家の　火神さま、)
ソイアアン　カモイ、(そとにゐます　神達、)
ツラノーウコサン　ニヨーヤ、(共に　相謀りまして、)
クロコ　イノンイタツキ（わが　祈りに）
メプヅスクリー、(深き幸ひを、)
サンレツカバクノー（わが子孫の子孫まで）

紀行と印象

シプリークニ、(傳はる樣に、)
カラアエンゴレー。(作り給はんことを。)

さきに僕は立會裁判ツアランケで歌ひつづけることがあると云つたが、その歌のうちに入れることが出來るのを一つあげて見よう。一說には、これは廣尾の驛遞を土人が昔つとめてゐた、その職務を歌つたもので、十勝アイノ特有のヤイシヤマネーナ、流行歌だとも云ふ。

トノ　オルシペクス、(殿の　命に由つて、)
クロマトーダ　(暗い夜を)
パエカエアンナ、(われ獨り行くのだ、)
スツパ　テレケ。(急いで　行け。)

これは馬に物を云つてるわけだが、若しそれに

キムン　カモイ　オカイナー、
サラタンネ、エーホイ　キシキシ

と加へれば、『熊の神が出るから、サラタンネ(馬の名)よ、ハイ〳〵ハイ〳〵』となるのだ。

アイノは日高、十勝、北見といふ樣に國を異にするに從つて、その歷史、言語、歌謠をも多少異にしてゐるが、その傳說に於ても、目立つて違ふのがある、日高でオキクルミと云ひ、十勝でオキギリマと云ふ英傑をわが義經だといふが如きはわが、國人がアイノ人を强制壓迫する爲め、兩部神道的に說明した手段に過ぎないので、多少の智識を有する土人は之を信ずることをしないが、日高アイノが之を同種族の歷史的最大人物とするに反して、十勝アイノはシヤマイクルと云ふ最大人傑の使用人に過ぎない樣に唱へてゐる。このシヤマイクル、オキギリマ、その他の英雄物語も、忘れられないうちに、アイノから直接に聽いて置く必要があらう。

其十七

▽十月十四日。石狩國旭川。曇。

中村要吉氏を伴ひ、釧路に行き、その國の土人部落をも詳しく視察するつもりであつたが、『歸れ』といふ電報が來たので、正午の汽車で帶廣を出發した。乘車するまでは大急雨であつた。車中で、變な物が洋服のうは着の腕を這つてゐたから、樺太の山林中で度々取つ付かれた樣なダニではないかと思つて、たま〳〵乘り合はせた實業之北海社々員に見せると、それがしらみだと云ふことに歸着した。多分、アイノ部落の薄中かアイノ小屋で貰つて來たのだらう。

途中の地層を見るに、音更村の一部と同樣、地下五六寸で火山灰が一寸ばかり通つてゐるところがある。ヘケレベツ(土人語、淸い水)といふ驛を通つて、新得からのぼりになり、汽關車が前後につ

いた。このあたり、ナラ、カシハが多く、その葉が赤くまた黄ばんでゐる間をたまに、榛の木の葉の黒青のいがまじつてゐる。見渡せば、右も左も黄葉紅葉の賑ひで、その中に、蝦夷松または椴松の霜氣にめげない青葉の姿が、枝をかさねて、ここかしこ、段々にとがり立つてゐる。

この好景の大谿谷を僕等の汽車は、大小六曲りも七曲りもして、雪よけトンネルをくぐりながらのぼつて行くのだ。この時、雨は晴れてゐた。窓から首を出すと、僕等の列車がうはばみの如くうねつてのぼる、そのうねりの跡が幾重にも折れて見え、ただそれが渦道になつてゐないだけは違ふが、丁度ロツキイ山中の谿谷鐵道の寫眞の様だ、わが國第一の大工事と云ふのは、まことに嘘ではない。北海鐵道開通式の時、某機關手が自己の腕を見せる爲め、その急坂で列車をとめたが、東京の新聞記者等もそれに氣がつかず、ずツとあとになつて説明を受け、初めて感嘆したさうだ。

七曲りも曲つて、第一の實際トンネルを抜けると、十勝原野の秋色は、遠く僕の視線と直角なる薄墨の低山の一直線に限られ、近い野山はゆふ空と共にほの赤くかすんで見える。丸で大パノラマの様な幻影で實に雄大の景色だ。この時またおぼ吹き降りがあつたが第二のトンネルを通り抜けると、もう、石狩の國内で、汽車は細いナラ、カシハ、ハンの木、松や清い小流の間をそろ〳〵くだり出すのである。

夜になつてからは、また雨が降つた。昨夜は午前三時まで原稿を書き、けさは七時頃に起きた上、車にゆられて來たので、旭川に着した時は、からだが隨分つかれてゐた。帶廣から北海旭の野口雨情氏に電報を打つて置いたので、停車場まで迎へに來て呉れてゐたが、實は、まだ顔と顔とを合はしたことがないので、お互ひに分らなかつた。して、宿屋へ行つてから初めて初對面の挨拶をした。氏は明日出發、東京に向ふ豫定だ。氏はこの六月頃無實の罪に落されかけて、豫審獄にまでぶち込まれたのは酒を飲んだ爲めだといふのに感じ、全くこの頃は禁酒してゐる。

旭川は北海道でも寒いところだと聽いてゐたが、實際、この旅行中初めておぼえる夜氣だ。今夜ばかりかは知らないが、風も强い。原稿を書きながら、そとを通るゆで出しうどんの聲を聽くと、東京の十一月を半ば過ぎた様だ。からころ云ふ足駄の齒音に、もう、冬の氷がくツついてゐはしないかとさへ思はれた。

其十八

▽十月十五日。石狩國神居古潭（かむゐこたん）、雨。

きのふからの寒さは、旭川でも急に來たのださうだ。旭川町は戸數七千、人口三萬五六千。師團を入れると、それに三千戸もふえるだらう。市街の體裁を見ても、可なり整つて來てゐる。然し帶廣町とは違つて、殊に淫風が盛んなところだ。軍人が多いせいであらう。横濱の女を見るとすべてラシヤ

メンじみてゐるが、旭川ではそれがすべて淫賣臭い。

旭川町の周圍には、高臺があつて、師範裏のは新高臺と稱せられ、神谷釀造場そばのは離宮豫定地だ。いづれも今は紅葉の盛りである。僕は馬車鐵道によつて近文に行き、そこの舊土人地を見た。こは、東京の某富豪が本道の前長官と相謀り、土人等をたばかつて立ちのかしめ、師團に高く賣りつけようとして失敗したところだ。地味も、他の土人部落と違ひ、よく農業に適してゐる。その戸數四十五、人口は大抵四人平均だ。指定の開墾殘餘地を和人に貸與し、それからあがる借地料を以つて、道廳は日本流の家をすべてに建ててやつたが、住み難い爲めだらう、渠等は冬になると、その結構な家を物置き同樣につかつて、却つて、別なところに半ば穴小屋の樣なものを造つて住むのだ。まだ、元の穴居の跡らしいのが澤山殘つてゐる。

その近處に上川第三尋常小學校があつて、生徒六百五十名のうち、二十五名はアイノの子供だ。渠等が目で見て眞似られる科目はよく、說明の必要が多い讀書、算術などに不成績なのは、必らずしも持ち前ではなく、一つには、日本語の力が足りないから無理もないのだらう。その小學校の校長なる人に門前で會つたが。風を引いて欠勤してゐながら、學校へ遊びに來てゐたのだ。

旭新聞記者森屋王爵氏の紹介に由り、神谷酒造合資會社旭川釀造場に行くと、その計算係主任脇田氏が場內をすべて案內して呉れた。獨逸製酒精機を備へて、四時間に三石のアルコールが取れるさうだ。アルコール釀造所は、砲兵工廠で火藥用に製造してゐるのを除いては、本道のみならず、わが國に於て、他にまだ出來てゐない。明治三十三年、十萬圓の資本を以つてやり出したのが、經營並に釀造法不熟の爲め、一たび解散の非運に會つた。それを神谷氏が三十六年から引き受け、釀造法をも研究して、從前よりも倍額の分量を一定の原料から取ることが出來る樣になつた上、日露戰爭並に海關稅法一リトル七十五錢の海關稅施行の爲めに、會社の發達が好都合に行つたらしい。

同社は、今、實際の資本金三十萬圓、一ケ年の釀造高六千石、賣上高八十萬圓ほどださうだ。一石に付き九十四圓の稅がかかり、百三十五圓に賣つてゐる。原料は殆ど全く唐きびだが、馬鈴薯の時期一ケ月だけはそれを以つてする。唐きびのはキスキイに最もよくなるが、馬鈴薯のは飲料には餘りよくないらしい。いづれにせよ、用途は火藥、セルロイド、摸造皮などの工業に求める方が廣いのである。また、釀造糟を以つて牧畜部を補助し、豚八百頭ばかりを飼つてゐる。高峯氏のヂヤスターゼは糠から取るが、ここでは燕麥や小麥からだ。この釀造所は第一で、その第二は、本社と共に東京にあり、おもにみりん、燒酎、シヤンパンなどを造つてゐるさうだ。僕はフーゼリンを全く拔き取つたキスキイを飲ませられて歸つた。

雨が降つてゐたが、五時前に神居古潭に着し、停車場から釣り橋を渡つて十丁ほどある溫泉宿に足をとどめた。この夜、遲くまで筆を執つてゐたが、炭火が消えたので、二階から手をたたいた。然し

一向返事がないので、下へ降りて、たつた一ケ所あかりのついた、家族の居間らしい室へ行き、『火を持つて來て下さい』と命じて、何の氣なく鳥渡障子の破れからのぞくと、男と女とが一緒に寢てゐたが、その男の方が『へい、かしこまりました』と答へた。然し、つひに持つた來て吳れなかつたので、翌朝になつて女中に糺して見ると、『あれは家族のものでは御座いません、御客さんです』とのことであつた。(神居古潭の風景は次回に說明する。)

其十九

▽十月十六日。札幌・雨。

伊納停車場からこちらへ、山と山とが迫つて來て、石狩川がその間を流れてゐる。その一方の岸に添ふて汽車が走るのであるが、この邊槲はなく、ナラ林が四方に紅葉してゐるのだ。川は狹く深く流れて、その重くるしさうな水にくれなるを浸すところもあるかと思へば、多少の傾斜を見せて、幾筋も長い龍紋をゑがくところもある。道を塞ぐ岩石の上にあふれて、白糸の瀧を流す樣なところもあれば、また、そびえる巖をめぐつて、飛ぶが如く行くところもある。また、川幅が廣がつて水中に砂利の洲を現ずるところもあれば、その洲がデルタ型に高まつて、そこにも紅葉樹が生えてゐるところもある。して、川が大きくまわつて、萬面紅葉の丸山をいだくところなど赤い間に、ところどころ、黑ずんだ椴松二三本の異を點じ、流れはふつ〳〵と白く泡立つてゐる。雄大な景ではないが、實にいいながめだ。

溫泉宿を向ふ岸に見て十丁ほど來ると、神居古潭の停車場だが、それからは高い絕壁の上に鐵道が通つてゐる。絕壁の下をのぞくと、石狩川の水勢と精神とが淸い油となつてうどみかけるかの如く、大きな潭を成して幾重にも渦を卷いてゐる。このところ深さを量り得たものがないと云ふ。つまり、おもりで糸を垂れて見ても、底には岩石がでこぼこつツ立つてゐるので、六尺でとまるところもあれば、また百尺もさがるところがあるのだ。その上を通つて、汽車が短いトンネルを拔けると眼は潭を渡つて、ずつと上流を見通すことが出來る。伊納から古潭の下に流れ至る七八哩の間が、兎に角絕景だ。

この潭の脇に、足場高く有名な釣り橋がかかつてゐる。兩岸の岩に結んだ針がねに釣られてゐるのだ。然し針がねと云つても、電線の八番線が橋の上部に十六本、下方に十二本、都合二十八本通つてゐるのだから『五名以上同時に渡るべからず』と書いてはあるが、枕木を何本も脊負つた人夫が四五名一緒に渡つても大丈夫ださうだ。然しまた、僕が獨りでも、空中にぐらつくのだから氣持ちのいいものではない。ところが、それを渡つて後ろを振り向くと、景色が一變した樣で——汽車道の山腹・絕壁のナラ林。谷底に渦卷く深淵を隔てて、前方もくれなゐ、後方もくれなゐ。孤立の僕は、雨中に

も拘はらず、恰も姿の見えないゆふ日に照らされてゐる樣であつた。して川ぶちに立つてゐるアカダモ（楡）の高木は二本とも仰いで見なければならないほどだ。

溫泉宿は生憎、割の惡いところにあつて、家の前後はいい風景を支配してゐるとは云へないが、前面の流水は兩岸の岩にぶつかつて白い布を見える限り流してゐる。昨夜、室內にともつて、近く雨の音を聽き、遠く川の流れに耳をそば立てると、今のさき見て通つた兩岸の紅葉が、あたら惜しくも、谷の下へ下へと流れ去る樣な氣がした。して、今朝目が覺めて見ると、流れはきのふの淸さに打つてかはつて、丸で濁つてゐた。

この邊、雪は五六尺つもる。アイノは明治三十八九年頃まで二家族ゐたさうだが、今はゐなくなつて、農家四十戸の部落があり、また石灰石採掘所並びにオミンタロナイの砂金採取所がある。停車場へ歸つて來た時、雨中でもあつた爲めだらう、乘客は、僕のほかに、納內へ徒足で買ひ物に行くと云ふ農夫の妻一人であつた。納內から深川まで行く汽車の兩がははすべて立派な水田だ。僕は鳥渡砂川で下車したが、別に云ふべきことはない。ただ、停車場前に、楢の大木で二かかへ以上もあらうと思はれるのが孤立してゐる、それが目についた。

この雜記を終るに當り、種々世話になつたタイムス社並に田口源太郎氏に對し、僕は感謝して置く。

アイノの話

樺太及び北海道に半歲を放浪してゐる間に、僕は大分アイノのことを研究したつもりだ。樺太に於ては、渠等の生活狀態をその各部落に就て視察し、或時はまた醫學者と共にその衞生狀態を巡視したこともある。北海道に於ては、おもに十勝の伏古、音更兩村のを調査した。樺太アイノは、北海道アイノの如く獰猛の相がないと同時に、また肺結核や梅毒のしるしが殆ど發見されない。その他のことに就ては、僕は今主として北海道アイノのことを話すのである。

全體、わが國人はアイノに關して間違つた考へを有してゐる。殊に直接關係がある北海道廳の方針が間違つてゐる。アイノも生き物であるから、土地を給し、生活の道を立てる樣にしてやるのは當前のことだが、どうせ渠等は滅亡の運命を有する、而も殆ど滅亡に瀕する、劣等人種ではないか？それをわざ〳〵土人學校などを設けて、敎育したとて、何程の爲めになるのだ？徒らに、東京に於ける米國歸りのハイカラの如く、齒の浮く樣なシャモカラが出來るばかりだ。たとへ一人前になる男女が少しばかりあつたにしろ、それの混血兒がシャモの間に出來るのは餘り有難いことではない。僕の考へでは、生き物としては飼ひ殺しにするだけの保護を與へれば好い。

その代り、昔は一度盛んであつたアイノ人種の殘して行くべきものを、なくならないうちに、保存

してやることだ。殘すべきものとは、決して腐つた熊の皮や器物を云ふのではない。同人種が持つてゐる言語と文藝とである。希臘羅馬は亡んでも、その文藝は永久に殘つてゐる。アイノは、アイノとしてだけの永久に殘る文藝がある。それを研究もしくは保存する爲め、中央政府並に道廳は、今日まで恐らく何等の費用も出したことがなからう。曾て地方學校の教師をして、道廳は、アイノの古史詩とも云ふべきユーカリやシャコロベを取り調べさしたと云ふが、文學や音樂の素養がないものが行つて、文學や音樂の素養がないものに飜譯さして調べたとて、何程の價値があらう？ただ上ツつらと概略とを得るに過ぎない。

徒らに土人學校などを設けて、道廳が國費を空費するよりも、その金を以つて語學の才あり且文藝的思想のあるもの數名を撰んで、アイノ語を研究さし、アイノ文學を出來るだけ正確に、原語のまま、羅馬字もしくは假名に書き現はすが急務だ。書き現はすにも、これまでに時々出た樣な現はし方、乃ち、單語々々に句點を打ち、わが國の物語の樣な書き流しをするのでなく、外國詩の書き方の如く單語毎に一字明きにし、意味の切れるところに相當の句點を打ち、句調上の一行毎に行を改めるといふ樣な、はツきりした頭腦を以つてやつて貰ひたい。それさへあれば、その飜譯の如きはいつでも出來る。またその歌ひ方の如きは、田中博士や北村氏の如き音樂通を賴んでくれば、一度で樂譜に移してしまうことが出來る。これがアイノ人の滅亡に對する最も同情ある仕事である。

東北大學や北海道廳には、コロボツクル論や非コロボツクル論の言ひ爭ひが出來る學者はあらう、然し堅穴がどうの、シャシがどうのといふ樣な、單純な研究は、如何に人類學には貢獻するところがあるとしても、アイノ全體の上には何程も價値がない。眞にアイノ語を研究して、アイノ文學を傳へようとする特志家は、日本人にはまだ殆どない樣だ。空しく之を外國宣教師のバチェラー一人に委して置くのは、最も無同情の極であるのみならず、アイノ人種の眞相を傳へあやまる恐れがある。現にバチェラーの研究には、誤りが少くない。耶蘇教的偏見のあるのは勿論、渠は日本語の智識に乏しい爲め、日本語のアイノ語に混入してゐるのを、純粹のアイノ語として取り扱つてゐることが多いので、多少考へあるアイノ人等のうちには、バチェラーの研究を以つて、同人種を侮辱するとまで憤慨するものがある。渠の智識が不充分な一例は、僕が樺太アイノを視察して發見した。乃ち、渠の說に據れば、梅毒と肺結核とはアイノ固有の遺傳病だと速斷したが、實際は日本人中の劣等種族、たとへば、漁師、土方、鑛夫、軍人などから移されたのだ。その證據は、二六新聞に出した僕の『樺太通信』で云つた通り、和人に接觸したことの少い樺太アイノには、そんな病氣が殆どない。宣教師などの偏見的研究を賴りとせず、わが國人の誠實にまた熱心にアイノ語を學んで、文學、音樂、人種學の諸方面から、確實なる研究に從事するものの出るのを、僕は眞心から希望するのである。

これから、僕は放浪中に得た智識を雜感的に述べて見よう。或土人學校に於て、教育の結果か、ま

たは土人の特性からか、どちらか分らないが、生徒の一人が非常に個人的な性格を顯はした例がある。渠は身づからトクサを刈つて儲けた金でまんぢう買つて歸ると、その母が少し呉れろとねだつた。すると、子は、これは自分の儲けたもので買つて來たのだからやらないと云つて、皆自分で喰つてしまつた。親の無努力と無教育とに比べて、これは決して悪いことではない。然し學校を中途で退いたものや、なまなかシャモカラになつてゐるものの狀態は餘り面白くないのだ。

露領樺太のギリヤーク人部落を視察した時、僕はその使用する船に注意した。形は磯舟に似てゐるが、左右が前後に迫つて、而もへさきが殊にぴんと反つてゐるのが如何にも氣持ちよかつた。して、そのへさきの左右に、必らず定紋として、線の細い巴形が付いてゐたり、または寶珠の玉でその尻尾が上下左右に出た樣なのが付いてゐたりするのを不思議に思つた。ところが、アイノ人の——同じ型の船には付かないが——マキリやその他の物にも、同じ樣なのが付いてゐるのを發見した。然しアイノのはシントク、乃ち、寶物入れについて日本から這入つて來たことが確かに分つてゐる。巴と笹輪藤とは殊に古くからあつたのだ。然しそんなのはただ模樣としてのみ用ゐられてゐるのであつて、アイノ人には、別に渠等特有の單純な家紋がある。

それはイトツパと云つて、神に祭るヌサまたはイナウの棒に就くのだ。たとへば、十こんな十文字樣なイトツパの下に、〓〓かういふ、數字の二ふたつを棒で連ねた樣なのが加はつたり、また人こんな曲り一文字の樣なのが添つたりしてゐる。その紋の劃がまた亭主と女房と違つてゐる。その劃の違ひによつて、何代目かの親類だといふことが分るので、それを見せ合はして、至るところに賴りを求めて行く。渠等はよその家でとまるのを少しも苦にしない。生徒でさへ、通學しながら、十日も十五日も自分の家に歸らないことがある。教師が如何に外泊を禁じても、親からしてさうだから、なかなかその習慣は直らない。なかには、情事の爲めに、野宿同樣にして數日も行くゑ不明なことがある。男女間のことに至つては、昔は嚴格であつたが、今ではただ保護者（乃ち、政府）に對する依賴心ばかりあつて、同人種間の制裁がない爲め、その風俗は實に壞亂してゐる。して、馬と女房とを取り換へた事實もある。

昔は、アイノの酋長なるものは非常に威力と信用のあつたものだが、今では、それに類する位にあるものが、すれからしになり、一般土人の愚に乘じて、隨分不埒なことを働いた例が少くないので、信用なるものが薄らぎ、たとへ酋長としての資格はあつても、昔の樣な威嚴を保つことは出來ないから、實際の制裁を加へる力がない。土人等は依賴心と怠慢とばかり增長して、同族間の風儀は亂れるばかりだ。たとへば、一つの訴訟的問題が起るとして、もとは腕力に訴へる樣なことはなく、ツアランケといふ立會裁判に出る。そこでは、訴者にも被訴者にも云ひたいだけ云はし、言葉が盡きてなほ考へをぐめらさす間は、烟管を指さきでまわしなどしながら、神を呼び起す言葉を節付きで歌はす。

歌つては語り、語つてはまた歌ひ、かうして、結着のつくまでは、一週間でも二週間でもつづける。して、酋長やその他の立ち會ひ人も亦同じ樣にその場に臨んでゐるのだ。今では、そんなしほらしいことがない。

曾て僕の知人がアイノに向つて、古い鐵砲をやるから熊の皮をよこせと云つたら、皮を持つて行けば銀の鐵砲が買へるだらうと答へた。それは昔のことだが、近頃でも、或人が土人の一人に寶丹を飲ますと、すつとしたのを不思議に思ひ、ニシパよ、これは奇體な藥だ、鼻からも、口からも、風が這入つて來ると云つたさうだ。そんな單純な土人のことだから、官林を切つて盜伐罪に問はれた時、平氣なもので、その云ひ草が面白い。今のお上の木を切つたのではない。今のお上の木なら、いくら大きくても、さし渡し一尺ぐらゐにしかなつてゐない。自分の切つたのはもツと太いのだから、エンドカモイ（江戸の神）、乃ち、德川樣の木だと。

『樺太通信』には、オロチョン人の奇妙な裁判の一例をあげて置いたが、アイノ人にも隨分面白いのがある。その一例を云つて見ると、熊といふ奴はその隱れ穴が定つてゐるのだが、甲村の土人が乙村の熊を追ふて、その穴に於て打ちとめたのだ。それが土人間で裁判にのぼつた。乃ち、判事の酋長が熊の捕獲者に向ひ、先づ貴樣はシヤモか、アイノかといふことを尋問した。シヤモなら、この裁判は捕獲者の勝ちだが、その代り、以後はアイノとしてのつき合ひをしないと云ふのだ。捕獲者はシヤモでない、矢張りアイノだと誓言すると、つまり、土人の裁判法に從ふのであるから、酋長は喜んで下の如き宣告を與へた。熊はもと乙村の物であるが、甲村の人が捕獲したのだから、皮は乙村に返せ、然し肉は捕獲者が取れ。その代り、乙村、は高價な皮を得たのだから、祝ひとして酒一斗を甲村の人にふるまへと。實に、これはアイノの大岡裁判である。

伏古部落では、福本日南氏の令弟が田巖城といふ人が酋長然たる資格を以つて、土人の世話を燒いてゐるし、音更部落では、中村要吉といふ可なり開けた土人がすべての世話をしてゐる。後者の部落は、病氣の多い部落と緣組みをしない樣にしてゐるから、死亡者並に病人がすくない。親族結婚は、少數人種として止むを得ないとしても、隣村の芽室土人の如く早婚はないさうだ。芽室では、死人が多い。それは早婚の結果でもあらうが、また一つには、イチャシカラといふ詛ひの上手なものがすくなくないからであると云はれる。イチャシカラによつて詛はれたものの妻子兄弟は、またその詛つたものゝ詛ふと云ふ樣に、次ぎから次ぎへ敵意が傳つて行く習慣があるさうだ。

伏古には、チョマトーといふ沼がある。この語は忌むべき沼の意だ。古戰場で、十勝アイノと日高アイノとが大戰爭を爲し、敵を三百名この沼に投げ込んだ跡だ。それが爲め祟りがあると云つて忌まれてゐるのだが、或日、學校の敎師がその水を泳いで見せて、決してそんな迷信のあるべからざることを示めした。然しアイノ地名を研究すると、種々な傳說や歷史が分るものだ。安田氏の如きも、そ

れにはよく注意してゐるらしい。して近頃の研究により、古事記の地名によく何々別とある、そのわけといふことは土人語のイワキ、乃ち、古い都もしくは果のところの意だといふことを發見したと語つてゐた。國名磐城もその一だ。

樺太には、アイノの戸數約二百、人口一千二三百。北海道には、その人口一萬七八千。そのうち、日高の六千ばかりが、國別としては、最も多いのである。一たびはわが本洲の殆ど三分の二までも占領して、大猛威を振つた人種が、今ではこのみじめな狀態にあるのを見ては、全く隔世の感なきを得ないのだ。渠等は、男女に拘らず、いづれも骨格がいい。然し骨格はいいままに、精神的にも、肉體的にも、墮落して行く。優等人種に對し非常なねたみを持ち來ると同時に、また非常に弱い依賴心を生ずるのは、劣等人種の常であるらしい。これがアイノを精神的に滅亡さす心理狀態である。して、また一方にはその生活上に於て、血族結婚、室内並に周圍の不潔、營養不充分、過度の飲酒などが源因となつて、渠等の本來强健な身體を虛弱に落して行くのだ。

僕が樺太に於て、船山醫學士と共に、タランドマリやクメコマイなどの土人部落に就き、アイノ人の健康試驗をして見た時、トラホームに罹つてゐないものはないくらゐであつた。それは光線の不足と爐邊の焚き火との爲めに止むを得ないのだらう。次ぎに、ヒゼンが多かつた。そのまた次ぎに、佝僂病が目に立つた。この佝僂病に限つて、ただ普通のセムシになつてゐるばかりでなく、横ツ腹もしくは腰の當りに穴が出來て、そこから膿が出てゐるのだ。肺結核や梅毒は極少かつた。然し、アイノ婦人は優等人種なるシャモに愛せられるのを非常に名譽とする。して、その所謂名譽に接する機會は、樺太アイノよりも北海道アイノに多い。して、梅毒並に肺結核の有無と多少とは、之と正比例になつてゐるのだ。

海馬の胃ぶくろと、ふのを樺太で見たが、一斗以上の流動物を盛ることが出來るほど大きいものだ。同島では、大抵のアイノ小屋には、それが一つ又は二つうつばりから釣りさげられてゐる。して、その中には海馬の油を入れてある。アイノ人はどんな食物にもこの油をかけて喰ふのだが、それが衞生上に餘りよくないさうだ。渠等の食物には、さく（アイノ語、はら）と云つて、野原に澤山あぢさゐの樣な花を開く植物や、にを（學名、えぞにふ）の一種あまにをなどがあり。また百合の根を搗いて喰ふので、絲に通して澤山爐の上に乾してある。海岸並に河邊の小屋なら、また、鮭もしくは鱒を切り開き、その赤い身を爐の上または晴天の野外に乾してある。

醫者の與へる藥を病人に飲まさないで、大抵はうはうるし、黃蓮、きとびる（俗名、アイノねぎ）などの葉や根を煎じて飲ます。して、出來物には、鼠の皮を剝いで張りつけるのだ。アイノの習慣として肩が凝ると、胸に水をつけ、指さきでそこをやたらにつねるのだ。すると、そこに血が寄つて來るので、肩の痛みを散らしてしまうことになる。男女の胸に血のにじんだその跡があるのが多い。ま

た、胸の代りに、肩をマキリで薄く切りさいなむこともあるので、その跡が縱横に入れ墨の如く見えるものがある。

また、アイノには數の念が殆どない。從つて、年代の數へ方も單純なもので、親の時、そのまた親の時、親の親のそのまた親の時といふ樣に同種族の口碑をつたへて行くのだ。同時代のものでも、自分よりさきに生れたとか、自分よりも後で生れたとか云つて、大體の年齡を示めし得るだけで、渠等の間には、青年男女を除いては、自分の年を確かに知つてるものがない。一老人の如きは、年を問はれて、自分は知らないが、お役所の帳面についてるだらうと云つてゐた。雪が降つて、その雪が消えて、また降つて、また消えてといふのが、渠等の過去の追想に對する態度である。

さきに鳥渡出した中村要吉といふアイノは、音更村に於て、土人開墾事務所をあづかつてゐる。音更村全體は、もと音更川の川底であつたらしい、幅の廣い長原野であつて、その兩がはを、築きあげた樣な高臺がどこまでもさし挿んでゐて、その高臺は、秋になると、立派な紅葉を以て飾られる。四十二年の春、そこに大洪水があつて、そこらあたりの土地が十五六町歩も流れたが、土人間にも昔の天文學者見た樣なものがあつて、雲の工合によつてその洪水を豫言した。して、その言を信じて、家具や畜類を高臺に運びあげたものは、すべて難を免れた。

要吉は農業には從事せず、馬を飼ひ、小料理店を開かせたり、その他の商買をしてゐるので、帶廣町にも必要上驛遞宿の一間を借りてゐる。町ではハイカラ土人、生意氣なアイノとして厭がられてゐるが、仁禮子爵の農場（音更村の北端にある）などでは、評判がよく、從順で、忠實で、同族の爲めには一身を賭して盡力してゐると云はれてゐる。年齡もまだ三十前後だ。家では、妻子にも日本語を以て話し、馬も五六頭を有し、簞笥、茶簞笥、机、テーブル、茶道具、ショールなどを持つてゐる。日本流の床の間には、肩から幅廣の綬の樣なものでかける刀を二振りと、シリカツプやスイコロゼブといふ魚骨を寶物として飾つてある。

同家のそばに、簡單な倉庫樣の物が一つ出來かかつてゐるのを見たが、土人等がその生產物を飲みつぶしてしまはない樣に、翌年の耕作期の豫備食糧として、その年生產したきび、稻きび、粟、唐もろこし等を預り貯へて置く倉であつた。また、渠は土人等に勸めて、もと犬を飼つてゐたのを（して、土人の仕込んだ犬は熊を恐れず、熊が人に害をしようとするのを、その後から飛びかかつて、とめるが、）豚に更へて見たが、餘り儲けがないので、近頃は庭鳥にしてゐる。僕が要吉の家にあがつてゐるうちにも渠は雄のひよこを土人間から集めて來て、一匁目八文半の割で、帶廣町から來た鳥屋に賣つてゐた。

音更並に伏古は、十勝で、汽車に便利な爲め、土人村として隨分よく知られてゐるが、その實、前

者の土人は五十八戸、百二十名ばかり、後者がまた五十五戸、三百餘名に過ぎない。それから見ると、日高や沙流や平取などは、土人の戸數が四五百もあらう。和人が蝦夷創業の爲めに建てた義經神社があるのも平取だ。日高の旅行中、二三名が馬に乘ると、その一匹は必らず牝馬で、その跡から約束の樣にポニイ（小馬）がてく〳〵ついて來るが、若しがた馬車にでも乘り合はすと、またきツとアイノのセカチ（男の子）が一丁も二丁もばた〳〵とついて來るに定つてゐる。然しアイノを見て、僕等が最も同情的哀感に打たれるのは、日高の海岸で、怒濤の押し寄せて來る間を、そのメノコが見すぼらしい衣物で、長い絲のさきに石を結へつけて、それを投げやり、ただよふ昆布を拾ひあげるのを見た時だ。または、十勝の大原野で、道に迷ひ、薄の間の槲の木に馬をつないで、一服してゐると、あちらから來るのは日本人でなく、馬にまたがつた鬚武者の老アイノであつた時だ。

北海道アイノは一體に猛惡な相があるが、樺太アイノはさう猛惡な樣子がなく、性質も亦至極おとなしい。然し、僕等が樺太のウショロ灣に着した時、黑足袋の上に草鞋をはき、黑びらうどの筒袖ごろも、胸をぼたんでとめて、膝まで達するの（露領アレキサンドルから來たる）を着て、細いわら紐を腰の上で締め、額をずツと削り込んで、あたまの眞ツ黑な髮をふさ〳〵と肩まで垂らし、うは髯も多く、頰ひげ、顎ひげの長い、銀色の大きな耳輪をつけたのが十六七名、すべて滿洲風で、ずらりと海岸に並んで僕等を迎へた時は、何とも云へない寂びと凄みとをおぼえた。また、樺太トウブツの小學校に、アイノ人の子が二名這入つてゐたが、そこを巡回してから船に乘る時、その二名も他の生徒と共に海岸まで見送つて來たはよかつたが、他の生徒のかげに隱れて、僕等の船出を見てゐたのは、如何にも可愛さうな氣がした。

アイノ人で兎に角知られてゐるものは、音更の中村要吉の外に、伏古の古川辰五郎――これは、自分の受け持ち地を耕作する餘暇に、和人の未開墾地をまでも開いてやつてゐるほど忠實なアイノだが、同村に安田巖城氏ががん張つてゐるので、その名は餘り引き立たない。膽振の蒲別村には、大河内コビサントクといふのがゐる。蒲別は土人の方が却つて勢力ある村で、和人の子供が土人の子供にいじめられるばかりでなく、和人が土人の爲めに小作人になつてゐるのもある。コビサントクは獨りで一ケ年百圓以上の村費を負擔し、大きな土地の所有者であると同時に、殘忍な手段を和人にも弄する金貸しで、女を數名持つてゐて、金と女とよりほかに樂しみはないと云つてゐる。

樺太には、東西兩岸におの〳〵一人づつのアイノ酋長がゐる。東海岸の土人總代はバフンケイ（和名、木村愛吉）と云ひ、純粹のアイノだが、開化した立派な人物で、立派な屋敷を構へて、土人の世話をしてゐる。西海岸の總代は川村初藏と云ひ、これは和人とのあひの子で、四十恰格の男である。樺太アイノにも日本人の血は早くから混じてゐて、四十、五十代のあひの子がすくなくない。初藏には、副總代とも云ふべき愛知縣人、武内公平といふ人がついてゐる。この人は、明治三十七年樺太に

渡り、土人間に澤山の品物を貸しつけたが、貸したら、もう取れないのがアイノの狀態であるから、そのまま、踏みとまり、幸ひに土人間に信用があるので、一身を忘れて、今ではアイノ人の爲めに盡してゐる。

四十歳以上のアイノが自分の年齢を知らないのは事實だが、また名をも知らないと云ふのは、和名のことである。北海道でも樺太でも同じだが、たとへば中村要吉とか、川村初藏とか日本人化さして、役場の戸籍帳に入れたのだ。樺太では、アイノの子が生れると、出張の巡査や番屋の人々に命名して貰ふ樣だが、北海道で初めて和名を與へる時、一度期であつたから。役場員が別な名に窮してしまひ、加藤清正だの、楠正成など云ふのを持つて來た。それもいいが、中には、和人が自分の名を改正する爲め、それを土人につけ與へ、土人と同名になるからと云ふ口實のもとに、自分の改名をしたこともある。土人には、そんなにして貰つた姓名はおぼえてゐるほど必要なものでなかつたのだ。だから、姓は和流で、名は土人流な、たとへば、大河内コビサントクとか、山田シロクランケとか云ふものもある。シロクランケは樺太チラホナイ部落の老アイノで、その家も廣い。その床の間の端に『警官席』と書いた半紙が張つてあるので、そのわけを聽いて見ると、部落の人を集めて浪花節を聽かせた時の名殘であつた。女の名に、チャコ、ユリコ、レキキシマ、シバラレマなど云ふのがある。また、女で、木村オチンコといふのが樺太のタランドマリにあつた。

樺太には、天野天海といふ新聞記者があつて、アイノに關し、雜駁だが、廣い知識を持つてゐる。から云ふ人々が――伏古の安田氏もさうだが――アイノ語を知らないで研究するには、先づ土人が與へた地名の意味を根問ひして這入る。樺太エストル河口のライチシカ湖は死んで泣く水海といふので、ここは實に風景のいいところだが、水流と風との加減で、今でも、船が危險だ。アイノはここへ入れば、三十日出られぬと云つてゐる。ナヤシとはよもぎの生えてゐるところとか、ノトロとはつき出たみさきとか、チヨマトーとは忌むべき沼とか、かういふ風に調べて行つて、アイノの持つてゐた歴史や傳說のヒントを得るのだ。然し同じ語が一ケ所ならず、二三ケ所にも與へられてゐるのがある、ノトロ、エサシ、モンベツ、ホロナイの如きはそれだ。且、北海道アイノの傳說中には、北海道の地理もしくは歴史でなく、駿河や信州のそれを說明してゐるのがある。アイノ語で、富士は火の神、利根は長い川などは誰れも知つてゐるとしても、信州の松本や上田などいふ地名をアイノ語で解釋して見ると、意外にも、北海土人の傳說と符合するのを發見したアイノ學者もあるさうだ。

アイノの傳說のうちでも、最も面白いと思ふのは石狩岳と阿寒岳の傳說である。この兩山はもと夫婦であつて、石狩岳が男で、マツネシリ、乃ち、阿寒岳が女だ。ところが、夫婦喧嘩をして、女山が釧路に逃げた。その時、男山は赫怒し、おほきな矛を投げて、女の耳を貫いた。女山は耳を貫ぬかれたが、その矛を受けて投げ返すと、非常な速力で飛んで行つたので、當りさへすれば、男山の生命を

危うくしたのに相違なかつたのだが、その急を救ふ爲め、ヌプカウシヌプリが拔けて出て、大連力の矛を受けとめた。このヌプリ、乃ち、神山の拔けて出た跡が今のシカリベツ（獨りで出來た沼）であると云ふのだ。然し、この傳說もよく研究すれば、北海道產ではなく、アイノが本州にゐた時出來たものかも知れないのだ。

僕が伏古に安田氏を訪づれたのは、おもにアイノの史詩もしくは戰詩なるツヤコロベやユーカリの歌ひ方を、氏の紹介によつて、直接にアイノから聽きたかつた爲めだ。然し、殘念にも、そんな土人はゐなかつた。伏古の土人は割合に古くない。北見もしくは日高から移住して來てから、僅かに六代か七代にしかなつてゐない。網走線のボンベツに行けば、或は聽けるかも知れないと云ふことであつたが、僕は眞似だけでもいいからと云つて、近所のメノコを呼んで來て貰つたが、その女は歌の話は出來るけれど、歌ふことは出來ないと答へた。『男ばかり引つかけまわつて、役に立たない女だ』と、安田氏はかの女を冷かした。

音更村には、シヤコロベ並にユーカリを歌へるものが二名あつたが、一名は老死し、一名はその行くゑが知れなくなつた。然しシツンプ（和名、淺山彌太郎）といふ百餘歲の老人がゐた。これが最も賴母しい歌ひ手だが、もう、目は見えず、耳は聽えず、齒は悉く落ちこぼれ、腰は立たない。それでも、先年巖谷、江見諸氏の行つた時は、まだしも、それに歌はして、中村要吉がそのかたはらから飜譯することが出來たさうだが、もう、酒も飲めないほど――して、一二升も飲まなければ歌はないのだ――老衰してゐて、要吉が非常に斡旋したが駄目であつた。僕は虎口に入つて虎子を得ずといふ感じがして、實に殘念であつた。その他に誰れも歌ひ得るものはなかつたのだ。

然しその夜お祝ひの家であると云ふので、その歌や踊りを見聞したい爲め、夜まで要吉の家にとどまつてゐた。二三日前にもお祝ひがあつて、隨分賑かであつたが、それは十三年目にこの部落へ歸つて來て、女房を貰つたそのしるしであつた。これはまた百日以上山へ出かせぎに行つてゐて、今度また秋の貂取りに出るまで、鳥渡歸つて來る人の爲めだが、それも本人がゆふかたまでに歸つて來なかつたのでおじやんになつてしまつた。

アイノの犯謠

アイノの歌謠中、シヤコロベ並にユーカリの種類は最も長いもので、それを歌はすには嚴格な儀式があつて、歌ひ手並に聽き手に澤山の酒を振舞ひ、渠等が醉つて來ると共に夜がしん〳〵と更けて、初めて興が乘つて來るものだ。この種のもので、樺太アイノには、ハウキと云ふのがある。シヤコロベはその歌ひ方に最も位がある祖先史詩だが、ユーカリはそれを眞似た英雄詩譚である。この兩者の說明または內容は、一昨年の殖民公報に中村要吉をして口譯さしたのが載つてゐるし、また一昨年の中

央公論に金田一花明氏のがあるから、ここには紹介を省く。その他に、ウチャシクマ（古い物語）と云ふ歌の附かない歴史談や、ツイダク（短話）と云ふ作爲的談話や、オイナ（擬音）と云ふ鳥獸の聲に擬して歌ふ述懷がある。また、ポニタキとか、ウエベケリとか云つて、お伽噺、昔譚の樣なものがある。

日高の沙流や平取の土人間では、かう云ふのを頻りに習ふものがゐるが、專ら人々に分り易くしようとして、その歌ひ方もしくは暗誦し方がすべて古風な眞相に遠ざかつて行くさうだ。その他、わが邦人の端唄や都々一の樣な、酒席で歌ふ短い歌が澤山ある。タプカラとは劍舞歌の樣なもので、之を歌ふのは男の老人に限る。また、男が坐わつてやるのに、シノツチャケといふのがある。女の立つて歌ふのに、ウボボと云ふのがある。男女すべてが立つて踊るのに、リミセといふのがある。それに、また、ヤイシヤマネと云ふもとの哀歌がある。もとは、果敢ない戀の別れや死を歌つた挽歌だが、ヤイシヤマネーナ（かなしや、な）といふ句をその歌の中で度々繰り返すところから、一種の歌の總名となつた。且、何の悲しいこともない酒宴歌にも、ヤイシヤマネーナを繰り返すことになり、ただ流行歌の代名詞になつてしまつた。

哀歌の一つ、

ヤイシヤマネー　ナ（悲しや、な）、
ヤイシヤマネー　ナ（悲しや、な）、
クコロ　ポン　カンピ（わしが若い帳場さんは）、
ヤイシヤマネー　ナ（悲しや、な）、
ナツタ　アララ（どこへ行つた）？
ヤイシヤマネー　ナ（悲しや、な）、
ヤイシヤマネー　ナ（悲しや、な）！

番屋の帳場は、アイノの若い女に取りては、理想の戀人である。それと關係してゐたあげく、年期が滿ちて、渠は内地に向つて船出したが、その船は途中で沈沒したと云ふ悲しみを歌つたものだ。

アイノの古謠、蟲のくどき話に左の樣なのがある。

アルクラン　モコラン、アクス（一晩寢た、さうしたら）、
バイカラ　アン（春が來た）。

また、左の如きがある。

イデツキ（決して）
ウプウイナヤーン（鮭の白子を取るな）。
ウバエコロ　ポン　アラカベ（それを喰べたら、腹が痛くなる）。

子守唄で、左の如きがある。

ホツコーコーク（鳶が舞ひあがる）、
ネイタロツクン　チカプ（降りたらどこへとまるやら、鳥）、
ホツコーコーク（鳶が舞ひあがる）、
カリコロカヤ（あすこにくる〳〵舞ふ）。

また、わが國の祝詞式な物で、酋長が神に申しあげる言葉に、最も莊嚴なのがある。

ココロ　アパウチ（わが家の火神さま）、
ソイワアン　カムイ（そとにゐます神達）、
ツラノーウコサン　ニヨーワ（共に相謀りて）、
ココロ　イノンイタツキ（わが祈りに）
ヌプヅスクリー（深き幸ひを）
サンレツカバクノー（子孫の子孫まで）
シツリークニ（傳はる樣に）、
カラワエンゴレー（作り給はんことを）。

さきに僕は立會裁判ツアランケで歌ひつづけることがあると云つたが、その歌のうちに入れることが出來るのを一つあげて見よう。一說には、これは廣尾の驛遞を土人が昔つとめてゐた、その職務を歌つたもので、十勝アイノ特有のヤイシヤマネー、乃ち、流行歌だとも云ふ。例のヤイシヤマネーナ、ヤイシヤマネーナの囃言葉を以つて初まるのだが、

トノホルシパクス（殿の命によりて）、
クロマトータ（暗い夜を）
パエカエアンナ（われ獨り行くのだ）。
スツパ　テレケ（急いで行け）。

これは馬に物を云つてゐるわけだが、若しそれに

キムン　カムイ　オカイナー、
サラタンネ、エーホイ　キシキシ

と加へれば、『熊の神が出るから、サラタンネ（馬の名）よ、ハイ〳〵ハイ〳〵』となるのだ。

その他二三種の原歌だけを載せて、アイノ語研究者の參考にしよう。女の歌の一——

コレエベリ　ホプニナア、
ホクトンケヘー、ヘチウヤン。

その二——

ウワシ　ハオー、ウワシ　ハエ、
ウワシ　ハエラー、ウワシ　ハオー、
ハオイヤ　ハオイヤー、
ハオオイヤ　ハオプオー。

その三——

ヘエサハオー、ヘエサアハエロー、
ヘエサハオ、ヘエサア　ハエロー。

また、近頃の青年の作つた歌だと云ふに、

タンパアシンノオー、
ザヤゲウウー　アムキリ、
クアフンー、アクウース、
フクサクウウサイトイワレタア。

義經の傳說の如きは、眞赤なうそで、これはわが邦人がアイノを强制威壓する爲め、兩部神道的手段を弄して、アイノ傳說に於ける英雄を義經だと說明して聽かせたのだ。邦人が日高の平取に最初の蝦夷經營に着手し、近藤重藏が十勝の廣尾街道を切り開いた頃から、廣められた手段的傳說であらう。

無責任な土人等はそんなことはどちらでもいいのだから、成る程さうで御座るかと聽き流したと同時に、後世の邦人が行つて、お前達の先祖は義經かと聽くと、シャモがさう云ふからさうなんだらうと答へるだけだ。殆ど一人も信じてゐるものはない。北海アイノの全體に渡つては勿論、樺太アイノにもその傳說があると云つて、邦人が物知りがほに說くのは、義經その人ではなく、すべてオキクルミその者か、その變態的人物のことだ。

アイノは日高、十勝、北見といふ樣に、國を異にするに從つて、その歷史、言語、歌謠も多少異なるが、その傳說に於ても、目立つて違ふのがある。俗に義經と云はれてゐる人物を、日高ではオキクルミと云ひ、十勝ではオキギリマと云ふ。日高アイノは之を同種族の歷史的最大人物と尊崇するに反して、十勝アイノは之をシャマイクルと稱する最大英雄の使用人に過ぎない樣に思つてゐる。このシャマイクルやオキギリマ、その他の英雄傳も、忘れられないうちに、アイノから直接に聽いて置く必要があらう。

ブシ、乃ち、とりかぶとの根からは、アイノが例のブシ箭の毒を取るのだが、花は紫色の蝶々の樣で、なか〳〵奇麗で、和人の子供は知らずしてそれを家に取つて歸ることなどある。このブシと、食料になる百合の根、サク、あまニヲなどは、アイノと離れ難い植物である。動物では、熊と貂とである。樺太アイノには、矛漁といふことがあつて、エストル川などで、夜、たい松をたいて、獨木舟を

水流に浮べ、アイノ二名が舟の舳と艫とに立ち、鈎つき矛を以つて水中を泳ぐ紅魚をつき指すのだ。僕が『樺太雜感』(大陽一月號)の一つで歌つた通り、その秘術はトンチから敎へられたと云つてゐる。コロボクル論者等はそれが自分らの所謂蕗の下人だと云ふが、あちらの蕗はわが邦人中の最も背高い人も隠れてしまうほど大きいものであるし、また實際コロボクル人なるものが存在してゐたといふ論據は殆ど全く發見されない樣だ。コロボクルにせよ、トンチにせよ、どうせ、アイノの神話かお伽噺的傳說であるに違ひない。

樺太通信

其一

明治四十二年六月二十三日の夜に小樽へ着いた。

船が二十六日出帆なので、それを待たなければならない。小樽までは東京に於ける服裝のままで來たが、夜分を除いては、左程冷氣を感じなかつた。船に乘り込む時は、袷に袷羽織にどてらを用意する。シャツも二三枚用意して行くつもり。

鐵道は、北海道に這入つてから、急に動搖が烈しいので困つた。客の取り扱ひも青森までとは違つて、丸で冷淡である。青森函館間の聯絡船比羅夫丸は乘り心地のいい船だ。京都から來た番頭らしいのが乘り込んでゐたが。僅か四時間の聯絡航路を苦にし、二日二晩絶食してゐたから、いよ〳〵船に乘り込むと、まだ出ないうちから、空服と神經作用との爲めにもがいてゐた。それが函館の山が見えると、急に元氣づきふら〳〵しながらも、甲板上をうろつく樣になつたのは滑稽であつた。

其二

餘り汽車にゆられて來たので、食慾は殆ど出なかつたが、昨夜はゆツくり眠られたから、今朝からは飯が甘く喰へ、勢ひも出て來た。

小樽港には、伊集院中將の率ゆる第一艦隊六隻が碇泊中だ。この艦隊も僕と同日に樺太に向ふさうだ。

中央小樽停車場附近にロシヤ人とトルコ人、ふたりとも老人が協同してロスケパンを製造販賣してゐる。一人には日本人の妻があるが、今一人の方が先日妻か妾かを定めるつもりで、日本の女をつれて來て、その近處の宿屋に置いたが、女はまた女郎あがりか何かなので、隣室へ自分の色男をとまらして置いた。して一晩で外人から金十圓と別に二三圓の小使とを取つて、色男と共にどこかへ逃げて行つた。それが訴へられてゐるが、どこへ行つたか分らない。外人とは云へ、既に歸化人だのに、それに向つて隨分可愛さうないぢめ方をする日本人があればあるものだ、ね。

今日烏渡札幌へ行つて來るつもり。

其三

六月二十五日發。昨日札幌へ來て見た。街幅が廣い上に、家根が低く、異樣な高木が澤山なので、至極のんきな町に見える。たまに人の通るのに逢はずば、丸で外國へ來た樣だらう。

夜、月がよかつたので農科大學の附屬博物館の構内を散歩した。牧草の間を歩いて行くと、ドロ、イタヤ、アカダモ、白楊樹などの月のあかりに高く繁つてゐる姿が如何にも氣持よかつた。

今日、山本露滴氏と中島遊園に遊んだ。同氏は短歌を作る人だが、今回、實業の北海といふ大雜誌を經營することになり、東京の實業雜誌を北海道から驅逐するつもりださうだ。九月に初號が出るのだ。

河島北海道長官を訪ねたが、僕を忘れてゐたので、餘り話をせずに別れた。

曾て東京にゐた俗謠詩人野口雨情氏は、室蘭の某新聞にゐたが、近頃脅喝取財の名で札幌監獄に這入つてゐる。然し本人はただその樣な性質の御馳走を受けただけで、何も知らなかつたのだと云ふ。氣の毒な話だ。

僕は明日午後二時愈々出帆する。

其四

六月二十六日。小樽から。

昨日、露滴氏の外に、元の萬朝記者であつた安倍雨のや氏並に僕の一舊友と共に札幌座を見た。つい、こないだ銃殺された樺戸の看守殺しの囚徒を仕組んでやる初日であつた。僕は考へたが、道具の使ひ方と多少藝の垢ぬけしたこととは東京のに及ばないとして、その他に於ては東京と地方と對して相違はない。下手と自覺して熱心にやるだけが、却つて地方のに恕すべき點がある。こんなことを云はれるのは、恐らく高田や伊井の名譽ではあるまい。

朝、寢すごして顏も洗はないで飛び出し、札幌ステーションへ來ると、露滴氏も跡から驅けて來て、見送つてくれた。汽車の上でたま〳〵元から知り會ひの警察官に會つた。某縣で保安課長をしてゐる時、はたからいぢめられて、また別な縣へ左遷されたのであるが、今は本道の某署に警視をしてゐるので、先づ滿足だと云つてゐた。

小樽へ來て見ると、期待の船が入港してゐないので、高砂丸と云ふ五六百噸の小船で行く。乘り込みは今晩の十二時だ。

其五

六月二十七日早朝。昨夜から船に乘り込んで、今朝四時に出帆した。顏を洗つてゐる時、日の出が見えた。その眞赤な平穩な海の靑みとで心も一洗された。船客は各等を通じて、五名しかない。今は丁度客の少い時節ださうだ。

腹がへツてゐるが、辨當はまだ出ない。小樽で喰つた帆立貝の柱が珍らしく又甘かつたことを思ひ出した。ガゼのかまぼこも亦珍物だ。北海道では、海栗のことをガゼと濁る。その身をかまぼこにしたものだ。

小樽には、前便の警視の外に一人の知人がゐる。僕はその人に種々世話をかけた。渠はその父のやつてゐた女郎屋を人道にもどると云つて早く廢業してから、同地の口ききとなり、一昨年また代書や印紙販賣やを業としてゐた。東京で學ばした娘が二人あつて、いづれも美人だが、自由結婚論者であるだけに、渠はその二人を放任主義で育てた。嫖輕なおやぢで、自分は素人役者が自慢で、讀賣新聞社の讀者大會があつた時、わざ〳〵東京に出て、餘興喜劇の一役を引き受け、喝采を博したこともあつたので、一昨年一家を擧げて上京し、自づから新派の俳優となつて、娘をも二人女優にしやうとしたが、老いた渠だけを以つては相談に應じてくれるものがなく、また娘等も僕等に渠の志望一轉を依賴したので、物にはならなかつた。再び歸つて來てから、渠は別な仕事を初めて居る。娘の一人は以前から相思であつた間を全うし得、その姉はまだ獨身主義を捨てて近頃父の命に從つた。僕は斷言するが、餘りやきもき云はない親のもとには、却つてその子等に失敗が少くつていいと。

其六

同日午前八時。朝食後。

同乘の客に樺太西海岸マオカで商業をやつてゐる人がある。頻りに樺太の秕政を憤慨してゐた。その人の言葉に『政府も人民も目前のかねさへ取れば、人のことはどうでもいいと云ふ樣なやり方だから』とあつたが、その憤慨の理由を聽けば、この言が簡單でも萬事を盡してゐるらしい。

甲板上にのぼつて、北海道の陸をかへり見ると、增毛の鼻が右舷に近づいてゐる。みよしは沖に向つて、殆ど空天にのぼる氣持ちだ。

海！海！僕は去年の春以來、餘り都會的生活に忙しくつて、好きな海を見なかつた。海に浮ぶことはなほ更らなかつた。僕は生活と情事とにゆるみある時、海許りがいのちであつたこともある。今またその感じが出て來た。寂しく、若々しく、而も力に滿ち〳〵た樣な感じだ。

然し、北海に浮ぶと、まだ一つ別な感じが加はつて來る。僕等はロシヤに向つてゐることだ。『ロシ

『やはわが競爭國』といふことだ。この題で少年詩一篇を作り、雜誌少年八月號に對する僕の義務を果した。『海にのぞめばわが國浮ぶ、北の海にのぞめばロシヤを思ふ』と云ふのが最初の二行であつた。

其七

同日、晝食後。

燒尻、天賣の島影を右舷に見ながら進行する。みよしの方に遠く利尻、禮文の山が白い雲を被ぶつて、氷の山の樣に見える。

ボーイにビールを持つて來させ、それを飲みながら客といろんな世間ばなしをする。客の一人は難船して助かつた經驗談をした。どうして助かつたかと云ふに、便所のまたぎを拔き取り、その穴へ身體を入れ、恰も浮き袋で浮いてゐるかの樣にして、五晝夜波上をただよひ、兩手を以つて櫂のつとめをさせながら、藁や板切れを拾つて食ひ、五晝夜目に漸く漁船に助けあげられたが、もう安心と思つた時、氣が遠くなり、暫く人事不省であつたさうだ。

この人は內地で仕事を失つた爲め、何かいいことを見付けに渡るのだが、一人の婆アさんはマオカの呉服屋で、古着を仕込んで歸るところだ。今一組の夫婦は同所の荒物屋で、子息に店を託して、札幌へ遊びに行つた歸りだ。いづれも今日に限り醉はないと語り合ひ、甲板の上を出たり、這入つたりしてゐる、一時五十分再び甲板上に出ると船は段々天鹽の山を離れて、宗谷海峽の方から貨船が一隻やつて來るのが見える、利尻島が明らかに進行の前路にあらはれて來た。

其八

二十七日、午後四時。

天鹽、北見の山々は低く、遠く、かすかになつて、利尻島に近づいた。同島は北見富士を以つて蔽はれてゐるところだ。山の恰好は駿河富士よりもいい。古風な神社の軒の樣に、左右の輪廓がうはぞり加減に引かれてゐて、其の裾野は乃ち海岸である。山巓は白雲に隱れてゐるが、却つてそれが奥ゆかしい。

この島は北海道一の漁業場で、小い島としては、比較的に同道產物の大部分を鯡で占めてゐるのだ。その一端、鬼脇の如きは、蟹の罐詰を以つてまた知られてゐる。歸途そこへも立寄るつもりだが、船客の話によると、野生の猫が多く居るさうだ。その他の毛だ物は狐で、島民はこれを殺さないことにしてあるさうだ。

五時頃には、ずツとその近くを左舷に見て進行したので、且、雲が山を離れたので山巓もよく見えた。惜しいことには餘りいい格恰と云へない。然し、谷々には雪が殘つてゐて、それが多くの白い線

となつて殆ど裾まで及んでゐる。

やがてその島をも離れよう。禮文島を左舷に、稚内を右舷に、いづれも遠く見て宗谷海峽の西を通り過ぎると、今度はいよ〳〵北緯四十四度（樺太の南端）に入るのだ。

其九

二十八日、午前三時半。目を醒まして甲板上へ出ると、すでに樺太の南端は見えないほど北に進んでゐて、海馬島の影も遙か後方になつてゐる。まだ日は出ないが、連山のうしろから眞赤な雲が延び出してゐる。船から見ると樺太連山は單調子で殆ど一直線に南北に走つてゐる。船も亦十マイルの速力を以つて樺太西岸三マイルほどを隔てて北方へ駛走するのだ。マオカはもう二十五六マイルしかないと云ふ。昨夜宗谷海峽で多少波が立つたので、同乘の婆アさんが一人醉つてしまつたが、それも今は平穩に寢てゐる。荒物屋の主人は、退屈まぎれに、手風琴を出し譜を見ながら、下手な演奏を初めた。

左舷に露領が廣がつてゐるのだが、それは遠くて見えない、ただ茫漠たる浪の原野だ。

午前四時半。眞赤な雲は日の出であつたのだらう、今や日は大分高くなつて白い輝きを呈してゐる。風は隨分つべたい。

其十

廿八日、午前七時半、マオカ着。

船中より見れば、附近の山はすべて低く、且大木がない。殆ど山火事のあつた跡一面に青草が生えて、その間をところ〴〵小い樹木が立つてゐるかの樣だ。

僕、實は大泊や豐原の方を先きへ見て、それから來るつもりであつたのだが、弟の病氣が氣がかりであつたから命令定期船には乘らず、社外船で小樽から直行した。すると、弟は當地の病院に入院してゐるのを知つた。不慣の寒氣に當つて、不慣れの仕事で過勞したからでもあらう、本月五日から熱が出て殆ど絶食のありさまであつたが、昨日、七八里在のオタトモから和船に乘せられてマオカへつれて來させられたのだ。當地の人々は樺太風土病のガツちやけだから、醫者にかかるよりも習慣で分つてゐる手療治の方がいいと云ふ。醫者の方では誰れでもそんな特別な病氣の存在を否定する。熱が出た翌日から腰が立たないが、肛門の周圍が痔の如く切れてゐる。

院長は昨日診察して脊髓病だと云つたさうだが、今日の推斷では肺結核になつてゐる恐れがあると云つた。兎に角、一二日の經過を見て貰はなければ分らない狀態だ。

病院は二三ケ所あるが、弟の入院してゐるのは某軍醫が樺太廳から月八十圓の手當を貰つて開いて

ゐるのだ。一日二圓五十錢だが、病室と云つても、當地普通の平家で、四室しかない。一室には、女房と二三歳の子供とが付き添ひで嚴丈な男が這入つてゐる。當地の附近で働いてゐた出稼ぎ漁師だが、仕事の最中にわけも分らず出刄を以つて脇腹を突きさされたのだ。樺太は無法者と泥棒との行くところだといふ話をよく人がするが、來る早々そのことを思ひ出した。

夜あけは午前二時半ださうだが、午後八時半漸く暗くなりかかる有樣だ。今日の日の入りは僕には見物であつた。海と空とが一樣に赤くなつて、ちぎれた小雲を黃金の光が取卷いてゐるのは丸で錦で飾つた海馬島の樣であつた。寒暖計は、午後八時に五十八度だ。

其十一

六月廿九日。マオカの町をはづれまで歩いて見た。本通りと裏通りとのふた筋があつて、兩端までは一里以上もあらう。北のはづれには、樺太中で殆んど一番おほきい鑵詰製造所がある。樺太で取れる蟹は兩足を延ばすと、四尺五寸もある。その胴や足の殼を濱邊に棄ててあるのが、いやなにほひがして、小蠅が一面にたかつてゐた。

アイノの女の子がアツシを着て、部落から買ひ物に出て來たのに逢つた。ロシヤ人の住んでゐる丸木づくりの家もあつた。後家（淫賣）が三々伍々どこかへつれ立つて行くのもあつた。また、同類らしいのが水ぎはで足だけつかつてゐるのもあつた。鏡の樣にないでゐる海上には、命令定期船上川丸が碇泊してゐる。

當地の家はすべて粗造だ。料理屋の樣なものでも、殆ど板でかこツてあるばかりだと云つてもいい。普通は五間間口で、八十一坪と定つてゐて、それが八百戸ばかりあるのだが、人の住んでゐるのは四百五六十戸しかないさうだ。到るところに貸家札が張りつけてある。明治四十一年後、こんなみじめなありさまになつたのださうだ。不景氣の結果には相違ない。船中での話を思ひ出しても、マオカにゐるのは、五間間口の家に少くとも小千圓をかけてあるのが未練だからで、それを賣り拂つてしまうとしても、五六十圓にしか買ひ手がない。商人などは、喰つて行けさへすれば先づいいのだが、それさへ今日では見込みがないと云つてゐる。肝心の漁業が思ふ樣に行つてゐないからだ。

參考の爲め、エハガキを十數枚送るから、都合次第で複寫して貰ひたい。

其十二

六月卅日。昨夜は月が良かつた。して、日の暮れてしまうのがどうしても九時過ぎだから、東京から來た者に取りては、いい月夜には、まだ暮れてゐない樣な感じがする。晝間の空氣と夜の空氣とを、明るい寒みから、區別するだけの神經作用がまだ働いて來ないからであらう。

夕やけのいいことは既に語つて置いたが、日はマオカの町と直角になつて海に入るのだ。その海と空と一様に黄金色を呈すると、その間に大小の碇泊汽船四五集が後光をめぐらして浮んでゐる。濱邊に立つた僕の身には、北の海の景氣がしんみりと浸み込んで來ると同時に、また北の冷氣を充分にあびることが出來る。

弟の看護に來てゐる雇ひ人の女房は鑵詰製造の方に必要だから、今日、オタトモへ七里の路を歸し、別なのと入れ代はらすことにした。その間を僕がたツた獨りの看護人だ。昨日、看護の暇に玉突屋へ行つて見た。僕は東京で八十五點ぐらゐだが、それに對して百點もしくは百點以上のものが隨分あるさうだ。

其十三

玉突は丸萬といふ料理屋兼藝者屋に二臺、僕の宿ることにした香深館といふのに一臺ある。繪ハガキを買ひに行つたが、その店では雜誌なども取りついでゐる。調べて見ると、マオカだけで、實業の日本が三十五部、太陽が三十部、婦人世界が二十五部、太平洋が二十部、少年世界、少女世界が兩方で三十部、女學世界が十五部、文藝倶樂部(昨年までは二十五部だが)パック、演藝畫報、中學世界、實業少年等が各十一二部ださうだ。新小說、趣味、現代、中央公論などは註文がない。

日曜會といふのがあつて、これは初め民政廳の發案したものださうだが、そこではいろんな雜誌も一部づつ備へて、閲覽さすさうだ。

時間は北海道だけで云つても、小樽と稚内とで二十分違ふ。して、稚内とマオカとでは三十分違ふ。だから、東京と當地とでは一時間以上の相違があるのだ。

其十四

七月一日。昨夜はオタモトから關係の漁師が來たので一晩酒の相手をした。分らず屋の正直物で、同じことをいつまでも繰り返して埒が明かない。僕等の事業の爲めに他と喧嘩をしてまでも盡して呉れてるのは、その繰り言で分つた。刺網不公許の事に及ぶと、これも相變らず憤慨してゐた。もう、雜漁者の引きあげ時が三四日に迫つてゐるのだ。本年、渠は千五百圓ぐらゐの收獲はあつたが、それを配下十餘名に分つと、渠の手には正味百五十圓ほどしか殘らないさうだ。そのうちから、おまけに稅が出る。總領息子は函館中學校へ入れてある。歸するところ、勞して功なしである。はい繩(釣)並に手ぐり網だけを許されてゐる雜漁者の立ち行かないのは、この一例を見ても分るだらう。雜漁者の實入りがないから、從つてマオカの商業も繁盛しない。晝間から蓐を延べてごろ寢をしてゐる商人もあるのを僕は見受けた。

昨日來た漁師は格腹自慢で、僕の來るのを待つてゐたのは、一つには、僕に自分の油繪を書いて貰ひたいのであつた。僕は畫家でないから無論、ことわつた。多分、僕が筆を執るんだと誰れかに聽いたのを、畫かきと思ひ込んでゐたのだらう。

夜に入つてから、雨が降つて來た。僕には、初めての雨だが、全體、樺太は風が強いが、雨は少いさうだ。

寒暖計は、この頃、華氏四十五六度から六十五度の間を毎日昇降してゐる。

其十五

七月二日。晴。

昨夜も、入れ代はりに來る筈の看護人が來なかつたので、病院にとまつた。

當地に於て、違つた事情を段々發見するうちに、病院に來るものと云つても、暴風の日に磯舟が飛んで來た爲めそれに當つてあばら骨を折られ、二三日にして死んだのなどがある。裁判事件でも、土地は自分の物でありながら、家主から立退きを請求されたりしてゐるのがある。その實、土地は自分の名義になつてるとは云へ、政府から貸下げられてゐるのだからだ。

樺太の沿岸には大木がない、大木は一里も二里も奥へ入らなければ、見ることが出來ない。山火事の多かつた結果かも知れない。こないだも三四日つづいたのが豐原附近にあつた。古いことを云へば、或は二ヶ月も燒けつづき、或は十數里を燒き拂ひ、或は帆船の上が一晩のうちに二三寸の灰を積み重ねたこともあるさうだ。燒け跡には、先づ白樺が出來る。それが育つとそのかげに椴松や蝦夷松が生える。して草木の生存競爭上これらの松の生えるところには樺はその繁殖を停止してしまう。それがまた二三度燒けると、ばらやいちごや羊齒類の坊主山になるが、そこに少しでも熊笹の根があると、すべてがこの笹の爲めに征服されてしまうので、笹は森林保護には大害物だ。現今では、林業は全く許されてゐない。人民がただ自己の炭薪料に供するのを切り出すだけだ。落葉松は大泊、豐原、クスンナイなどにはあるさうだが、マオカ附近には殆んど蝦夷松、椴松ばかりだ。たまに、アカダモ、ヤチダモなどもないことはない。その筋の調査によれば、南樺太の森林總面積三百十五萬三千町歩、との石數十八億八千餘尺ノ。

其十六

マオカなどの氣候は、北海道で云へば、大體、旭川などと同じくらゐだ。然し北海道では、札幌附近にしか育たないといふ茄子が、樺太西海岸では、どこにでも育つ。茄子の出來る土地なら、農產物は何でも出來るものだから、農業の見込みが決してないとは云へない。唯政府の方針と指導とが、い

たづらに學理的に、いたづらに大袈裟にならず、そのよろしきを得て行きさへすればいいのだ、一木次官も、民政廳に吹き込まれたのか、國人の慣れもしない露國式の農牧兼業が直ちにいいかの如く說き出したが、殖民はすべてわが國人だから、渠等の習慣に從つてもツと實際的な指導をして行く方がよからう。

林業は全然禁止だし、農業はまだ殆ど手を着けてゐない。ただ漁業と漁夫を相手の商業の爲めに、明治三十九年四十年は大繁盛であつた。マオカでも金錢上の單位は十圓で、その以下は勘定しないあり樣で、百圓札が人の手から手へ飛んでゐたのだ。內地のは勿論、北海道の資本家等が、一攫千金の見込みで、各數萬數十萬金を投じて漁業をやらしたのだが、多くは失敗に終つてしまつた。渠等が山師であつたと同時に、樺太の漁師も亦山師であつたからだ。その後は、大資本家等はすべて自分または自分の代表者等を以つて直接に建網を張つたが、その上り高はすべて海上から直ぐお暇してしまうから、樺太に落ちる金は寧ろ小資本家の雜漁者等の手から落ちるのだ。して、その雜漁者等が前便に報じた樣な窮態を演じてゐるのだ。

其十七

樺太の鰊漁は、一時間にして數萬金を擧げる建網を以つてする。毎年三月十五日から許され、六月十五日を期限としてゐる。是が特許漁業者の懸命になる期間で、昨年は建網を漏れた鰊の密漁が出來た爲め、雜漁者等も大分意外な利益に浴したが、本年はそれをたまですくツても、警察から嚴罰された。うそにも魚族保護の名（實は種々の情實がある）を楯に取り、官憲は拾ひ鰊をも禁止し、亂暴にも雜漁業者所有の漁具　漁船を封印し、海岸の假小家を以つて密漁者の隱れ場と見爲して、之を破壞し、また密漁嫌疑の名を以つて漁網を官沒したりなどやつたので、不平忿怒の餘り去月の騷動の樣なことが勃發したのだ。鰊の期間は、雜漁者等は、見す見すこの大獵がそのまま樺太以外に運ばれるのを知りながら、僅かにはい繩もしくは手ぐり網を以つて鱈、鰈、蟹その他の雜魚をのみ拂つてゐなければならない。六月から、手ぐりが許されるのだが、それは大切な時期が濟んでからのことだ。

樺太の都會々々は料理屋と遊廓とを除いては、何程の收得もなくなつたのは尤もなことではないか？して遊廓さへそこでの遊蕩料金を今では半減しなければならなくなつて來た。同島定住の漁夫、商人等は共喰ひの悲境にあつて、喰へさへすればいいがと云つてゐるのだ。一昨年、乃ち、明治四十年末からの越年に多くの饑餓者を出したので、民政廳は非常にその救助に窮したさうだが、昨年末の如きは、越年時期が近づくと、巡査が各戶を訪問し、一夫婦に對し、少くとも米三俵、味噌一樽の貯へをしたか、どうかを確めにまはつた。ところが、本年は鰊も亦不漁と來たのだから、この越年は一層困難だらうと、マオカでは豫想されてゐる。

其十八

本年は鰊も不漁であつた。概算總計十二萬石、この價格百四十四萬圓。それに對して政廳に納める特許料金は八十五萬圓。差引五十九萬圓の收益の樣だが、實は、全體で四百萬圓なければ利益を見ることは出來ないさうだ。本年は、つまり、二百四五十萬圓の損失であつた。一漁場で一萬圓の料金を納めながら、五六百石しか取れなかつたのがあるし、漁業組合の漁場で一尾も這入らなかつたのもある。かういふ狀態だから、政廳に保護されてゐる建網業者間にも、料金が高過ぎて困ると云ふ不平があるのだ。一方には、渠等の不平あり、また一方には雜漁業者の鬱憤があり、その間にあつて樺太政廳は板ばさみになつてゐるのだ。

刺網公許、不公許の問題は、その實政廳が建網業者等に對する私情的義理づくに過ぎない樣だ。楠瀨長官時代の情實が今の平岡時代の法例となつて居るのだ。刺網を許せば鰊族を絕やすといふのは單に口述らしい。網の目を見ても、建網よりは刺網の方が一定してあらい。一定年齡に達して居ないものだけは逸脫して行くことが出來るし、且、刺網はその上下から自由に鰊が通過するだけの餘地を存してあるが、建網となると、網さへ大且健ならば、群來の鰊を大小悉く一網に捕獲してしまう。

今一つ考へ置く必要があるのは、魚が海藻を目がけて群來すると、牝鰊は海藻に放卵し、牡鰊はまたその上に白子をかける。すると、そこらあたりの海水は一面に黃白色に變ずる。之を放卵濟みと云ふ。ところが、魚は群來の途中に張つてある建網の手網（ミゴ繩製）の光澤を見て、之に恐れ、まだ放卵しないうちに方向を轉じて散逸しようとする。して、それが、悉く常設の建網に這入つてしまうのだ。然し、刺網は、放卵濟みとなつて、海水の黃白混濁の爲め、魚が眼光を鈍らし、周圍を狂奔する時、投入される網である。魚族の繁殖を保護する上には、建網の方遙かに刺網よりも大害がある。且、刺網を許せば、樺太住民の大多數が生氣を吹き返すのではないか？政廳はこれ位の道理を知らないことはあるまい。知つて知らない眞似をするのは、死法を楯に情實を隱蔽する所以である。

政廳收入の上から云つて、雜漁者の稅金十圓に對し、鰊業者のうちには一萬圓以上を納めるものがあるのは、丸で比較にならない樣だが、後者の稅を低減してやつても、前者の刺網を公許し、別に不足を補ふ財源を發見するに努むべきものだ。新領地の發展には、それ位の努力は治者の方で公平にしてやつてよからう。越年時期に至つて、昨年の如く、慈善會を開き、その上り高で窮民を救はうとするが如きは、短見姑息も亦甚しい。

其十九

七月二日。晴。寒暖計華氏最高五十八度、最低四十三度。

玉突をやつてゐると、土地の人々がわれも〳〵と僕に相手になつて來る。當地で二百五十點のボーイも、百點または百二三十點の客も、同じ樣な程度で、東京の八十點もしくは八十五點の僕に負け勝ちだから、樺太の相場が餘り安過ぎると思はれるのが殘念だと云ふのだ。然し隨分うまい玉を取る人がゐる。漁場の關係者が多い爲めか、突き方は隨分あらい方だ。して、僕もあらいのだが、不慣れの土地に來てゐるだけ、態度をくづさないので當るのか知れない。とう〳〵九十點に値上げされた。ところが、電報が來たとか、急用だとか云つて、呼びに來られるものが多かつたので、急に玉場が寂しくなつた。小鰊が取れたのだ。漁場を持つてゐるものは大抵和船でそこへ行かなければならなかつたのだ。

許可期外でも、網に乘るものは公然の秘密として捕獲していいのだ。もつとも、でくの坊同樣に法律を固守する出張巡査は既に六月に何號つきの諸漁場を切上て、ゐなくなつてるからだ。かういふ望外の獲物は、多少の景氣づけになるのだ。玉場での笑ひ話に、こんな時にうか〳〵捕獲された小鰊だから、馬鹿鰊だといふ樣なことがあつた。

弟の病氣は段々よくなる樣子だが、毎朝少し熱が出るし、まだ腰が立たない。

其二十

七月三日。晴。

今日は當地の有志家が數名訪問して呉れた。渠等の話を短く云つて見ると以下の如しだ。建網に關する法例は平岡長官以前に出來てしまつたので、一昨年議會に出した刺網公許の請願も握りつぶされてゐる。して、現長官は刺網公許のことはいいとしても、前事務官熊谷氏の面目に對し、如何ともし難いとして、放棄してゐるらしい。熊谷なる人は、その卑劣な、私利的な不親切な行動の爲め、馬鹿として、また惡人として、樺太住民に怨まれてゐる。

一人で建網業者の如く大資本を出し得ないものの爲め、組合組織を以て三十九ケ所に建網を張ることを許された時は、一時雜漁者が息をついたが、それもたつた一年切りの試驗で、資金の不足、一般財界の萎縮等の爲め駄目といふことが分つた。樺太政廳は人間よりも鰊の方を可愛がつてゐるといふ童謠的不平のあるのは尤もなことだ。その癖、漁民、その他が同島に土着するのを望んでゐるのでーーさうしなければ、本統の繁盛は望めないのは勿論だが――百姓でもない漁民に海岸で土を掘れなど命じて見て、掘らなければ二三年も住んでゐる雜漁者の小屋までも、鰊漁に邪魔だからと稱して、壓制的に打毀してしまふなど、官憲の遣方が丸で矛盾してゐるのだ。

建網業者等は殆どすべて北海道や內地に家を持つてるのだが、雜漁者等も多くは漁期限りで他へ引きあげてしまうのだ。土着して居るのは商業家に多い。だから、刺網公許運動もその主動者等は殆んど

皆商人側の人である。すると、政廳は『貴樣等は商人ではないか？漁業抔に喙を容るに及ばない』と云ふ樣な事を公言するのだ。然し、樺太政治の主要目的は早く土着の民を拵へて、獨立財政がうまく整　する樣になればいいのではないか？商人が却て刺網事件に熱心なのは土着民の繁榮を計るからである。漁業家等は、其の實大資本を投じた人も、小資本を運轉する人も、儲かれば爲るし、儲からなければ去るだけのことだから、今では、建網業者等も先きに二十萬圓の賄賂を醵金したほどの勇氣はないし、雜漁者等も亦永久の策を考へるだけの智慧と熱心とがなかつた。その上商人側の運動者等も運動とその出資とに勞れて、再び議會まで持ち出す準備が出來ないみじめな狀態にあるのだ。つまり、根氣負けがしてゐるのだ。して、この間にあつて政廳は得意げに死法死例を遂行してゐるのである。

この狀態を思へば、帝國議會の議員または堂々たる政黨員諸氏等が、私情的分子を包む高商問題などに騷ぐよりも、この樺太の人道的問題を當年の議會に持ち出す方が一層明案であらう。

其二十

七月四日。晴。華氏寒暖計、最高五十八度。

話は前日のつづきだが、之を要するに、土着者にのみ建網の特許を與へるのも一種の、然し姑息な、申しわけにはならう。また、土着者にのみ刺網を公許するのも亦いいと思ふ。然し、そこまで行くなら、今一歩進んで、總てに刺網を許す樣にするがいいのだ。これが島氏の公平な希望である。さうすれば、自然に土着者が多くなるわけだ。土着さへすれば必要上、また自然に土地を耕やす樣にもならう。マオカ附近は樺太中での氣候がいいところだから、左程人工を加へずして燕麥や野菜は出來るし、馬鈴薯の如きは北海道では一反に二三十俵ぐらゐだのに、當地では四十俵もあがるのだ。漸々人工を加へて行けば、如何に樺太は土地がよくないと云つても相當な農產物が出來る樣にもならう。

平岡長官は漁、農、林業に關する四大政策を携へて昨年來の議會に望み、無能の爲めに殆ど全く貫徹し得たものがなかつた。その結果でもあらう、漁、農、林業には殆ど冷淡で、ただ十二萬圓ばかりの補助金を引き出した石炭發掘の事業に許り熱心だ。それも尤もな點がないではない。曾て南端ノトロ岬附近で石炭が獨りでに燃え出して山火事を起したことがあるほど、この島の山脈には石炭が多いのだらうが、石炭は決して同島の不景氣と貧困とを救ふ早急の食物にはならない。その上、港灣から拵らへてかかつて先づ運輸の便を樂にしてやらなければならない。現今、それが出來てゐない。いたづらに官權を利用して、樺太は財政と制度とがどうなつてもいいと云ふのなら、島民はその無謀壓制の治者を戴いたのを不幸とあきらめて、餓死するか、然らざれば、同島を去るより外はないのだ。

然し政廳は他を顧みないで、石炭發掘に着手し、ブスタキでは政廳に於ける去冬の入用だけを試掘

したが、西海岸のトマリオロには、今回、運炭用の輕便鐵道工事費を入札に附し、三萬一千九百七十圓で落札したくらゐだ。それが爲めに、許多の工夫などが入り込み、トマリオロは多少の賑ひを添へてゐる。

其廿二

七月五日。晴。午前八時、寒暖計六十一度。

昨夜、オタトモから僕等の鑵詰製造主任が來たので、それをしほに取引上の關係者五六名を料理屋に招待して、宴會を開いた。

マオカには、藝者と酌婦とが總計百五六十名ゐるさうだが、そのうち日に一度のお座敷がつくものは半數に達しないさうだ。その他は遊んでゐなければならない。つまり、二三年前の好景氣の遺物としか考へられない。して、渠等はすべて娼妓と一緒に毎週一回の檢査を受けてゐる。

蟹は本年豐漁であつた。從つて鑵詰業者等も儲かるわけだが、東京の問屋からの金廻りが好くない爲め、當地の仲買人等は隨分閉口してゐる。蟹は樺太中でもマオカを中心として二十餘里の海岸が一番よく捕れるのだが、その間に大小二十五六箇所の鑵詰製造所がある。なかには、製造法も碌に知らないでやつてゐるから、直ぐ腐敗してしまふのがある。然し、それは、この頃では、充分制裁を加へられる樣になつた。

昨夜またオタモトから二番目の使が來た。雜漁者のうちに、急に引上げるものが多く出來たので、蟹の買方を相談しに來たのだ。雜漁者などは今日まで落ちついて漁をしてゐるかと思へば、明日は直ぐ家具をその船に乘せて去つてしまうのだ。して、來年は其處へ來るか來ないか分らない。

其卅三

七月六日。晴。寒暖計華氏五十八度。(晝間)

昨日、午前四時頃、當地の公園に登つた。市街の後ろの山にあるのだ。掛け茶屋一軒と新築中の眞岡神社との外には、人工を加へた物はない。ただ自然のままだ。海面を見晴す景色が如何にもいい。茶屋で休んでゐると、鑵詰に關係あるものが三四名集つて來た。ビールを飲み合つてゐるうちに、いつのまにか、後方の山々が近くまでガスを以て蔽はれてしまつた。海上も見えなくなつた。海上また は海邊でガスに襲はれる物凄さは、殊に孤獨でゐる時に襲はれる物凄さは、僕、初めて茅ケ崎の海邊で經驗したことがあるが、北海は特にそれが多いのだ。ただマオカは、樺太唯一の不凍港であるだけ、天候も嶮惡でなく、晴天が多く、從つてガスの襲來も少いのだ。この日に限つて、四五間先きは見えない程になつたので、丁度出帆時刻になつた定期船が汽笛を鳴らしてゐるばかりで、日の暮れる

まで出なかつた。漁船の歸つて來る時刻に出れば、必らずその一杯や二杯は乘り沈める恐れがあるからだ。

僕等は、一杯機嫌にうち揃つて、ガスを突いて山を下り、當市街の南端にある遊廓のはづれまで散歩した時、多少ガスが晴れて來たので、歸りがけによく見ると、遊廓は道の兩側に十五六軒の粗造家屋で成り立つてゐるが、それが明き家でなければ、建てかけたままうツちやらかされてある物で、實際その稼業をやつてゐるのは二軒しかない。遊女も總計僅かに十數名ださうだ。實に見じめな有り樣になつてゐる。僕等はそこから歸つて來て、明ぼのといふ料理屋で晩酌をした。

本日、山野天海といふ、樺太日々新聞社の眞岡支社主任が訪ねて來て、日日新聞の主筆を一人周旋して呉れいといふ依頼であつた。僕はそのことを認めて、讀賣新聞社の正宗白鳥氏のもとへ、誰れか適當なのはないかと云つてやつた。天海氏は長く樺太にゐて、身づから樺太通を以て任ずる人である。

今日から、職人の女房が看護人の代はりとしてオタトモから來たので、僕は病院で寢とまりすることをしないでいい樣になつた。弟の病氣も亦段々よくなつた。

其廿四

七月七日。晴。寒暖計、華氏六十度（晝間）

樺太政廳の中川一部長が視察の爲めに來たので、當地の官民が今晩歡迎會を催した。僕もその宴會に加つて見た。その席上で二三有志の演說があつて、すべて夫が刺網公許問題に關してゐた。演說者の一人が、政府がはの學者または技師の言が必らずしも正しいとは云へない證據として、マオカ港にこの春から殆ど一度も拔錨したことがなかつた小蒸汽を擧げたのは面白い皮肉であつた。

實際、二間足らずの小蒸汽二隻が當港にいつも碇泊してゐる。誰れが見ても、何の爲めにか殆ど分らない。よく聽いて見ると、沿岸漁業巡檢をさす爲に、政廳がわざ〳〵數千金を費して回航さして來たのださうだ。ところが、樺太沿岸の風波は漁業期に於てこれら小船が巡檢を爲し得るほどの平穩な海岸を與へない。警邏船としてこの一隻は今では殆ど無用に歸してゐるので、船員は毎日その甲板から釣りを垂れて、その日その日を送つてゐるといふわけなのだ。多少誇張的な言だが、樺太政治を穿つたところがある。

今晩の宴會で、雜誌黑白に關係ある岡上氏が、煙草專賣商人として、一部長に隨行して來たのに出會つた。

其廿五

紀行と印象